
異界トーキョー

チャンかけえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界トーキョー

【Nコード】

N1018V

【作者名】

チャンかけえ

【あらすじ】

異常事態の東京に閉じ込められた少年の冒険譚。晒し中

異変（前書き）

これからがんばるのでよろしくです。

ホラーだと思って読まれるよりは、rpgを意識したファンタジーにホラーの要素を足した作品だと思ってください。

異変

ハッと目を開けると、長く暮らす内に汚らしくなった馴染みのある天井が視界に広がった。

夕飯の後、満腹の気持ち良さに任せて、寝てしまったようだ。

立ち上がると、胃からだるさが襲って来た。

耐え切れず、またソファに座りこむ。

しばらくボーッとリビングを眺めていると、不意に自分の見える光景の強烈な違和感に気付き、思わず目をこする。

視界が全体的に赤みがかかっている。

ゲームとパソコンのやり過ぎで、目がおかしくなっているのだろうか。祖母の忠告を聞いておけば良かった。

カーテンを開け窓を見ると、空がやはり赤く見える。ただの赤ではなく、紅と呼ばれるような濃い赤である。

まるで赤いガラスを通して、ものを見ているかのようなのだ。

焦りと恐怖を覚えて、洗面台の有る風呂場へ駆け込む。下においてある体重計を蹴っ飛ばしてしまう。ドアを閉め、洗面台に向かう。しかし、今度は視界が赤くならない。鏡で自分を見るが、目に異常はない。ホーッと息を吐く。どうやら物が赤く見えるのではなく、本当に空が赤くなっているらしい。

安心すると、今度は恐怖と好奇心とが一緒になって沸き上がって来た。

異常気象か公害か。何かが解る事を期待してテレビをつける。

無表情なイメージの強い女性アナウンサーが顔色を変えて、何も言わず、原稿とにらめっこしている。他のスタッフが騒いでいる声がマイクに入ってしまったている。

アナウンサーは、衝撃で読み上げる事を忘れているようだ。

二十秒ぐらい経ってようやくこちらを向くと、震える声で、ニュースを読み上げはじめた。

「今日、午後6時ごろ、大きな地震の後、東京の空が急に赤くなる現象が確認されました。」

地震の影響で、東京の一部の地域では、電気が止まっているようです。また、透明な壁のような物によって東京からの移動が出来なくなっている模様です。また、これは信じられないといえますか、未確認の情報ですが、地震で死亡が確認された死体が動き出して人を襲っているという情報が入って来ています。皆さん落ち着いて行動し、屋外に出ないようにして下さい。このチャンネルでは、この地震と異変に関するニュースを継続してお伝えします」

現実味の無い情報が急に入ってきた。

地震があったのか。寝ていて気づかなかったのだろうか。

いや、それよりも、どこの誰が何をしたら、東京を壁で囲む事が出来るというのだろうか。

死体が動き出して人を襲うというのは、要は、ゾンビになるということなのか。何にせよ、あまりにも非科学的な話である。

心臓の音が止まらない。

アナウンサーは確かめるように何度も、同じ内容の原稿を読み上げている。

いつもの癖で、自分が落ち着くために、机の上におかれた携帯電話を手に取り、まず誰かにメールを試してみる。

相手の安全を確かめる簡単な文面で、メールを一斉送信すると、すぐに電話がかかって来た。

「もしもし」

「もしもし。生きてる？」

「いや、生きてるけど」

「周り誰かいんの？」

「鈴木とかシンとか」

「何してた？」

「カラオケしてた」

取り乱して、大騒ぎするのともうかとは、思うが、状況に適さな

い、間の抜けたような会話である。思わず笑いがこぼれそうになる。
「じゃあ今、外出られないの？」

「うむ。さっき、カラオケの店員が知らせに来たんだけど、ゾンビがマジで外うろついてるらしい」

ピコン！ という音と共に「速報」の文字がテレビの場面の上部に映る。

「何か、速報入ったわ」

「うむ」

あちらも、カラオケボックスの中のテレビで同じ局のニュースを見ているようだ。会話を止め、テレビから聞こえる声に集中する。

画面に映ったアナウンサーは放心状態で表情がない。

「たった今、実際に死体が動いている映像が入りました。こちらです。」

画面が、一瞬、黒くなった後、カメラの映している映像に切り替わった。

カメラマンが走りながら撮影しているからか。何かが迫ってきているが、カメラがぶれてよくみえない。

ある程度距離を開けたところで、ようやく動きが止まり、カメラに対象がはっきり映った。

それは、確かに動いていた。遠目には酔っ払いのようにも見える動きで。

少しずつカメラが被写体にアップしていく。

背筋を何かがなぞるような感覚を覚える。

死体が血の気の無い蒼白い顔をして、焦点の合わない目から血を流しながら、笑みを浮かべ、こちらへ迫ってくる。

カメラマンが再び走り出し、建物に逃げ込んだ所で映像は終わっていた。

頭が真っ白になり、画面を見たまま、しばらく固まっていた。今自分が見ているものは、現実なのだろうか。

「あー、わけ解んないね」

耳に当てていた携帯からの声で、止まってしまった思考回路が溜まった水が流れ出すように動きだす。

「ああ。だな」

俄には、信じがたいが、東京に閉じ込められているということは、物資が外から届かないということだ。食料は大丈夫なのだろうか。

家に立てこもって、助けを待つにしても食料が必要だ。

台所の冷蔵庫の中を見る。

だが、元から、家で料理をして、皆で食事をするような習慣がこの家には無い。

冷蔵庫の中には、料理の具材などは無く、朝食用のヨーグルトやらゼリー類やらがあるだけだ。

「カイ？ どうした？ 何ゴソゴソやってるんだ？」

「あ、んー。家に食べ物あるのかなあって思って、冷蔵庫の中身見てたんだけど」

「どうだった？」

「いや、安心出来るほどは、無いな。
そっちはどうなんだよ」

「七時ぐらいに、店員さんが、ちよつとした食料届けてくれたけど、どれくらい食料があるのかは解らないな」

「そうか。まあ、俺、とりあえず、食料集めに行くよ。家の周り元からそんな人いないから、ゾンビもそんなに居ないと思うし」

パニックを通り越した思考が、冷静に動き出している。

「え、マジで？ 今、外に出るの？」

「うむ……。ヤバイかね？」

「……。まあ、このまま動けなくても、死んじやうのは一緒かもしれないけどさ。まあ、お前が生きたいなら行きなさいな」

相手も同じ事を考えたのだろう。確かにその通りだ。この状況がずっと続くとも限らないが、今のところ状況が打開される見込みはない。このまま動けずに、食料が尽き、餓死してしまうのであれば、結果は同じである。

「うむ。じゃあ、行ってきます」

電話を切りながら、廊下出る。電球が切れて、明かりの届かぬ奥の方は不気味に見えた。何か近づいて来そうな気がして、思わず目を背ける。

隅のクローゼットから背負えるタイプのスーツケースを引っ張り出してくる。旅行に行くようなことも少なくなつて、多少ホコリを被っている。

だが、これもオシャレでこそないが、ちゃんとしたアウトドア用品のブランドの物で、買った当時はそれなりの値段だったはずだ。

全体を一通りはたいて、ホコリを落とす。

背負えるとは言つても、かなりの大ききで、常に持ち歩けるような代物ではないが、十分に使えそうだ。

音を立てぬように、ドアを開ける。死体達はマンションの中には入つて来ていないのだろうか。

そう思つた瞬間、階段のほうから、悲鳴が響いた。

「キヤーアアア！」

サツと部屋に戻り、ドアの隙間から、様子を見る。

「もうマンションの中にも入り込んでるのか」

背中のスーツケースは何も入っていないくても、既にかかなりの重さがある。逃げるとなれば、邪魔になつてしまうかもしれない。

エレベーターを使いたいが、狭い空間では、もし死体に遭遇したときに、逃げられないだろう。移動には、階段を使うしかない。

「アアアアアアア！」

叫び声のようなものが聞こえるが、死体の声なのか、襲われている人間の声なのか、もう解らない。このまま死体が増え続ければ、外に出られなくなる状況になることも考えられる。ここは、多少無理をしてでも、動くべきかもしれない。

意を決して、ドアから飛び出し、大急ぎで下のスーパーを目指す。マンションの玄関で、脇に捨てられていた赤い傘が目に入った。

壊れている訳では無いようだ。手に取り、剣道の構えをとってみる。

竹刀とは勝手が違うが、これも使えそうだ。

コンビニなどにあるビニール傘ではない。

おそらくそれなりに上等なものなのだろう。大きさもあり、武器として安心出来るほどではないが、一応、丈夫に出来ているようだ。自分と同じ事を考える人間が何人いるか解らない。死体達に直接会わずとも、切羽詰まって蛮行に走る人間に出会ってしまう可能性もある。護身に使うには甚だ心許ないが、無いよりマシかもしれない。

試しに振り回してみるが、巨大な荷物を背中に背負いながら傘を振る姿は、我ながらカッコつけても様になってないと思い、恥ずかしくなったので止めた。

ガラス製のドア越しに外を見る。強すぎる赤色にめまいを起こしそうになり、硬く目を閉じる。

何度も瞬きをして、空を見ないようにして、もう一度、道路を見渡す。生き残っているほとんどの人間は、屋内に籠っているのだろう。見える範囲に人影は少ない。

だが、逆に言えば、見えている人影は、あの動く死体である可能性が高いということだ。

テレビに映ったアップになった死体の不気味な笑顔が脳裏に浮かぶ。

人影を見ないように、すぐ隣のスーパーに滑り込むように入る。誰にも見られてはいないだろうか。クーラーの冷気が吹き込んでくる。

上着を持ってくるべきだったか。スーパーの中は、明かりはついたままだが、人影は無い。

スーパーの中に居た客は、死体達が入って来た建物を避けて、どこかに集団で逃げ込んでいるのだろうか。だが、逃げ込むのに最適であろう俺が住むマンションには人が集まっている様子はなかった。よく言われる「嫌な予感」がする。

キョロキョロしながら、ジュース売り場にたどり着く。気付くと

ゼエゼエと息が荒くなっていた。汗が額をなぞる。自分自身で思っているより緊張しているのかもしれない。大きく深呼吸をする。息が整ったのを確認する。背中のスーツケースを下ろし、お茶や水、スポーツドリンクをかき集め、中に詰める。

ふと上を見ると、電灯がチカチカと点滅している。不安になり、しばらく見守っていると、バチバチっと音を立て、消えてしまった。外の赤い光以外、明かりがなくなってしまった。停電だろうか。いや、そもそも電力の供給は止まっていないのか。

移動しようとして後ろを振り返ると、不意に耳をつんざく悲鳴が響いた。

「イヤアアアア！」

少女のものである。もう何度も同じように悲鳴をあげたのだろう。しわがれて、かすれ、低くなった声は聞く者を恐怖や不安、嫌悪感の混じった歪な絶望感で飲み込む。

緩慢な動きでノソノソと一カ所に集まっていく奇妙な人影を見て、ようやく状況が把握出来た。

スーパ―の中にいた人々はどこかに逃げ出したのではなく、スーパ―の中で全滅していたのだ。

地震で建物が崩れた様子がない事を考えると、おそらく死体達によっただろう。

そして、今、死体は最後の生き残りであろう少女を角に追い詰めているのだ。

少女と目が合い、思わず商品棚に身を隠す。

「だずげで！だずけでよ！いやだ！死にたくない！」

無心になって携帯食料とパンを荷物に詰める。助かるか解らない他人より自分がかわいい。

そして、去り際に半ばやけくそにワインのビン而死体達の集まっているのとは別の角に向けてほうり投げた。

カシャーンというビンの割れる音とビシャツと内容物の液体が飛び散る音がした。

陽動と呼ぶのも憚られるレベルの作戦である。少しは注意を逸らせれば良いが、効果はあまり期待出来ない。

だが、予想に反し、死体達は大きな音に反応し、ニコニコと笑顔を浮かべながらワインの投げられた方向へ向かっていく。

「よしや！」

小声で勝鬨をあげる。

犬、いや昆虫程度知能しか持ち合わせないのかもしれない。

横目に死体を確認し、出口に走る。

「うわあああああああ！」

不意に目の前に青白い顔が現れた。出口に出る角を曲がった所で、死体の群れと鉢合わせてしまったのだ。

一様にニコニコと奇怪な笑顔を浮かべ、たまにケラケラと楽しげな声をあげながら迫って来る。死体の表情は外の赤い明かりに照らされていつそう不気味に見える。

やってしまった。おそらくスーパーに入るまでに姿を見られていたのだ。

陽動した死体達にまで気づかれて、挟み撃ちになるのを避けるために通路にバックステップをする。

出口は二つある。右側の出口に死体が集まっている様子はない。脇目もふらず、もうひとつの出口へ走る。

ノソノソとではあるが、外にいる死体達もそちら側に移動し始める。相手の速さはせいぜい速歩き程度のはずだが、自動ドアが開くのが遅く感じる。

間に合わないか。

開き始めたドアの僅かな隙間を抜け、手を伸ばしてくる先頭の死体の手を身をよじり、間一髪で躲す。

このまま死体達を車道側に避けて、マンションに戻ることも出来るが、自分のいるマンションの場所が 気付かれるのは避けたい。傘で思いつき死体の手を弾く。

「アギィアアギィいいオ！」

死体は蟬の鳴き声のような声で叫び、顔をしかめた。痛覚は有るようだ。

サツと踵を返し、マンションとは逆の方角へ走り、角を曲がりスパーとマンションの周りを一周して、再びマンションの側に出る。今度こそ誰にも見られないように、マンションの玄関へ急ぐ。

ふと右を見ると、隣の家が、崩れて、うちのマンションに倒れ掛かっている。本当に大きな地震だったらしい。

我ながら、よく眠っていられたものだ。

後ろを確認し、追ってくる死体がいなか確認し、ドアの中に駆け込む。重い荷物を背負って走る運動は思った以上の負担だ。

（にしても奴等、何てうれしそうにこっちを見やがる。冗談じゃない）

外からは見えない角度の壁に背をくっつけて、座り込む。背中から荷物を外し中身を確認する。これで、節約すれば三ヶ月は生きられるだろう。食料を得て、他人より優位に立てた優越感と安堵感で思わず笑みがこぼれた。先程の少女は無事だろうか。せっかく助けたのだ。無駄になったとは思いたくない。

外に出ることのリスクは、覚悟の上で家をでたはずだが、急に不安になってきた。

屋外に出ても大丈夫だったのだろうか。

すぐにならずとも、時間が経つと自分もゾンビになってしまうのではないか。色々な仮定が頭の中を行き交い混乱する。

落ち着こうとして息を整えていると、突然、肩を叩かれた。

「ふういひいあいやあああ！」

思わず甲高い悲鳴を上げ飛び退く。振り向くと、先程の少女が歯を食いしばり物凄い形相で仁王立ちしているた。

いつの間に入り込んだのだろう。

「あんた！アタシおいてったでしょ！」

いつのまにか腰に下げていた傘を抜き取り、やたらめったら振り回している。

あまりに恐ろしい体験をして逆上しているのだろう。

身を守るために思わず出した手が少女の顔に当たる。少女はバランスを崩し、後ろにのけ反った。良い手応えと嫌な音がした。

「あ、あ、うわ。ごめん」

少女は、いよいよ大声で、泣き始めてしまう。

「バカ！ 死ね！ 死ね！」

死体に気付かれてはかなわない。マンションの階段を駆け上がる。行きより重くなった荷物のせいで、息が切れそうになる。

少女は文句を言いながら、まだ追いかけてくる。付いてきて、どうするつもりなのだろうか。

しまいに、部屋の中まで入って来たところで、少女が急に表情を変えた。

少女はじつと一点を睨んで、黙り込んでいる。

「どうかした？」

少女の視点を追ってみるが、その先には特に何も無い。しばらくして、ようやく少女が口を開く。

「ねえ。この家、いるよ」

「え、何が？」

「ゆうれい」

俯いて、深く溜息をつく。

「信じてないでしょ。」

少女は、頬を膨らませ、また不機嫌そうな表情をしてこちらを睨んでくる。

「いや。信じてるよ。その上で、面倒臭い事になったと思って。」

本心である。死体が動くのだ幽霊がいたとしても、もう驚けない。立ち尽くしている少女から、隙について、傘を取り上げた。

少しは怒りが落ち着いたのだろうか。少女はこちらを睨みつけただけで、騒ぐ事はしなかった。

「その傘も何か憑いてるよ。あんまり触んない方が良いよ。さっき急に明かりが消えたでしょ。あれ、そいつのせいだよ」

さつきまで、あんなにしつかり掴んでいたくせに。

「ああ。そうなの。気をつけなきゃな」

そう返事をしたものの、今は何か手に持っていないと落ち着かない。
い。

傘を強く握り柄を撫でた。

異変（後書き）

どうでもいい情報だけど、大体の話の筋は先に考えて作るようにしています。

危機（前書き）

感想をいただけると幸いです。楽しんでいただください。

危機

ニュースの速報が聞ける場所で眠りたかったので、テレビの在るリビングのソファで眠るつもりだったが、結局、ソファには少女が寝てしまい、気付くと、自分は床で眠っていた。

だが、床のひんやりとした冷たさが、逆に心地好い。

相変わらず空は赤く、つけっぱなしのテレビは、内容の同じニュースをやっている。

固い床で寝ていたのが悪かったのか、なんとなく体の節々が痛い。携帯がチカチカと光り、メールの着信を知らせている。寝ぼけ眼のまま、携帯を開き、メールを確認する。

送信者…刈谷

腹減った。コンビニ行っただけ、もう食料無かった。駄目だ。

刈谷が居るであろうカラオケボックスは池袋の外れの方にあるはずだ。言うまでもなく、池袋は東京でも比較的大きな町である。人通りが多い分だけ、地震による死者は多く、それだけ死体、ゾンビの数も多いはずだ。食料を取りに行こうにも、すぐには身動きが取れなかったのだろう。

カラオケボックスの中にも客に出すための料理やその材料があるはずだが、その食料も、すぐに底をついてしまうだろう。

自分の知る人が飢え死にするというのはあまり想像したいものではない。

助けに行こう。食料調達の時と同じ事だ。地震発生から数時間が経過し、既に時刻は、深夜に入っている。恐らく家族は、すぐには帰って来れない状況にあるか、既に死んでいるのだろう。このまま助からないのなら、せめて身近な知り合いの側にいた方が死ぬにしても心安らかでいられる。

決心してしまうと、今度は、また、好奇心が蘇って来た。ゾンビがうろつく町を歩くことを想像すると、なぜだか心が躍る気すらした。

再びクローゼットを開き、今度はリュックサック二つ取り出し、リビングに戻り、少女を揺り起こす。

「なに？」

寝起きで機嫌が悪いのだろう。また、こちらを睨みつけてくる。

「行きたい場所があるんだ。手伝ってくれない？」

そう言っただけのリュックサックと昨日取ってきたスニーカーの中、食料を差し出す。

「もう、置いて行かないでしょうね」

ハイハイと頷いて適当な返事をする、今度は、舌打ちをして、そっぽを向いてしまった。

あまりに女性らしからぬ動作に思わず苦笑いをする。

「このあたりなら、まだ食料残ってるかもしれない。これに詰めよう」

少女は呼びかけに反応せずに、リュックサックを背負った。差し出された食料をぶん取ると、口に押し込み始める。

これだけ感じが悪いと、友達なんていないのではないのか。

少女はボーッとテレビを見ている。

「これからどうすんの？」

少女がボソリと呟いた。

「さあ。わかんねーや。本当に」

正直、初対面の相手と気さくに話すほど社交的な性格では無いが、これからどれだけ一緒に居ることになるか解らないので、そんな事は言っていられない。

思春期の娘を持った父親はこんな気分なのではないだろうか。無視したりは出来ないが、下手に話し掛ければ、相手は機嫌を悪くしてしまう。

「どこ行くつもりなの？」

少女はこちらには視線をくれず、空を睨みながら、話し掛けてきた。

「知り合いを助けに行きたいんだ」

それを聞くと、少女は意地の悪い嫌な笑みを浮かべた。

「カッコつけちゃって」

いよいよ憎たらしくなってきた。食料が底をつき始めたり、敵に襲われてピンチになったりしたら、真っ先に切り捨ててやろう。

「いや、でも、大勢でいた方が安心しない？」

調子を合わせて笑う。

フツと鼻を鳴らして笑うと、少女は、またブーツとし始めた。

「お茶」

少女がまた、ぶっきらぼうに声を荒げた。

すぐに、スポーツドリンクを渡す。

ゴクゴクと喉をならし飲み始めたと思ったとたん急に少女がこちらに視線を向ける。

「キャアアアアア！？」

「え、どした？」

また、俺には見えない幽霊でも見えているのだろうか。

後ろを見ると、カーテンから何か黒いものがチラチラと見える。

ここは二階である。カラスか、風で飛んできたゴミだろうか。

二三步近づいて、確認する。

ゾツと寒気が走った。恐怖のあまり目をそらしたくてもそらすことが出来ない。

チラチラ見える黒い物は人間の髪であった。白塗り女が、ずっとこちらを睨んでいたのだ。

「ヤバイ！ 逃げるべ！」

荷物を背負い、床に転がっている傘を手にドアに向かって走る。

少女が遅れて後に続こうとすると今度は勝手にドアが閉まった。

少女が部屋に閉じ込められる形になる。

「イヤア！」

窓の外にいたはずの女はいつのまにか室内に入り込み、少女の後ろから這ってくる。

「ホラー映画の見すぎだ!」

前蹴りでドアを蹴破る。

木製のドアが板チョコのように、二つに割れる。隙間から抜け出そうとする少女を引っ張り出し、玄関に走る。

例によって例の如くドアのカギが開かない。鉄製のドアだ。破壊は出来ないだろう。

「うそでしょ!」

少女は半ば怒りながら、カギと格闘している。

だが、ドアはガチャガチャと音を立てるだけで、動かない。玄関の側のすぐ横の部屋から、女がヌツと顔を出す。どうやって移動したのだろうか。

瞬きもせず、こちらをずっと見ている。

パニックになり咄嗟に傘で放つ。傘の先が女の目をえぐる。

「アアアアアアアアアアアアイイガー!」

女は呻いて倒れ込む。

「オシャ! 効いた!」

ガチャという音になり、ドアが開く。

「やった! 開いた!」

少女がドアの外に飛び出したのを確認して、自分も外にでる。マシシヨンの廊下には、女の姿は無い。

「助かった」

少女は、ヒューヒューと不自然な呼吸をしている。

「大丈夫?」

手を差し出すと、思い切りはたかれた。

「また、置いてったな!」

「え。いつ?」

「リビングで!」

「あれは、ノーカンでしょ。しかも、助けてあげたじゃん」

少女は、わざとらしく大きな足音を立てながら、一人で歩き始める。

危機（後書き）

感想をください。後から急に路線変えたと思われたくないから、言うけど、最終的にファンタジーっていうか r p gっぽい展開になります。

始動（前書き）

そろそろ疲れてきましたが、できるだけ、更新し続けたいと思います。

始動

少女は一人で勝手に進んでいき、マンションから出ると、こちらを振り返った。

「どっち行くの！」

「えと、スーパーの食料は多分もうないから、コンビニ行こう」

通りを挟んで、左斜め前のコンビニエンスストアを指差す。言い終わるか終わら無いかぐらいの所で少女はまた移動し始めた。

死体達に見つからないよう目立たない道を行きたかったが、引き止めるのは面倒なので、黙って付いていくことにした。

死体達は、どうやらせいぜい速歩き程度の速度でしか移動できないらしい。広い場所なら一定以上の速さで移動していれば、囲まれたりしない限り、危険は無いだろう。

少女はスリとガードレールをすり抜け、スピードを緩めず突き進んでいく。周囲を確認しながら、自分も車道に出る。車は通らないと解っていても、思わず左右を見てしまう。

コンビニの前まで来た所で、少女が立ち止まる。

「なんか、ジジイいる」

見てみると、中で髪の毛の白い老人が震える手でパン類を集めている。

「ああ」

食料の奪い合いは覚悟していたが、老人一人ならば気にする事もないだろう。

自分達も中に入り、食料かき集め始める。

狙いは、やはり持ち運びしやすい携帯食料、クッキーやパン類だ。店内は、クーラーが効いていて涼しい。電力はちゃんと流れているようだ。

老人はちらりとこちらを見ると、大慌てで、食料の入った買い物袋を背後に隠したが、こちらが軽く会釈をすると、会釈を返し、また食料を集め始めた。

「あのジジイが持つてる分取り上げようよ」

目を遣ると、少女は駄菓子類を集め終わり、老人の前に仁王立ちしている。

「え、いや。それは、ちょっと無いんじゃないか？」

老人は少女を見上げてオドオドしている。

少女は気に食わなさそうな顔で、ふーんと言うと、老人の食料を取り上げる代わりに、残りのパンを一気にリュックサックに詰め込んだ。

「あ、あ、あの」

老人は何か言おうとしているが怯えてしまって、動けずにいる。終いに、助けを求めるような目でこちらを見て来る。

「もう、かばんに入らないんじゃない？」

ほつといても死んでしまいうような老人がこれ以上追い詰められるのはいたたまれない。直接、反対して言い争いになるのは億劫なので、他に理由をつける。

「いいわよ。手で持つから」

理由は解らないが、少女は何が何でも、食料を老人に渡したくないようである。

「でも、こっから結構歩くよ。ゾンビに襲われたときに手がふさがってるのは、マズイよ」

「うっせーな！」

そう怒鳴り、老人を睨みつけると、少女はかばんに入り切らなかつたパン類を床にたたき付けた。脇に重ねてある雑誌を蹴飛ばし、店を飛び出す。

目の前で老人が申し訳なさそうにまたパンを集め始めた。

謝罪の意味を込めて、また軽く会釈をし、自分も店をでる。

「行こう」

出口の脇に立っている少女に声をかける。

自分のぶっきらぼうな声で、自分が苛立っていることに気付く。少女も一連の異変で、ストレスが溜まっているのだろう。だが、

いくらなんでもあんまりだ。

遠くの方から、こちらに気付いた死体達が、近づいてくるのが見える。追いつかれないとは、解っていても、やはり怖い。

「軽く走ろう。さすがに歩いてるだけじゃ囲まれるかもよ」

そう言って、少しスピードを上げると、少女は何も言わずに後ろからペースを合わせて付いて来た。

歩いていると、時々崩れた建物が目に入る。良く考えると、うちの古いマンションが崩れなかったのは奇跡的なことかもしれない。

地震。地震という言葉を思い浮かべて、有ることに気付く。余震らしき揺れがあれから一度も起こっていない。それ以外にも理解不能な事は、いくらでもあるが、やはり今回の異変は最初の地震から普通のものでは無かったのだろうか。

少女がコインランドリーの傘置きに入っていた傘を抜き取る。武器にするつもりなのだろう。

強がっていても、怖いものは怖いようだ。いや、怖いからこそ、イライラし、他人に当たっているのだろう。

だが、こちらも一々それに付き合っているほど余裕はない。少女の持っている食料を奪い取り、置いて行きたい衝動に駆られる。

しかし、それでは少女とやっていることが同じになってしまう。道を進みながら、池袋への行き方を考える。

大通りに出ないように脇道を通って行けば、大丈夫かも知れないが、電車の線路の上を歩いて行ったほうが敵は少ないかもしれない。

「線路の上を行こうか」

「歩きにくくないの？」

「ゾンビに出くわすよりいいよ」

「ふーん」

さすがに老人にしたことに反省しているのか、少ししおらしくしている。

冊を飛び越えて電車の線路にでる。思っていたより高い位置から落ち、足に衝撃が走る。電車が動いている様子はない。

ゴツゴツとした岩の敷き詰められた線路は如何せん道がわるい。
少女は転びそうになりながら、ついて来る。

何も考えずに歩き続けるうちに、少女がかなり距離が開いてしまった。

線路に腰掛け、少女が来るのを待つ。

足に飛び付き血を吸おうとする蚊を払い、空を見る。

このままでは、東京に閉じ込められたままであれば、多少足掻いたとしても、最後には、間違いなく死んでしまうだろう。

そう解っているはずなのに、実感は沸いて来ない。

始動（後書き）

やっと書き終わった。

到着（前書き）

自分の文章に自信がないわ・・・。

到着

線路に交差する道には、春になれば桜が咲く。もう何度も見ているはずだが、それでも毎年感動させられる。

だが、次の春までに自分が生きていられる可能性は絶望的に低い。来年までには、いや、あと数ヶ月以内は自分の存在が無くなる。死への実感は、相変わらず沸かないが、それは、悲しく少し怖い事のように感じた。

「ねー。まだ？」

「もう5分もかかんないよ」

死体達が線路の外から、こちらを覗いている。先程からずっと線路の柵の外から付いてきていたのだ。

さすがに一体にも見つからないというのは無理だったか。

柵を乗り越えようとする死体達を傘の柄で押し戻す。

「アア、アア、アー」

奇妙な声を上げて死体が地面にたたき付けられた。

初めこそ、不気味で恐ろしかった死体達にも、さすがに慣れてきてしまった。

「ウガー！」

柵の外にいる死体を威嚇してみる。

死体は特に怯えることもなく、不思議そうな表情でこちらを見つめている。

「バカじゃないの？」

遅れて付いてきていた少女がようやく、追いついて来た。あきれた目こちらを見てくる。恥ずかしいような、照れくさいような気持ちになって、笑ってごまかす。

歩調を合わせて、また歩き始める。

電柱の上にカラスが止まっている。東京にも野生の動物達がいる。彼らはどうなるのだろうか。カラスは最終的には、死体達を食べて

生き残るかもしれないが、甘やかされた飼い犬などは、飢え死にしようだろう。

いや、他人の心配をしている時ではない。自分達が彼らを食べてでも生き残らなければ、ならなくなるかもしれないのだ。

「お、あれだ」

線路の先に駅が見えた。ここから先は必ずしも駅を目指すよりも、直接目的地に向かった方が良いかもしれない。

幸い柵の外に死体達の姿はない。振り切ることが出来たようだ。

「こっから外に出ちゃおう。その方が早いよ。」

「もう疲れたんだけど。」

いつか言い出すと思っていた台詞だ。池袋は広い。町の中を移動するだけでも、それなりに歩かされる。このまま歩き続けるのは不可能かもしれない。

「脇道に入って、少し休憩しよう。」

線路をぬけ、住宅街に入る。二人で玄関先に座り込み、食料をつまむ。

「アンタ何歳？」

少女はそう質問したものの、相変わらず、こちらには、興味の無さそうな表情をしている。

「17」

「年下だろ。タメ口きてんじゃねえよ」

「え！ 年上？」

「18だよ。つかお前、中学生じゃないのな」

性格も見えた目も子供っぽいのは自覚があるが、こいつに言われたくない。

「にしても面倒くさいな。いい加減にしろよ。いつまで連れ回すんだよ」

少女が大きな欠伸をした。

「ごめん。遅くならないうち着きたいし、そろそろ行こう。」
遅くなったからといってどうということもないが、確かに疲れて

きた。早く休みたい。

街中を突っ切っていければ、すぐに着くのだが、人通りが多いところは死体も多いはずだ。

それは出来ないだろう。

仕方なく、町の人気のない外れの方を遠回りして向かうことにする。余り考え無しに動いてしまったが、下手をすれば、ここからの道の方が長いかもしれない。

「どこ向かってるわけ？」

「ちよつとはずれのカラオケボックスなんだけど・・・あっちな」
既に何回も、通ったことのある道を景色を楽しむ事も無しに、歩き続ける。

意識がなくなるくらい歩いたところで、ようやくカラオケボックスについた。ぶつくさ文句を言っていた少女も、疲れきって無言になっている。

カラオケボックスの中を覗き込む。中に店員らしき男が見える。

「ヒイ！」

目が合うと、こちらを死体だと思ったのか、悲鳴を上げた。

「人間です。中に入れてください。」

「早くしてよ！ ゾンビ集まって来ちゃうでしょ！」

少女の怒鳴り声に、反応して、店員がドアのロックを開ける。外が見える場所にカウンターがあったことで、自動ドアをすぐにロック出来たのだろう。そうでなければ、ここにも死体達は入り込んでいたかもしれない。

店員は二人が入ったことを確認すると、大急ぎでドアをロックする。

「君達、何故こんなところにいる。外に出ても大丈夫なの？」

「いや、その、それよりも、刈谷っていう客が来ていませんか」

店員は蒼い顔で、首を振る。

「いや、わからない」

自分で探した方が早そうだ。

「そうっすか。ちょっと探させてください。あと・・・これ。良ければどうぞ。もうあんまり残ってないけど」

携帯食料を店員に分けて、階段を駆け上がる。

到着（後書き）

今年の夏は少し涼しくないですか？

進展（前書き）

がんばります。

自分の文章のおかしさに気づいたので、しばらく修正作業をやりたいと思います。

ストーリーにもある程度、変更を加える予定です。

進展

「何で嘘つくのよ。食料たくさんあんじゃん」

少女が小声で話し掛けて来る。いちいち自分の言動の意図を説明するのは、正直面倒だ。

「食料が大量にあるのがばれたら、それが目当て狙われるかもしれないでしょ。

ていうか、俺、友達探してから戻って来るから、ちょっと休んでよ」

少女はそれを聞くなり、そっぽを向いて、歩いていき、受付の隣にある客用のソファ二座り、くつろぎ始めた。

どうやら言う通りにしてくれるということらしい。

「疲れたー」を連発し続ける少女を連れ回すのは、こちらにもストレスだ。

階段を見上げる。大した段数ではないが、重い荷物と長距離の移動による疲れのせいで、足が思うように動かない。

しかし、食料を奪われる可能性を考えると、荷物を何処に置いて行くことは出来ない。階段を一段、上がる度に中の荷物がガサリと音を立てた。

やっとのことで2階に着く。

地震発生時、客は余りいなかったのだろうか。ほとんどの部屋には明かりが付いていない。唯一奥の右側の部屋から明かりが見える。疲労で足が震える。もう一度、階段を上る事を想像すると、それだけで何だか気分が悪くなった。

刈谷達のいる部屋が、この部屋であることを切に願う。だが、部屋を覗くとそこには、刈谷達の姿は無かった。

カップルが部屋の隅に並んで座っている。二人共、テレビを食い入るようになっている。

男の方がこちらに気付いた。

「すみません。間違えました。」

そう言って、また階段へ向かう。

少し休んで行けば、良い話なのだが、長い時間少女を待たせると、また文句を言われる。どんなに辛くとも、後一回だ。そう自分を鼓舞する。息を大きく吸い込み、肺に空気を貯め、一気に走り出す。もう限界を超えてしまったからだろうか。思った程辛くはない。だらだら上るより、始めからこうした方が早かったのかもしれない。

最後の一段を昇りきり、前を見ると、見覚えのある緊張感のない顔がドアから見えた。

バン！とドアを開け、スーツケースを机の上に下ろす。部屋の中の全員の視線がこちらに注がれる。

「お………！ カイ！」

自分の名が呼ばれたが、反応せずに、そのまま一階まで駆け降りる。

少女は荷物を脇に置き、携帯をいじっている。

「見つかった！ 行こう！」

喜び勇んで、今来た道を引き返そうと振り向くと、急に髪の毛を引っ張られる。

「イッタ！ 何すんだよ！」

痛みと怒りで声が大きくなる。

少女は荷物を押し付けている。まさか運べというのだろうか。

少女は、手ぶらで階段をスタスタと上がっていく。

店員が心配そうな目でこちらを見ている。

「運ぼうか？」

是非、お願いしたいが、食料が入っている事を悟られる訳には行かない。これ以上ないというほど、精一杯爽やかに作り笑いをする。「いえ。大丈夫です。ありがとう。」

上っていくうちに、足の感覚がなくなり、そのうちに意識が飛び、気付くと3階にいた。

ドアの前で少女が待っている。

すれ違い様にわざと聞こえるように舌打ちをする。

少女はこちらを見ることさえせず、まるで聞こえていないように携帯をいじり続けている。

ドアを開け、その場で仰向けに倒れ込む。もう一步も歩きたくない。

刈谷が携帯食料をかじりながら、こちらを見下ろしている。

「お帰り」

「ああ」

やっぱりどこか間の抜けたような会話である。少女が体を踏み越え部屋に入る。

「グアア！」

靴の踵の角が腰にあたり、激痛が走る。

少女は挨拶もせず、ソファーに横になる。見ず知らずの人達の前で良くそこまで大胆に振る舞えたものだ。

もはやこの少女に尊敬の念さえ抱き始めている自分に気付く。

「知り合い？」

鈴木がヤキソバパンを頬張りながらこちらを見た。

皮肉たっぷり

「まあ、性格の良い子だよ」

そういうと、刈谷が小さな声で笑った。

「そうみたいだな。」

少女は、シンに絡んでいる。

「くっせーなデブ。暑苦しいんだよ！どっか行けよ！」

シンが反応に困って苦笑いしている。

「シン、もうそいつ無視していいから」

少女にまた睨まれる。

「ハ？テメエ。食料、運んでやったのに、アタシに刃向かうわけ？」
優しく接し続けるのは、もう諦めよう。

「気に食わないなら、どっか行けよ。食料置いて！」

少女は顔を真っ赤にして、机を蹴り飛ばす。

「裏切り者のクソったれ！」

そう叫ぶと、そのまま隣の部屋へ行ってしまった。

これでやっと落ち着ける。

「よくこれだな。重い荷物背負って」

「いろいろ苦労したんだぜ。感謝しろ」

「カイさん、マジカッケーッス。」

鈴木はどうやら茶化しているつもりらしい。

「このクソったれの恩知らずが」

そう言って、笑う。

数時間、緊張しっぱなしだった体がほぐれていく。気が緩むと、眠気が襲ってきた。意識が遠退いて行く。食料を一度に食べ過ぎないように皆に言わなければならぬのだが、瞼が重すぎる。少し寝てしまおう。

気付くと、自分は、過去の記憶の中にいた。どうやら夢を見ているようだ。

合流（前書き）

感想がほしいと書くと、書いてもらえないといわれました。でもやっぱ欲しいですW W W W

合流

小さい頃の記憶である。

正確には、小さい頃に見た夢の記憶だ。

特に何か感じたということもなく、何度も見たというわけでもない夢を何故、今になって、また見ているのだろうか。

どこだか解らないが、高いコンクリートの段の上に父がいる。その段差の下で自分は、父を見上げている。

父は気分が良さそうに歌を歌っていた。

「パパ！抱っこ！」

父の隣に座りたくて、引っ張り上げてくれるようにせがむが、父は歌をやめない。何度頼んでも、「自分で、上げれるだろう」とこちらを見ることが無く、答えるだけである。

「無理だよ。持ち上げてよ」

そうして、駄々をこね、泣き始めたところで、目が覚める。気分が悪いというか、胸の苦しくなるような夢であった。

目を開けると、部屋の電気が消えていて、皆の寝息が聞こえる。テレビの光だけが眩しくこちらを照らしている。

画面の端の時計は、6時を指している。地震発生から12時間か。色々と忙しく動いていたからだろうか。もっと長い時間を過ごした気がする。

また眠ろうとするが、思ったように寝付けない。仕方なく考え事を始める。先程の夢は何だったのだろう。

何故、今になって、あの夢の記憶が蘇ったのかは、解らないが、あんな夢を見るそもその理由には、心当たりがある。

おそらく原因は、自分の両親に対してのコンプレックスだ。良くある珍しくもない話だが、うちの両親の仲は良いと言えるものでは、無かった。

父親が母親の友人と関係を持ったのが、直接の原因だが、もとも

との相性も悪かったのだろう。

ともかくにもそれを知った母は、父を責め立てたが、父親は逃げ回るばかりでまともに話し合うこともしなかった。

結局、実質的に離婚状態になり、やり場のない母親のストレスは、俺にぶつけられるようになった。

それは、あるときは、過度の期待だったり、暴力であったりしたが、俺にとって苦痛であるのに変わりは無かった。

心理学の知識が有る訳ではないが、きっと心の中で、いつも逃げ回る父を憎み、母親から逃げる事が出来ることを羨んでいたのだろう。父に救い出して欲しかったのだ。

気付くと、いつのまにか頬を涙がつつている。誰にも見られないように、俯いて、服の袖で、顔を拭いた。

急に空腹感を感じ、机の上のスーツケースを自分の方に引き寄せる。到着した時は、疲れのあまり食欲も無かったが、今は何かお腹に詰めないと、落ち着かない気分だ。

ガサゴソやっていると、不意に声を掛けられる。

「おはよう」

声の主はシンであった。

「ああ、おはよう。わりい。起こしちゃったか？」

「いや、大丈夫」

シンがポケットの中から、徐に携帯を取り出した。

「そういえば、地震の後も電気は流れてるんだな」

「ああ。人も物も通さない壁が有るのに、何故か水と電気は通ってるての不思議だよな。」

「もともと、流れているものは、止まらないみたいな話なのかな。」

ファンタジーのような話だが、この状況で、納得出来る科学的理屈を付けようとするのも、無駄な事だろう。

「あった。これだ。」

携帯をいじっていたシンが画面をこちらに見せ、携帯を差し出す。

「え。何これ？ おもしろ画像？」

画面には、神社にあるような鳥居とその奥の祠のようなものが映っている。特に笑えるポイントは見つからない。

シンが笑う。

「ちげえよ。バカ！地震の直後から、この変な建造物があちこちで発見されてるらしいんだよ。」

沢山有る訳じゃないみたいだけど、街中や建物の中やら、今まで無かった所に急に現れるらしい。

お前来る途中に見なかった？」

「んー。いや、気付いてないだけかもしれないが、見てないと思う。でも、地震の後に確認されたなら、今回の事に何か関係してるかもしれないってことか」

「まあ、まだネット上での噂だからな。悪質なデマって事もあるとは思うけど」

もう一度、画面をよく確認する。鳥居の額束にズームする。

もし本当に神と呼ばれるような何かがあって、今回の異変が、それに関するものなら、額束に刻まれた文字から何か重要な情報が掴めるかもしれない。

だが、少し遠めに撮っているからか、拡大すると、ぼやけてしまい、額束の文字は認識できない。

「シン、これさ、この板の部分、もっと近くで撮った画像ないか？」

「いまんとこ、掲示板に上がってるのは、そんだけ。一応、画像を掲示板に上げた人に頼んでみるけど」

「よろしく頼むわ」

テレビでは、アナウンサーが交代もせずに、ニュースを伝えている。

「根性あるよな。このアナウンサー」

シンもテレビに視線を向ける。

「テレビ局にも何体もゾンビが入りこんでて、どっかの部屋に籠って、放送してるらしいよ」

「こちらとしては、有り難いけど、頑張りすぎだろ」

鈴木がモゾモゾと動いて、起き上がる。

「何だ。二人共、起きてたのか。起きたら、起こせよ。淋しいだろうが！」

起きたそばから、大騒ぎしている。寝起きが良すぎる。

刈谷も鈴木の大声に反応して、薄目を開ける。

「うるせえよ！ バカ！」

刈谷は鈴木とは対照的に、眠いと機嫌が悪い。

「あ、ゴメン」

鈴木は怒られたショックで、静かになる。まるでいつもの学校のようなやりとりだ。二人を見ていると、気分がなぜだか落ち着いた。「誰か一緒にトイレいかない？」

尿意がある訳ではないが、この狭い部屋の外に一度出たくなった。

「マジで？ 俺も今行こうと思ってたところだ」

「二人とも行くのかよ。俺も行くよ」

三人で外に出ようとする、不意に誰かが転んだ。

「おうわ！」

鈴木が何かに躓いたようだ。机の下を覗き込むと、少女が床で眠っている。勢いで出ていったものの、一人で不安になったのだろう。しっかり戻ってきている。

「つもー。なんなわけー」

鈴木が少女を蹴っ飛ばす真似をしている。

「止めとけ。起こすと、面倒だろ」

鈴木は仕方なく、少女を跨いで、ついて来た。男三人でゾロゾロと並んで、トイレへ向かう。お世辞にも、爽やかとは言えない。

「男三人で、連れションて絵にならないな」

「確かに。汗くさいな」

皆、無言になる。トイレにつき、シンと鈴木は小便をする。

「カイ、しないの？」

「出ない」

そう答えて、鏡の前で顔を洗う。いくらか、気分がスッキリした。

「先行くよ」

そう言って、部屋に戻る。

少女と刈谷が起きている。

「お。二人共、おはよう」

何があつたのかは、解らないが、二人の間に険悪なムードが漂っていた。

冒険（前書き）

面白いものを書こうと一生懸命やっております。
ぜひ、全話通して、読んでみてください。

冒険

刈谷と少女の間の空気に何とも居にくい雰囲気を感じる。大方、ちよっとした口喧嘩だとは、思うのだが。

刈谷は、大人っぽくて、話も面白いから、周りに常に人がいるタイプなのだが、意外にも、少し頑固なところがあるのだ。理不尽な理屈を押し付けてくる少女に怒りを感じるのは、仕方が無い。

何かしていないと居心地が悪かったので、スーツケースからメロパンを取り出し、半分にして食べる。先程は、なんやかんやで食べるタイミングを見失ってしまったのだ。

「食料も節約しないとな」

「ああ、そうだな」

少しの会話の後、また沈黙が三人の間を流れる。

トイレに行っていた二人が部屋に帰ってくる。皆何をするでもなく、テレビをボーッと見ている。

「体力無駄にしないために、あまり動かないほうがいいのかもしれないけど、この人数だとすぐ食料が切れちゃうし、食料調達しに行った方がいいかもね」

鈴木が食料の入っているスーツケースとリュックの中身を確認している。

「まだ皆が元気で動けるうちに食料を探しに行ったほうがいいのかもしれないな」

刈谷は、シンの携帯を借りて、遊んでいる。

「でも、コンビニなんかの食料はもう大体持ってたからなあ。百貨店とかスーパーまで行けば食料は有るかもしれないけど、ゾンビの数も多いだろうし」

部屋の中は、クーラーがきいているので、暑いということはないのだが、それでも、この狭い空間にずっといるのは、気がめいる。

「確かに徒労に終わる可能性も否定出来ないけど、一日中ここにい

るものなあ。

三、四人で行けば、安全だろうし、行ってみるか」

「アタシ行かない。パス」

少女は相変わらず携帯をいじっている。別に、元から連れて行くとは思っていない。

ドンッ！

不意に何かが壁に当たる音がした。隣の部屋からだ。

「キャア！ 大丈夫？」

壁を挟んで、籠った女性の声が聞こえる。

「どうした！ ゾンビか？」

刈谷が立ち上がる。

「ちよつと見てくるよ」

ドアを開けて、廊下を見るが、特に何もない。隣のドアの前に立ち、様子を見る。鈴木がついて来ている。

ドアを少し開ける。

「どうしました？」

女性がこちらを向く。

「友達が下痢とか嘔吐とか繰り返してるんです。さっきから、トイレに往復してたんですけど、ついに腹痛で動けなくなっちゃったみたいで。」

もう一人の女性が俯いて、嘔吐している。

「大丈夫？」

鈴木が駆け寄る。

この女性どこかで見たことがある。自分も傍によって顔を確認する。

「竹田？」

女性が顔を上げる。

「カイ？」

何と言う偶然だろう。中学の同級生の竹田だ。

「お前もここにいたのか？」

「う、うん」

吐いている所を見られた恥ずかしさからか、竹田が顔を赤らめる。腹痛でトイレに行くことが出来ず、ここで吐いてしまったのか。

「鈴木、ちょいコイツ、トイレに運んでやってくれ」

女性は、こちらを心配そうに見ている。

「えと・・・」

「あ、私、金山っていいいます」

「金山さん。竹田をトイレまで運びますから、安心してください」

鈴木がお姫様抱っこで竹田を運ぼうとして、ふらふらしている。

一人で、運ぶのは無理か。自分も立ち上がり、手伝う。

トイレの個室に竹田を運ぶ。

「ありがとう」

竹田はもう泣きそうである。恥ずかしそうな顔を見ると、何だかこちらが申し訳ない気がした。普段であれば、有難迷惑かもしれないが、今は仕方が無い。

「まあ、後で食料とか持っていくからさ。早く治せよ。」

部屋に戻り、スポーツドリンクを何本か取って、金山と竹田の部屋へ持っていく。

「金山さん。脱水症状起こすといけないから、これ竹田にどうぞ。

あと、金山さんもよければ」

「あ、どうも」

金山は、ほっとした表情をして、笑顔を浮かべた。なぜだか、心臓がドキドキして、無言になって部屋に戻る。

鈴木はもう部屋に戻っていた。

「大丈夫っばいよ」

「そう。で、結局食料調達行くの？食料無いの辛いんだけど。」
シンはすでにぐったりしている。

「ダイエツトだと思って我慢しろ」

刈谷がシンの大きな腹を叩いて、笑う。

「うるせえよ」

シンもつられて笑い出す。

確かにこのままのペースで食料を消費し続ければ、すぐになくなってしまおうだろう。

「行こうか。食料調達。隣の部屋の二人組の女の子、片方が知り合いなんだ。出来れば、二人にも、食料渡してやりたい」

少女がこちらをみる。

「え。食料があることばらないんじゃないの？」

そう言った記憶はある。確かに少女の言うとおりだ。何故彼女たちに食料を渡すのは、良いのだろうか。自分でもよく解らない。

「え……いや、もう一人の金山さんて子が可愛くてさ。だから良いかなって……」

適当にその場で、理由をつける。だが、事実、自分の中でも、そういうことだと思う。

「馬鹿か」

少女が初めて楽しそうに笑った。

「じゃあ。ご褒美のために頑張って来るか！」

鈴木がニヤニヤして言った。

「よっしゃ。俄然やる気出て来たわ！」

刈谷が腕を振り上げる。

「本当にいくなら、確か、この近く、格闘技のグッズ屋みたいのがあるよね。あそこの木刀とか、棒とか武器になるかもしれない。寄ってから行こう。シンとお前は置いていくけど、下手なことすんなよ」

「はい」

二人が声を合わせて、返事をした。

敵襲（前書き）

駄目だ。うまく話が作れん。

敵襲

ドリンクを二本づつ持ち、外に出る。カラオケボックスの店員に挨拶する。

「こんにちは」

「あれ？ 君たちどこか行くの？」

「ええ。ちょっと」

皆には、他の誰かに食料を持っていることを言わないよう言っている。

「そうか、気をつけてね」

本気で自分たちを心配してくれているようだ。嘘をついている後ろめたさで、店員と目を合わせられない。彼にも食料を分けるべきだったか。

外に出ると、たまに遠くに生存者らしき、人が見える。今、東京には、何人生き残っている人がいるのだろう。

「とりあえず、武器取りに行こうか。カイ、つれてってくれよ」

「あれ……どうやって行くんだったけな？」

確かに、一度行ったはずなのだが、イマイチ場所がハッキリ思い出せない。適当に歩き回っていれば、ペットボトルのドリンクが無駄になってしまう。

「え。わかんないのかよ」

「ドーナツ屋のそばだった気がするんだけどな」

「それ、結構遠いじゃねえか。道違うし！」

「わりい」

鈴木が先導を代わり、どんどん進んでいく。自分が若干の方向音痴なのもあるが、よくこのあたりで遊んでいる鈴木は、俺に比べて、このあたりには詳しい。

「そろそろ、ドーナツ屋だぞ。まだか？」

右の階段の上にかつい印象のロゴが見えた。

「あれだ。あれ」

階段を上がり、ドアを開ける。鍵はかかっていない。

「店員さんは、おらんようだ」

「お、早速武器になりそうなのが」

鈴木が木刀を見つけて、棚から取り出す。

「二刀流とかどうよ？」

片手に一本づつとって構えている。

「二本は、かさばるし、片手で持つと、腕が壊れるぞ」

「ゾンビには、あんまり近づきたくないし、槍みたいに突いて使えるものの方が良いんじゃない？」

刈谷が棒を見つけて来て、股間をつついてくる。

「何をやってんだよ、お前は！」

近くの箱から、黒い木刀を取り出し、額をどつく。

「あ、いってえ！」

刈谷が床に倒れる。鈴木は、まだガソゴソとやっている。

「あ！」

鈴木が急に大きな声を出す。二人とも、鈴木の方を見る。

「これなら、イケる！」

鈴木は短めの木刀を見つけて、先程と同じように構えている。様になってる気がしなくもないが、死体達と戦う時、足手まといになれば、致命的な事態に陥りかねない。

「いや、駄目だろ」

鈴木は嬉しそうに、二本の木刀を振り回して、すっかり悦に入っている。

「いいじゃん。二人と武器かぶるのやだし」

被ったら、どうだというのだろう。

「もう良い。外に長いこといると、飲み物が無駄になる。そろそろ食料を集めにいかないよ」

刈谷が店の外に出る。鈴木は食料を入れるための鞆に、目を輝かせて、ヌンチャクやらグローブを詰め込んでいる。

「鈴木、刈谷行っちゃったよ。もう行こう。ドーナッツ屋で、ドーナッツでも回収しようや」

そう言って、外に出る。

不意に刈谷が戻って来て、店内に突き戻される。刈谷は肩を小刻みに震わしている。

「え、どうした？」

「店員のゾンビだ！武器持ってる！この辺をうろついていたらしい！」

確かに、ガランガランツという音がする。

「何の音だ？」

音が段々と近付いて来る。

「ブアーアー！」

もう一度ガランツという音がして、男のゾンビがドアの外に現れた。手には、金属バットが握られている。ガランツという音の正体はバットが地面を擦る音だったらしい
どうということだ。

昆虫程度どころか、道具を使える知能があったというのか。

頭部に何か当たったのが死因だったのだろう。頭から血を流している。

死体がこちらを見て、目を見開き、歓喜の声を上げた。

「居ダヤアアア！」

バットを振り上げて、ガラスを叩き割る。バリーン！という音共にガラスの破片が飛び散る。

目を守るために反射的に腕で顔を隠す。

衣服に守られていない足首に破片が刺さり、激痛が走る。

「ぐああ！」

ドアにあいた穴から、体を乗り出し、死体が入って来ようとする。

「刈谷、棒で突き返せ！」

刈谷は腰が抜けてしまって、動けなくなっている。

「あああ！」

鈴木が木刀をバットの持ち手に当てがい、動きを止める。鈴木
の動きに反応して、刈谷が遅れて動き出す。

がむしゃらに突いた棒が、首に当たる。

「アッバーアー！」

死体が突かれた部分を手で抑え、ドアから、一步離れた。

「今だ！」

ドアを開け放ち、苦痛に悶える死体に組み付き、バットを取り上
げる。

すかさず、鈴木が木刀を死体の頭へ振り下ろす。ゴツという鈍い
音が響いた。

「ヴー………」

うめき声を上げ、死体は動きを止めた。

「逃げるぞ！」

三人で階段に詰め寄ったことで、足が絡まる。バランスを崩し、
半ば転げ落ちるように下に降りた。

「いでえ！」

上で死体が雄叫びを上げている。こちらを見て、階段を駆け降り
て来る。

「やっぱり復活すんのか！」

「そりゃ、ゾンビだからな」

明らかに普通の死体よりも、移動が速い。

「うわあ！ こっちくんああ！」

「あっちだ！」

方向も考えず、一目散に逃げ出す。

「何なんだよ！」

七、八分、走り続けると、ようやく死体の姿が見えなくなった。
「あーあ。クッソー！ ドーナツ食べたかったわー」

本気で言っているらしい。もう少しで死んでしまふところだった
というのに、呑気なものだ。

「ゾンビが武器使ってくるなんて！ おかげでカラオケから大分、離

れちまった」

変な冒険心から武器を取りに行ったが、食料調達は楽になるどころか、より手間がかかることになってしまった。

「ああ。でも……まあ、いいさ。せつかく遠くまで来たんだ。食料を集めよう。確かこの辺カレー屋があるはずだし」

自分自身もカレーが大好物なのだが、カレーが嫌いな日本人はいないから不思議である。

「そうだな。外食チェーン店なんかにはまだ、意外と食料があるかもしれない」

「カレーかあ。まあ、いいや」

鈴木はまだドーナッツが惜しいようだ。三人並んで、また、とぼとぼと道を歩き始める。

敵襲（後書き）

ダサくなったんで、たぶん修正します。

悲劇（前書き）

あまり、前書きで書くこともなくなってきましたが、がんばるので
お願いします。

悲劇

ゾンビから奪い取った金属バットを、RPGの主人公の真似をして、振り回す。

正直、楽しい。思わぬ形で、良い武器が手に入った。

「カッコつけてんじゃねえ！」

刈谷が尻に向かって、棒を突いてくる。棒が尻に食い込み、意外と痛い。

「痛！ またやりやがったな！」

刈谷の足の間に、バットを入れ、金的目掛けて軽く持ち上げる。

刈谷がとっさに足を閉じ、おかしなポーズをとった。

「バツカ、あぶねえよ！」

「アハハ！」

鈴木が後方から、木刀で尻を付く。木刀が割れ目に食い込み刈谷が前につんのめる。そのまま転びそうになり、地面に手をついた。

「テメエ！」

鈴木の頭に、棒が振り下ろされる。

「アイタ！ 刈谷、結構本気で叩いたな！」

刈谷は、鈴木を無視し、話題を変える。

「しかし、死体達は武器を使えるのか。人の入り込めない建物に入ってれば安全とおもってたんだけどな」

「確かに。道具があれば、ガラス製、木製のドアはすぐ壊せるしな」
カラオケボックスも安全とは、言えないということだ。

「道具を使うってことは、それなりの知能があるって事だろ。でも、そう考えると、奴らの行動は、不可解だよな。いつも、目の前の人間を追うだけで、挟み撃ちや、仲間内の情報伝達をしてる様子もない」

鈴木が会話に入ろうと、叩かれた頭を抑えながら、刈谷と俺の間に割り込む。

「人を殺すために、武器の使いかただけ、プログラムされているのが一番無難な考えじゃない？」

確かにそれが一番有りそうな話した。なるほど、相槌をうつ。鈴木が急に声を上げる。

「あったー！ カレーだ！」

喋りながら歩く内にカレー屋がもう見える範囲まで来ていた。目印である黄色い看板が確認できる。

「カレーライス！」

鈴木と競走しながら、カレー屋へ向かう。刈谷がその後ろから、面倒臭そうに小走りで走って来る。

「着いた！ 食料、あるかな？」

俺が厨房を探り出したのを見て、鈴木がお土産用の商品を漁りだす。

「お土産は無事みたいだし。使えそうだ」

「了解した！」

鍋の中の蓋を開けると、中身から異臭がした。

「鍋の中のは、駄目だ！ 夏場だったからなあ。腐ってる。」

刈谷が店に入ってくる。

「冷蔵庫を開けてみる。まだ、調理前のルーやら、具材が有るかもしれない」

「いや、そのつもりだけどさ」

暗い中、冷蔵庫を手探りで探す。

奥の方に入ると、急に何か鍋のカレー以外に腐臭がした。

「何か臭くないか？」

バリッツと厨房の奥で、皿が割れる音がする。

恐怖を感じ思わず、飛び上がる。

目を凝らすと、暗闇の中で何かが、モゾモゾとうごめいている。

「どうした？」

刈谷がカウンターを越え厨房に入ってくる。

「わからん。奥に何かいるらしい。おい！鈴木！電気付けてくれ！」

「あ？ 別に良いけど。どうしたんだよ」

明かりが付き、うごめいている物が照らし出される。

「うわああ！」

「冗談だろ」

二人共、厨房の外へ逃げ出す。

「どうした！」

鈴木が厨房を覗き込む。

「あ・・・あれ、どういう事だよ！」

鈴木が死体から視線をそらし、こちらを見る。

「ゾンビだ。きっといろいろな偶然が重なってこうなったんだろう」
死体達が数体で集められ、厨房の隅でロープやテープで縛られている。いや、正確には、誰かに縛らせたのだろう。

「今回の地震か、もしくは、元からの病気か何かで、即死せずにゆっくりと死んでいった人が、偶然、傍にいた生存者に頼んで、自分を縛って貰ったんだ。ゾンビになって人を襲うことのないように」
ダンボールテープで目隠した目から、血が滲み、体には、虫がたかり、腹部から腐り始めている。

「おい、あれ」

カウンターの上にメモが、何枚か置いてある。一枚の紙に異常な程、文字を詰めて文章が書いてある。

必死さや切迫した状況での狂気が紙から伝わってくるようだ。

皆の視線がメモに集まる。

「ここにたどり着いた生存者に、伝えたい事が、有ります。死体を見て、気持ちが悪かったでしょう。怖い思いをさせたら、ごめんなさいね。貴方達には、どうでもいいことだと思うけど、少し私の話をさせてください。私は、この歳まで、未婚でした。特に理由が有った訳じゃないけど、縁がなかったのね。そして、もちろん子供もいません。欲しいと思ってはいたのだけどね。私は、結局、一人も産まなかった。けれど、自分の何かを受け継いでいく子供がいると

いうのは、素晴らしいことだと思います。でもね。死に直面して、私は、人が受け継いで行けるのは、遺伝子だけではないと気付きました。教師から生徒に知恵を残し、師から弟子に技術を残し、友達から友達へ感情を分かち合ったりするように、私達は、生きてるだけで、自分の中の何かを他人の中に残しているのだと思うわ。だから、もし私が誰かに、生きる可能性を残せたら、それは、子供がいるのと同じくらい、素晴らしいことだと思います。余計な話ばかりして、ごめんなさいね。でも、私のお願いをどうかこれだけは、聞いて下さい。どんな形でも、良いから一日、一秒でも長く生きて、命を繋いでください。そのために私はここに自らを封じ込めます。食料も半分は私達を縛るのを手伝ってくれた須藤さんに渡しておきますが、もう半分は、ここに来た貴方達のために残しておきます。では」

「遺言……か」

ほとんど改行も入れずに、必死に文字を詰め込んだのだろう。所々、文字が細くて読みにくい上に、涙が染みていて、字がぼやけている。

須藤というのは、その生存者の名前か。感情が高ぶり、思わず嗚咽する。誰を恨むでもなく、ただただ悲しかった。

「食料が残ってるんだろ。早く、集めて行こう」

刈谷が冷蔵庫を開け食料をつめ始める。

「そうだな」

メモを四つ折にして、ポケットに滑り込ませる。冷蔵庫にはルーの貯め置きと、野菜やら、肉やらが入っていた。

長持ちする具材ではないが、しばらくは食べられるだろう。冷蔵庫の中身をすべて詰め込むと、ちょうどスーツケースがいっぱいになった。

「行こう。あまり遅くなると、皆が心配する」

「ああ」

最後に、もう一度、厨房を見て、死体をみる。死体に手を合わせ
て、店を後にした。

空腹（前書き）

書きたいシーンになかなかたどり着かないや。

空腹

刈谷と鈴木は、洋服屋にあった肩掛けカバンに食料を詰めて、持っている。

「そのバットでドア破壊すれば、他の店からも、食料がとれるだろ」
そう刈谷が言ったので、その通りに彼方此方でドアを破壊しては食料を集めたのだ。不良というか悪党にでもなったような気分である。

ようやくカラオケボックスが見えてくる。

「武器をもったゾンビに居場所がばれるのは怖い。あいつらが入ってこないように入り口の明かりは消すよう店員さんに言おう」

「ああ」

ガラス製のドアをカンカンと叩く。

「あ、今、開けるね」

自動ドアが、機械音を立てて開く。

「大丈夫だった？結構、時間がかかったみたいだけど」

壁に掛けてある時計を見ると、既に午後四時を回っている。

「格闘技グッズの店に武器取りに行ったら、案外面白いのが沢山あったはまっちゃて」

店員は、自然な笑顔でこちらを見る。

「そうか」

もう本当は、俺達が食料を持っていることに気付いているのかもしれない。その上で、気を使わせないようにそのことを口に出さないでいてくれるとすると、俺達は、とんでもない自己中心的な行動をしているように思えてくる。

「あの、それと、入り口の明かり、消してもらおうことって出来ますか？」

「え？」

「ゾンビが武器を持ってるのを見たんです。ここに人が居るのを見

られたら、ドアを破壊して、入ってくるかもしれない」

「ゾンビが武器を持っていたの？」

「はい。この金属バットを持ったゾンビに襲われました」

「それは、本当なんだね。そう………解った。明かりは消しておく。」

「ありがとうございます」

三人で階段を昇って行く。

「なあ。この食料、冷蔵庫が無いと保存できないぞ。素直に店員さんにだけは、はなして、冷蔵庫使わしてもらった方がよくないか？」

「あ、そうか………」

確かにそうだ。クッキーや携帯食料と違い、具材やカレーは腐ってしまう。

階段を何段か下がり、カウンターに居る店員に声を掛ける。

「あの、少し食料を持ってきたんですが、冷蔵庫に入れておいて、皆で分けませんか？」

「え？ あ、ああ」

店員は驚いた表情を浮かべるその驚きが、食料があることを打ち明けたことに対してなのか、食料があることを知ったことに対してのものなのかは、解らない。

「ああ、そうか。スタッフの部屋はこの億だよ」

何か言われるかと思ったが、店員はあっさりと鍵を渡してくれた。やはり、最初から食料を持っていることを知っていたのだろうか。

「ありがとうございます」

鍵を開け、部屋の中に入る。他のスタッフと目があった。会釈をして、キッチンに入る。

奥に大きな冷蔵庫があった。

食料を冷蔵庫にしまう。

「じゃあ、部屋に戻ります」

「ああ、カレー、後で調理して持って行こうか？」

カレーは失敗が無いというが、料理が出来る人が調理してくれる

のなら、ありがたい話だ。

「いいんですか？そこまでしていただいて」

「うん。スタッフでも分けていいかい？」

「あ、はい」

食料が減るペースは速くなるだろうが、仕方ない。冷蔵庫が使えなければ、一日で食料は駄目になってしまう。

部屋に戻ると、シンと少女がいない。

「あれ？あいつらは？」

隣の部屋からバシャバシャと水の音がする。

「何やってんだ？」

隣を覗くと、シンがモップで床を拭いている。竹田が吐いてしまった後の後始末をしているようだ。

「ああ、ほっといたら臭くなるからな。竹田さん達は別の部屋に移つてもらってる」

シンは見かけによらずしっかりしている。

「そうか。手伝おう」

「いや、もう終わる。それよりも食料はちゃんと手に入ってたんだろ
うな」

大食いのシンには、ここ何日かの食料を節約した生活はかなり堪えたのだろう。

「ああ。ちゃんと持ってきた。でもな、だからって沢山食って良いわけじゃねえぞ。助けがいつ来るかわかんない状況は、変わらないんだから」

「えー。マジかよ！もういいじゃん腹一杯食って、潔く死のうぜ」

シンがその場に座り込んで、呻いた。

徘徊（前書き）

だんだん物語が進んできました。

徘徊

夜が更けてから、皆で竹田の様子を見に行った。

少女は竹田の部屋にいたらしい。何にしても、扱いにくい性格ではあるが、女性同士の方がまだ仲良くやれるのだろう。

「もう元氣そうだな」

竹田は普通に食料を食べている。

シンが席を立つ。

「飲み物と携帯を持ってくるわ」

「行ってらっしゃい」

刈谷が手を振る。

俺は、携帯を持っていないので、特にすることもなく、テレビを見ている。刈谷は、携帯をずっといじるタイプではないが、流石にやる事が無いので、携帯で動画サイトを見ている。

しばらくすると、シンが部屋に戻って来た。

「カイ、あの画像の板の部分のアップ、掲示板に上がったぞ」

「え？今頃？」

「いや、俺もなかなか上がらないから、デマかと思ったんだけどさ。あの鳥居の周りにゾンビが群れてたから、なかなか近づけなかったかららしいんだ」

シンが机の上に携帯を置くと、皆が机に身を乗り出す。

「アチーよ。集まるな」

「カイ、これなんだ？」

刈谷や他の皆は知らないらしい。

「今、これが東京のあちこちにあるらしい」

画面に伊弉諾と刻まれた額東が映っている。

「イザナギか。まあ、鳥居だからな。神道の何かは何だろうとは、思ってたけど。代表的な神様だからな。こっからじゃ何にもわからない」

「後、これを見ろ」

シンが携帯の画面に触れ、指でなぞると、別の画像が画面に現れた。また額束の画像だ。

だが、額束の板の色が青い。

「色が違うな。どういう関係なんだ？」

「わからん。今のところ最初の赤い奴とその青色のしか発見されていない」

刈谷が携帯を手取る。

「赤と青って言うと、信号を思い出すな」

「ああ。そういえば、赤が現れると青もその近くに出てくるらしい。対になってるものかもな」

寝転がっていた鈴木がこちらに寝返りをうつ。

「もし、このまま助けが来なくって、食料が切れたら、最後は、ここに行ってみなきゃいけないくなるかもな」

「うむ。最後には、そこに脱出の手掛かりが有りそうな場所は、何処でも行ってみなきゃいけないなるだろうな」

「その時は、私達も行かなきゃ駄目かな」

金山は、気乗りしないようだ。

そりゃそうだ。誰も好き好んで、ゾンビの群れに会いに行きたくはない。

「ゾンビが沢山周りをうろついてるんだもの。人数は、沢山いた方が良いんじゃない？」

刈谷は、眠そうな顔で欠伸をして言った。

「まあ、東京の外の人達もきっと何か手を考えてくれてるさ。そのうち助けが来るよ。」

本心からそう言った訳では無いが、不安を煽っても仕方が無いだろう。

「ん！」

竹田が口いっぱいにつまみを溜めて、何か言った。金山が背中をさする。

「大丈夫？ 喉に詰まった？」

竹田は、金山を手で制し、口の中の物を飲み込もうと、必死になっている。ようやく、飲み込むと、焦って早口で話し始める。

「今、透明な壁が東京を覆ってるんでしょ？ 思ったんだけど、それって、最低限、都道府県の内容を理解しないと出来ないことだね。てことはさ、少なくともこの異変に意思のある何かが関係してるってことになる？」

なるほど。その通りだ。東京都の範囲を知らずに、東京を綺麗に壁で囲むような芸当は出来ない。信じ難いが、やはり、今回の異変は、呪いか魔法の類の何かだということか。

「解っちゃいたけど、やっぱり自然現象って訳じゃないのか」
ドンドンとドアを叩く音がした。

「カレー持って来たよ」

「え！ カレー！ 何で？」

少女がはしゃいでドアを開ける。何度も言うが、カレーは、誰にとっても大好物だ。店員が約束通り、俺達が持って来たカレーを調理してくれたようだ。

「ありがとうございます」

「いや、いいよ。食料ありがとう。スタッフの皆もお礼を言ってるって言ってたよ」

店員は、それだけ伝えると、そのまま下へ戻っていった。

美味しそうな香りが、部屋に充満していた物々しい雰囲気を感じする。

皆、無言になり、夢中でカレーを食べ始める。そうして、二十分も経たないうちにどの皿も綺麗に空になってしまった。

「俺、皿持って行くよ。」

そう言っ、皿とコップを重ねる。

「皿割んなよ！ おっちょこちよい！」

シンが心配そうに手伝おうとする。

「わあってるよ！ 大丈夫」

階段を慎重に降りて、カウンターに皿を届ける。カウンターで見張りをしていた店員は、いつもの男性ではなく、背の小さな女性だった。

「本当、ありがとうございました」

会釈をすると、はにかんで会釈を返してきた。

階段を上がり、皆のいる部屋に戻る。

激しい運動したからだろう。普段眠る時間帯ではないが、眠くなってきた。

「おい。お前ら、自分達の部屋に戻ってもう寝ようや」

「ちょっと待って。間中さんが大事な話があるんだって」

竹田がスペースを開けて、座るよう、促した。

間中というのは、少女の名前だろう。今度は、皆が少女の携帯の周りに集まっている。テレビ電話を使っているようだ。

「間中っていうのか、お前」

「どうでも良いから、こっち来て！古矢さんが話が有るって言うてるの！」

「古矢って誰だよ？」

「呼び捨てにしないでくれない？私の霊能力者の知り合い。すごい人なんだから、失礼の無いようにしてよ！」

こいつに礼儀を教えられるとは。

言われた通り、携帯の前に座る。携帯の画面には女性が映っている。

霊能力者と聞いて、派手派手しい服装の太った中年女性を想像したが、そこには、地味な服装の痩せた小奇麗な女性がいた。

「こんにちは」

「こんにちは。やっと皆そろったわね。いえ、一番この話を聞いておくべき人が来たと言うべきかしら」

俺がどうして霊能力者の話を優先して、聞かなければ、いけないのだろう。もったいつけたような話方は、テレビに出て来る霊能力者と同じだ。わざとやっているのだろうか。

「皆さん、幽霊は信じる？」

信じるも何も、昨日、実際に見たのだ。

「先日、初めて見ました」

「マジ？」

シンは疑いの目で、俺を見ている。

「黙って！」

間中が怒鳴ってシンを制する。静かになったのを見て、また古矢が話し始める。

「今回の異変が起こってから、東京の霊達の動きが激しくなってるわ。

普段は、そんな力が無い霊達の中にも、一度掛けたら確実に人を殺すような呪いを掛けられるようになってる霊が沢山居るの。由美ちゃんが一緒に居るから、力の弱い霊は何とかなると思うけど、その手の幽霊に憑かれたら一巻の終わりよ。皆、基本的に怖い雰囲気を感じるような所に近寄らないようにして。

せっかく、地震でも死なず、ゾンビにも殺されず、ここまで生き残ったんだから、お互い命は、大切にしましょうね。とりあえず、皆にはそれだけ。じゃあ悪いけど、カイ君以外は、席を外して頂戴」

俺だけにする必要のある話とは一体、何だろう。

言われた通り、皆、自分の部屋に帰っていく。

「先寝てるぞ」

「おう」

間中だけは部屋に残っている。

「おい。携帯は、後で渡しに行くから、お前も、もう部屋に帰れ」
少女は呼びかけに答えない。

「由美ちゃん。もう知ってるのね？」

古矢がそう尋ねると、間中が何も言わずに頷いた。

「彼女に隠す必要は無いわ。もう解ってるみたいだから。えと、どこまで話したかしら？幽霊の話はしたわよね？」

「はい」

「そう。その人を殺す力を持った霊は、さつきも言ったように、基本的には、近づかないようにしていれば、何とも無いの。でもね、例外がいて、人を探して徘徊する霊がいるのよ。私達は、それを<徘徊者>と呼んでる」

東京中を徘徊し、見つかったら、死が確定。恐ろしい話だが、それ以上に気になる事がある。それを何故俺だけに話す必要がある。

「えと、それと俺の関係って？」

「特に無いわ。」

（は？）

「貴方と徘徊者の関係を証明する明確な証拠は、特に無いわ。でもね、何か感じるのよ」

「第六感ってことですか？」

「ええ、まあそんなところよ。でも、靈感とは違う何かで貴方と徘徊者の間に何かを感じたの」

何かで、何かを感じられても、こちらには何も解らない。

「それが徘徊者が貴方を狙っているということなのかもしれないけど、正確には、何なのか解らないわ。でも、貴方と徘徊者には、何かきつと因縁がある。知ったからといって、どうにかなることではないから、他の皆に知らせなかったんだけど、貴方には、教えておいたほうが良いと思ったのよ。今日は、それだけ。もう寝ていいわよ」

それだけ言い切ると古矢は、いきなり電話を切った。ポカーンしている、携帯を少女が片付けてしまう。

結局、何がなんだって言うんだ。知っても、どうにも出来ないのは俺も同じだ。

頭の中は混乱して、間中とは、特に何も話さなかった。フラフラしながら部屋に戻る。隣の部屋は、明かりがついている。竹田達は、まだ寝ていないようだ。

皆が寝ている間のスペースに横になる。頭の中は、混乱して落着かないはずなのに、すぐに体は言うことを聞かなくなり、気付く

と眠りに落ちていた。

出現

体を揺すられて、目が覚める。目を開けると、竹田が横にいた。旅行などで、普段と違う場所で寝ると良く起こる事だが、一瞬、自分がどこにいるのか解らなくなる。

「おはよう。どうした？」

竹田は焦っている様子は無いが、平静を失っている。

「良いから、非常口に来て！」

竹田が手を引いて、引き上げると、体がふわりと持ち上がる。体調を崩していた姿からは想像出来ないかもしれないが、竹田は実は、運動も出来て、女性にしては身長も高く、力も強い。

普段の竹田を知る人にとっては、病気で弱々しくなっている姿の方が違和感が有るのだ。

手を引かれたまま、非常口から外に出る。

階段の踊り場に、皆が集まっている。皆、何かを見て、騒いでいる。

鈴木がこちらに気付く。

「おお、カイ！ おはよう」

「ハイハイ。で、どうしたよ？」

皆を掻き分け、手摺りまで寄る。

「何だよ。あれ・・・」

目を疑う光景だ。

カラオケボックスの前の公園に巨大な黄色い卵型の物体がある。もう余程の事が起こらないと、驚かないと思っていたが、余程の事が目の前で起こっている。いつのまにあんな巨大なものが現れたのだろうか。

大きさは、カラオケボックスの建物よりも、一回り以上大きく、周りの木々を押し倒してしまっている。

「カイ君、下見て！」

金山が今いる建物のちょうど右隣りを指差す。

「あ、あれって」

下には、写真でみた鳥居とそっくり同じものがある。

「鳥居だな。例の」

シンは携帯の画像と下の鳥居を見比べている。

「板の色は？」

刈谷が落下しないよう手摺りをしっかりと掴み、身を乗り出し、鳥居を覗き込む。

「赤だ！」

「鳥居は知ってるけど、あの卵みたいなのは何なんだよ！」

鈴木が部屋から武器を詰めた鞆を持って、急いで戻ってきた。

「念のため武器持って、様子を見に行こう」

鈴木に続いて皆が階段を降り、卵の周りに集まる。良く見ると、卵は半透明で、中が若干透けて見える。

「何か入ってんのか」

鈴木が木刀で卵を突く。カンカンと陶器やガラスを叩いたような音がする。

「ねえ……この卵人が入ってるように見えない？」

竹田は少し離れた位置に立って卵を見ている。

「人？」

竹田と同じくらいの距離まで、後ろに下がり、卵を見る。輪郭がかなりぼけていて、解りにくいだが、確かに長い黒い髪をした人間のように見える。

「鳥居と一緒に出て来たって事は、鳥居と何か関係が有るのか？」

刈谷が握りこぶしを作り、卵を軽く小突く。

中から何かが出て来るのだろうか。

「皆、周り見て！」

不意に金山が叫び声を上げる。

ぱっと、振り向くと、四方八方の道から、死体が集まって来ている。完全に包囲されている。

間中が、パニックを起こし、騒ぎだす。

「何やってんのよ！ ドジ！ ボサツとしてるからゾンビ集まって来ちゃったじゃん！」

だが、それにしても、おかしい。今の短時間で、こちらに気付いた死体が集まって来たにしては、死体の数が多すぎる。

元から、ここに向けて集まって来たというのか。

「どうなってんだよ！」

ベルトに下げていた金属バットを構える。

「皆、武器取れ！」

鈴木が背中の鞆を開ける。

本人もこうなる事を予測していたとは思えないが、鈴木の手で来た武器が役に立つ時が来ると、誰が想像しただろうか。

皆、急いで木刀やら棒やらを鞆から取り出す。

間中が遅れて鞆の中を見る。

「何よこれ！」

もう他に残っていないかったのだろう。

間中が手に持っているのは、ヌンチャクだ。

「アンタのと交換して！」

鈴木の二本の木刀を奪おうとするが、鈴木はヒラリと身を躲す。

「アンタ二本あんじゃん！ 一本ちょうだいよ！」

「お前ももう一本有るぞ」

鈴木が鞆からもう一本のヌンチャクを取り出す。

「ふざけんな！」

間中が振り回したヌンチャクが鈴木の脛に当たる。

「イテ！」

鈴木が足を抱えてしゃがみ込む。

「お前ら！ 遊んでんじゃねえよ！ 来るぞ！」

刈谷は既に棒を構えている。一体ずつ見れば、動きの鈍い死体達ではあるが、この数だと勝負は五分だろう。

幸い武器を持っている様子はない。

「イダアイア！」

死体が襲い掛かって来る。相手がこの人数では、剣道など、意識していられない。野球選手のようにバットを振り回し、一度に出来るだけ多くの敵を殴る。

恐らく一人で死体達に囲まれたら、間違いなく死んでしまうだろう。

刈谷が背後を取られぬように棒を横にして、死体達を押し返し、そこをシンと間中が武器で殴る。殴られた死体達はその場に倒れ込んでいく。

格闘技グッズ店で襲われた時の事を考えると、死体達は、一度、致命傷を与えれば、しばらくは動かなくなるのだろう。

だが、この状況では、他の死体の相手をしているうちに先に倒した死体が復活してしまう。

「埒があかない！皆、一点を強行突破しよう！」

あたふたして、動けずにいる金山を護るように皆が集まる。自然と陣形が出来上がる。

まず、俺が金属バットで飛び込み相手が崩れたところを刈谷が棒で押し退ける。そして側面に漏れ、陣形に入って来ようとする敵を他の仲間が叩く。

少しずつだが、外に向け陣形が進みはじめる。

「あとちょい！」

そう言って踏ん張る刈谷の背中を間中が後ろから押す。そして、それを見た鈴木が更に後ろから二人を押すと、ようやく七人全員が、弾き出されるように死体達の包囲から抜け出した。

後ろを見ずに、全速力で逃げ出す。

建物の角を曲りきった所で、死体達の居る今来た道を振り返る。

「あれ？」

「何やってんだ、カイ！」

刈谷が戻って来る。

「あいつら追い掛けて来ないぞ！」

死体達はこちらには目もくれず、卵に向かって、歩いて行っている。

「え？」

他の皆が戻って来る。

「奴ら、俺達が目当てじゃなかったのか」

「襲って来たのは、通るのに邪魔だったからなのか？」

死体達が人を殺す以外の目的を持って、行動することが有るのだろうか。

死体達は卵の周りまで来ると、円を作って並び、卵に近い列から膝をつきはじめる。死体の大群が波のように動きだした。

「祈ってる・・・のか？」

シンは、携帯のカメラで動画を録っている。

祈りか。言われてみれば、そう見えなくもない。

「おい、中身動いてねえか？」

刈谷が卵の上の方を見て言った。

「え？」

確かに卵の上部にあった髪の毛と思われる黒い部分が左右に振れて動いている。一瞬、動きが激しくなったと思うと、ピタリと止まった。

次の瞬間、卵から美しい女性の声が響きはじめる。

「歌？」

何かの言語のようにも聞こえるが、意味は解らない。

「卵が歌ってるの？」

間中は、シンの陰に隠れている。音楽には詳しくないので、何の歌なのか良く解らないが、原住民の音楽のような何か原始的なものを感じる。

赤い空の下で、巨大な黄色い卵を囲み、死体達が祈りを捧げる。

そして、高らかに響く歌声。

それは、不気味でどこか幻想的な風景だった。

威圧（前書き）

話し考えるのが、むずい。

威圧

「気持ち悪い。何この音楽。趣味悪」

間中が顔をしかめて耳を塞ぐ。確かに好みは分かれそうな曲ではある。

「そうか？俺は、何か好きだけどな」

「私も」

金山は、うつとりとして、歌を聞いている。

「お前の靈感で何か感じないの？」

鈴木に茶化された間中が鈴木を睨みつけ、その脛を蹴る。

「はううう！」

鈴木は、情けない声を出し、また足を抱えて座り込んだ。いちいちちよっかいを出さなければ良いものを。

刈谷は、卵の中の人影の頭部を見上げている。

「でも、どうすんだよ。もう、この辺には、いられないぞ。あの卵も雰囲気からして人畜無害って訳じゃなさそうだし」

また、荷物を持って移動するのか。途方に暮れて、カラオケボックスの方を見る。

「そうだな。でも、食料は置いてく訳にはいかないだろ。一旦は荷物を取りに戻ろう」

死体達はまだ卵に祈りを捧げている。後ろを通れば気付かれないだろう。

「急いだ方がいいな。奴らが何をしようとしてるのか知らんが、それによって俺達が得をするとは、思えん」

シンが木刀を手取る。どうやら自分も行くつもりらしい。

「三人はこの辺うろついてろ。死体に気をつけてな」

「わかった」

竹田が強張った表情で頷く。

男、四人で、運べば、一回で、全ての荷物を運べるだろう。小走

りで、カラオケボックスへ向かう。

念のため死体達の視界に入らないように道の端を歩く。だが、死体達は、こちらに気付く様子はない。

それほどまでにあの祈りのような動作は、死体達にとって大事なもののだろうか。

部屋の中の食料は良いとして、店員達の部屋に置いてある食料は置いていくしかないか。いや、そもそも店員達はこれからどうするつもりなだろうか。

店内に入り、カウンターの奥の部屋のドアをノックする。少しして、いつもの店員が部屋から出て来た。

「ああ！ 大丈夫だった？ すごかったねえ」

戦ってるのを見ていたのだろう。

「ここは、もう安全じゃなさそうですし、僕達は、出ようと思っます。店員さん達は、ずっとここにいるんですか？」

店員は、諦めたような表情で苦笑いをする。

「どこに居ても、危ないのは、同じだからね。僕達は、大人しくここで助けを待つよ」

一瞬一緒に逃げるという選択肢が頭に浮かぶが、食料の事を考えると、それは出来ない。

「そうですか・・・」

じゃあ僕達は、荷物を取って来ます」

「ああ」

四人で階段を上がる。鈴木が寂しそうな顔で俯いている。

「何か悲しいな」

確かに世話になった人を置いて逃げるようで、気分が悪い。

「スタッフルームに置いてきた食料は、店員さん達へのお礼だと思おう」

自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「しかし、ここを出て、それからどこに行くんだ？」

刈谷は一番後ろから、ゆっくりと階段を上っている。

「特に決まった当てはないな。でも、この辺のホテルとかが良いんじゃないか？」

「ホテルか。それこそゾンビが入り込んでそうだけどな」

シンは、携帯を取り出し、何かしている。

「まあ、とりあえず、この辺のホテルを調べてみるよ」

「出来るだけ大きな所が良いだろ。中で敵と遭遇する確率は低くなるからな」

「ああ。わかった」

皆で寝食を共にした3階の部屋が見えてくる。そんなに長くここに居た訳でもないのに、立ち去るとなると、途端に物悲しい気持ちになるから不思議である。

「ん？」

先頭を歩く鈴木が急に立ち止まり、列になって進んでいた四人が詰まってぶつかる。

「どうした？急にとまんなよ」

「いや、あれ」

鈴木は部屋の中をじっと見ている。

「あ？」

鈴木の脇をすり抜け部屋を覗く。

「あ・・・」

部屋で一組の男女が、俺達の荷物を物色している。どこかで見た顔だ。頭のどこかに二人を見た記憶が有る。

「あ！あいつら」

ここ数日間の記憶を辿って、ようやく思い出した。何を隠そう、最初にここに来た時、間違えて入った部屋にいたカップルではないか。

「下の階にいたカップルだ！　ったく、どうするかなあ」

「いや、止めなきゃだろ」

刈谷がドアを開けようと手を伸ばす。
手を掴み、刈谷を止める。

「いや、待ってくれ。俺がやる」

こちらに怪我人が出れば、足手まといになることになり、相手を殺せば、ゾンビになってしまう。無駄な戦闘は避けたい。

「そうか・・・じゃあ頼んだぜ」

黙って頷き、深呼吸する。

「おい、あんたら！」

大声で叫び、ドアを勢いよく開ける。男が飛び上がり、こちらを見た。

相手を驚かし、怯ませられれば、無駄な戦闘は避けられるかもしれない。

だが、男は、一瞬驚いた反応を見せたものの、すぐに強気な表情で、凄み始めた。

「あんだ？ てめえ？ 喧嘩売ってんのか？」

女が加勢に入る。

「あんたら、怪我したくなかったら、逃げた方が良いよ」

定型的な脅し文句と、キンキラキンに染めた髪、それ程大きくはない体格。大体、相手の事が解った。オシヤレ不良という奴だ。

気取って不良の真似事をし、女子にも、本物の不良にも、一般人にも嫌われるタイプの人間だ。好き好んでやってる奴らの気がしない。隣に居るあまり見目麗しいとは、言えない女子は、世間知らずで、相手がどういう人間か解っていないお嬢様といった所だろう。

恐らくこちらは、進学校のお坊ちゃまで、抵抗することは無いとでも、思われているのだろう。完全に舐められている今、ここで凄み返しても、余り効果はない。

無表情のまま、相手を睨みつつける。

抵抗される事が予想外だったのだろう。男の表情に一瞬、恐怖が混じる。

（今だ！）

次の瞬間、思いっきり壁を蹴り飛ばす。綺麗に腰の力が入った蹴りが決まる。

バコンと音を立てて、壁が凹んだ。どうやら壁は、あまり強くは出来ていないようだ。

「キヤー！」

思わぬ行動に、女が悲鳴を上げる。間髪を入れずに、机など、周りの他の物にも蹴りを入れ破壊する。

男はこちらの奇行に呆気にとられている。

その隙について、一気に荷物を回収する。急いでドアの外で待っていた三人に一つずつ鞆を渡す。

「ざまあ」

様子を見ていた鈴木が男を見て嬉しそうに笑った。

哀れなことに、女はまだ、男が本当は強い不良だと思い込んでいるようだ。

「ヒデくん。食料持ってかれちゃうよ！」

男は怯えきつてその場を動かない。

何事も無かったかのように荷物を持って階段を下り始める。自分で言うのも何だが、痛快である。

最初は黙って歩いていたが、皆の間に、笑い声がもれだす。

2階まで、来た所でシンがついに吹き出す。

「ブッフフ」

「気持ちの悪い笑い方をするな」

そういいながらも、刈谷も笑みが隠せない。

「いや、カイ、ナイスだわ」

「おう！」

皆、本当に良い笑顔をしている。カラオケボックスを出て道路に出る。気分が良さそうな顔で、道を歩く。

あんな奴ら相手にするまでもないと思いつつも、あの二人の關係が、これからどうなるのか見たい気もした。

告白

竹田達を探す。どこに隠れているのだろうか。姿が見えない。

「竹田、どこだー！」

「カイイ！」

後ろの駐車場から、声がした。三人が壁の陰から出て来る。特に怪我をしてはいないようだ。

「無事だったか」

「遅い！」

間中が食料を取りに行った四人を一人ずつどつく。

「いろいろ有ったんだって」

鈴木は、まだニヤついている。

「食料は大丈夫だった？早くここ、離れようよ」

金山が不安げに周囲を見回す。思えば、金山と竹田は、異変が発生してから、これまで一度も外に出ていない。死体をテレビ以外で見るのも初めてだったので、怯えているのだろう。

「いや、一旦どこかに隠れよう。まだどこに行くかは、決まっていんだ」

間中が袖を引き、自分達が隠れていた建物を指差す。

「あそこの建物、中に入れるよ」

建物の中に死体達は入り込んでいないようだ。

「よし、じゃあ、そこ行こう」

そう言って、刈谷は、荷物を持ち上げようとすると、横から竹田が手を差し出した。

「あたし、運ぶよ」

竹田は、刈谷から荷物を受け取り、それを軽々と持ちあげて、駐車場に走っていく。それを見て、金山もこちらに、手を差し出して来る。

「カイ君、私も荷物、代わるよ」

有り難い話したが、華奢な体付きの金山に、この荷物を運ばせても、時間が掛かるだけであろう。

まして怪我などをされては、堪らない。

「いや、大丈夫だよ。金山さんも急いで隠れて」

片方の腕を曲げ、ポンポンと叩き、笑う。事実、ここ数日間で大分体力がついて来ていたので、荷物を運ぶのも、そこまで辛くは感じなかった。

金山がそれを見て申し訳無さそうに笑う。

「そう」

間中は、荷物の事など気にせず、スタスタと歩いて、建物に入っていく。端から手伝う気など無いのだろう。

全員が、建物の中に入る。

建物内の気温は、高く、皆汗が止まらない。

地震が発生したのは、七月八日である。壁が有っても、季節は外と変わらないようだ。

「タオル欲しいかも」

竹田が袖で汗を拭く。

「後で探してみようか」

「でも、ホテルに行けば部屋に有るだろ」

シンが携帯を見せてくる。

「一応、大きなホテルも、歩いて行ける範囲に、幾つか有るみたいだけど、どこも人が多かった場所だなあ。やっぱりこっちの小さくても、町外れのホテルの方が良くないか？ここからの距離も大したことないし」

画面にホテルの場所が表示されている。シンの言う通り、そこまで遠い場所ではない。せいぜい徒歩二十分といったところか。

「そうか・・・」

確かにどんなに広かろうと、ホテルに入っていく所を死体達に見られれば、元も子も無い。死体達の多い地域に、行くのは賢明とは言えないだろう。

刈谷が立ち上がる。

「もうそこしか無いだろ。今回は、荷物も有るから、死体達と遭遇しても、この前みたいは大立ち回りは出来ないしな」

シンが携帯の地図サイトを開き、それを頼りに歩き始める。理由は解らないが、この状況で、インターネットやGPSが、使えるのは、幸運としか言いようがない。

「ねえ、カイ君」

縦に並んで歩いていると、不意に後ろの金山が声を掛けてきた。

歩きながら、後ろを振り返る。

「ん？」

「ちょっと相談していい？」

何故か金山は、こちらに視線を合わせようとしなない。

「え？ どした？」

金山は目を伏せて、しばらく沈黙し、ようやく口を開いた。

「アタシ、実は、記憶が無いんだ」

「え！」

どういう事だ。竹田との仲は、それなりに長いように見えたが。

「いや、でも、竹田の友達で同じ高校でしょ？ちゃんと覚えてるじゃん」

金山は、首を横に振り、急にヒステリックになって、大声を出す。

「違う、違うの！解らないの！」

声に驚いて、皆が、金山を見る。

「裕子？」

竹田が声を掛ける。

金山は、そのまま地べたに座り、頭を抱え動かなくなってしまった。

移動（前書き）

更新遅れてしまつてすいません。コメントやら感想やらすぐにお返しいたしますので、お待ちください。

移動

皆、歩みを止め、後ろを見ている。

「大丈夫か？」

鈴木が寄って来る。

「いや、大丈夫だから、立ち止まるな。ゾンビに囲まれるぞ」

今回は、町外れから、更に人のいない町外れへ向かうことになる。敵に囲まれるようなピンチに陥る可能性は低いとは思うが、気をつけるに越した事は無いだろう。

金山に背中を向けしゃがみ込む。

「金山さん、囲まれる？」

金山は、黙って頷き、俺の首に手を回した。足に手を掛けて、金山を負う。

金山の体重は、かなり軽い。このままでも、ある程度なら、長距離でも移動ができそうだ。

「荷物、あたしが持つよ」

竹田が、俺が持っていたスーツケースを代わりにに引いて行く。

「ありがとう」

女性でも、竹田程、力が強ければ、男手が一人増えるようなものだ。こういう時は、心強い。

大きな交差点に差し掛かかる。車道は、乗り捨てられた車で埋め尽くされてしまっている。

歩いている間、金山は、背中で、ずっと体を震わせている。

「金山さん、詳しく話してくれない？」

無理に聞き出すのは、良くないかもしれないが、先延ばしにしても、解決にはならないだろう。

「……うん」

金山は、背中から落ちそうになり、肩に掛けている腕に力を入れた。金山の腰を持ち上げ、押し上げてやる。

しばらくの沈黙の後、金山が口を開く。

「私、記憶が三日間だけ無いの」

記憶が無いのは、三日間だけだったのか。

「三日間？いつから？」

「地震が起こった日の三日前から」

「えと、それは、地震の当日も含めて？」

「ううん。その日を数えずに三日間」

地震が起きた当日には、普通にカラオケボックスに遊びに来ていたのだ。常識的に考えれば、当たり前前の事である。

だが、もし、地震や異変によるストレスが記憶喪失の原因なのだとすると、地震や異変の記憶ではなく、その前の記憶が無いと言うのは、おかしい話だ。

「記憶が無いのって怖い？」

「解らない。私、記憶が無い事を、そこまで怖がつてるつもりは無いの。でも、何故か、その三日間の事を思い出そうとすると、胸が苦しくなる」

金山は、時折、鼻を吸いながらそう言った。

金山に目で見えて確認出来る外傷は無い。頭を打ったという訳ではないようだ。やはり、精神的なものが原因なのだろう。

道路に止めてある車の間を縫うように歩く。車の運転手達は、どこに逃げ出したのだろうか。

そんな事を考えながら、ちょうど車道の真ん中当たりまで、歩いた時だった。

急に最前列に止めてあったワゴン車のライトが点灯し、エンジン音が鳴り響く。

「い？」

鈴木がライトの眩しさに目を閉じる。

ワゴン車はスピードを上げ、こちらに近づいて来る。

「危ねえ！」

列の前の方を歩いていた三人は、大急ぎで信号を渡り切る。車が

すれ違う際に、シンの背中を掠った。

「うおお！」

加速する距離が足りなかった事もあり、シンは、怪我はしていないが、突き飛ばされて、前のめりになった。車は、Uターンして、車道側に残された三人に向かって、また発進して来る。

今度は、充分に加速している。ぶつかれば、ただでは済みそうにない。

「殺す気かよ！」

後ろに下がって車を避ける。排気ガスをもろに吸い込んだ刈谷がゴホゴホと咳込む。

「ハーヒャヒャ！ハヒャ！」

目の前を猛スピードで通り過ぎる車から耳障りな笑い声が聞こえた。やはり、こちらを狙ってやっているのか。

通り過ぎた車の背後を全速力で走り抜け、車道を渡る。全員が渡り切ると、車は、今度は、歩道に向けて、突進して来た。

「こっちだ！」

シンが咄嗟に皆をガードレールのある所まで引っ張る。

車は、スピードを緩めずこちらへ向かって来る。

「突っ込んで来るぞ！」

車は、車体の半分だけ中途半端に歩道に乗り上げると、そのままガードレールに勢いよくぶつかった。バコンと音がして、車の運転席の部分が凹む。

「キヤー！」

竹田が悲鳴を上げた。

車内の運転手は、体が潰れていて、原形が残っておらず、それがたった今死んだ人間なのか、それとも、元から死体だったのかは、解らない。

「死体が運転してたのか？ってことは、やっぱり奴ら知能があるのか」

刈谷が恐る恐る車内を覗き込む。

「ここまで、原形が残っていなくても、復活するのかな？」

鈴木が、死体を見て一歩後ずさりする。

「さあ、解らんけど」

刈谷が、車のドアを開けようとする。

「止めとけて！」

そう言っ、刈谷を止めようとした次の瞬間、不意に死体から青白い光が飛び出した。

「え？」

「うお！」

シンが腰を抜かして尻もちをついた。

光は、車の窓をすり抜け、空高く飛んでいく。

「幽霊？」

金山は、空を見上げた後、間中と顔を見合わせた。

「ううん。あれ、霊じゃない！」

間中は、啞然としている。

光は、ある程度の高さまで飛ぶと、そのまま池袋の中心地の方角へ向けて飛び去った。

「何なんだよ」

車内の死体に視線を戻す。

どちらにしろ、ここまでボロボロでは、動けはしないだろうが、死体が復活する時間は、この前、戦った時の事を考えると、そろそろのはずである。

「復活しないな」

「さっきの光のせいなのか？」

いくら待っても、死体はピクリとも動かない。さっきまで立ち止まる事の危険性を語っていたのが、馬鹿らしくなるが、足が動かない。

「いや、もういい。行こう。わざわざ死体が動いてくれるのを待ってやる必要もない。ここで突っ立ってるのも、危ないだろ」

刈谷を先頭に皆、歩き始める。

「カイ君、もう大丈夫。ありがとう」

そう言うと、金山は、背中から下り、隣を歩き始めた。

「そう。無理しないように」

前を歩く竹田から、預けていたスニーカーを受け取る。

「助かった。ありがとう」

竹田が、金山を見る。

「心配か？」

「うん」

そう答えて、竹田は、黙ってしまった。

刈谷が、顔をしかめる。

「だけど、あのパニック障害みたいなのを毎回起こされたらたまらないぞ」

竹田は、泣きそうな顔になって、刈谷を見る。

「あの子、見捨てないよ」

刈谷が竹田から視線を剃らす。

「別に見捨てるとは、言わないけどさ」

竹田は、金山のパニックが伝染して、感傷的になっている。このまま全員がヒステリックな空気に飲まれるのは、良くないだろう。

間中を指差す。

「大丈夫だよ。この数日間で、ようやく今日、初めて一回起きただけだろ。もっとヤバい危険要素が俺らには有る」

それを聞いた間中が、木刀を持って近づいて来る。

「あ？」

皆を壁の代わりにして、その周りを何周もして、逃げ回る。そうして、しばらく走り回ると、間中は、息を切らし、その場にうずくまった。

「参ったか」

勝ち誇った目で、間中を見下ろす。間中は、こちらを睨んで、動かない。流石に言い過ぎたか。

「おい！早く行くぞ！」

刈谷が声を掛けても、動く気配が無い。立ち止まって、睨み合う内に皆は、どンドン進んでいく。

「謝るまで、動かない」

完全に拗ねてしまっている。

面倒臭い。何なんだこの女。冗談程度に流せないのか。

「はぁ？面倒臭い。ハイハイ、ゴメンゴメン」

頭を下げて、謝罪の意を表明する。そうして、その姿勢のまま、地面を見つめていると、急に背中が重くなった。

しかも何だか、暑苦しい。何の重みだろうか。

顔を上げると、目の前にいたはずの間中がいない。

「疲れた。負ぶってけ」

俺の背中に負ぶさっているのか。間中の体温は、かなり高く、近くにいるだけで、体力が減っていく。

一刻も早く、降ろさなければ、死んでしまう。

「シン！ 後、どれくらい？」

「もうすぐ」

すぐとは、距離で表すと、どれくらいなのだろうか。

耳元からスースーという寝息が聞こえる。

この気が狂いそうな暑さの中で、眠っているというのか。

「マジかよ？」

早く誰かに押し付けてしまおう。最後の力を振り絞り、重い荷物と、間中を背負って、皆を追った。

進入

間中を負うのを交代してくれるように、男子には、全員頼んだものの、結局、誰も代わってくれず、一人でホテルまで負っていく羽目になった。

道の右手にある電気店は、2階が崩れ落ち、半壊している。目的地のホテルが地震で全壊しているなんて事が無ければ良いが。

「スーツケース、また持とうか？」

竹田が再びそう申し出て、手を差し出した。

「いや、もう大丈夫だよ。もうすぐホテルらしいし」

竹田を心配させないよう笑顔で、歩くスピードを上げる。本当に大丈夫な訳ではないが、これ以上、竹田に頼るのは、申し訳ない。背中に負ぶさっている間中の頬をつたった汗が自分の肩と胸をつたった。何だか不思議な気分になって肩にもたれ掛かっている間中の顔を見る。

少し口を開けて寝ている様子は、どこと無く小動物に似ている。どうにも憎たらしい印象が先行するが、彼女も、静かにさえしていれば、実は、可愛らしいのかもしれない。

角を曲がった道の先にホテルの大きな看板が見えた。

シンが俺の背中をポンと叩く。

「ネット環境完備だってよ」

看板の下の方には、確かに、インターネット利用可能と書いてある。

「おお、ちゃんと使えるのか解らんが、情報収集には、役立つな」
ネットで情報が集められるのは、確かに便利だ。だが、俺の場合、情報収集というのは、建前で、実は、ゲームがしたいのである。元からヘビーなゲーマーである俺にとって、ゲームが出来ないのは、それだけで辛い。

パソコンがあれば、いくらか遊びの選択肢が増える。

「シャワーがあるのは、有り難いかもね」

金山が竹田に向かって言った。

確かに、カラオケボックスにいた日数だけを数えても、そろそろ三日になる。体は、大量に汗をかいたこともあり、相当汚くなっているはずだ。お互いの臭いが気にならないのは、恐らく、皆、自分が臭いため、他人の臭いが気にならなくなっているからだろう。

まともな治療が出来ない今の状況では、不衛生な環境のせいで風邪を引いたりしただけでも、死活問題になりかねない。

「カラオケボックスは、何となく窮屈だったからな。引越してよかったかもな」

刈谷が、そう言いながらドリンクを飲み干した。

鈴木が頷く。

「もっと寂れた所を想像してたけど、案外綺麗だしな」

この手のホテルによくある安っぽい西洋風の外装は、何となく下品に見えるが、確かに、思ったよりは、まだ。

「一旦、何人かで、様子を見に行った方が良いな」

「アタシ行く」

いきなり背中を突き飛ばして、間中が地面に降りた。

「痛！ 起きてたのか！ 降りるなら、言えよ！」

「何だ。珍しいな。お前が行きたがるなんて」

刈谷は、間中が最初の日コンビニで、手に入れた飴を口の中で転がしている。

「アタシと一緒に行けば、霊の居る部屋が解るでしょ」

金山が不安そうな目で、ホテルを見る。

「そうだね。霊の居る部屋に引っ越す事になったらやだもんね」

金山は、間中を霊能力者だと信じているようだ。確かに、それは、真実なのだが、話を聞いただけでは、俄かには、信じ難い事だろう。素直に信じる事の出来る金山は、それだけ純粹だということか。

シンが武器を入れていた袋を開ける。

「中で死体と会うかもしれないから、武器を持っていこう。外で待

つてる奴らも一応、何か、持っつけ」

皆が駆け寄り、袋から武器を取っていく。

間中が、ヌンチャクを取り出して大事そうに抱えた。

「この前は、あんなに嫌がってたのに、ヌンチャクで良いのかよ」

「霊と会う時には、馴染みの有るものを身につけていた方が良いの」
「霊の事が良く解っている訳ではないので、反論は、出来ない。もちろん、する気も無いが。」

「そういうもんか」

金属バットを振り回し、感覚を確かめる。他の武器でも、多少変化は、有るのだが、金属バットは重心の位置が、特殊な上に、竹刀や木刀よりかなり重い。

余り無茶をすると、自分の腕を悪くする可能性も有る。出来るだけ、体に負担のかからない戦い方を考えなければ。

「今回はパス」

刈谷は、暑さのあまり既にばてている。悪い言い方をすれば、間中が来るということは、足手まといが一人増えるということだ。

だが、霊の見える間中と一緒に泊まる部屋を選んでくれた方が、後々には、苦勞する可能性が低くなるのも確かである。

間中を守るためという意味では、出来るだけ男子は、連れて行きたいが、熱中症で倒れられては、敵わない。

「仕方ないな。鈴木お前は来れるだろう」

「おう」

鈴木がベルトに木刀を挿した。

戦慄（前書き）

更新遅れちゃいました。しかも今回の更新も、あんまりボリューム
ないです。今週中にまた続きたくさん書いてきますので、見捨てな
いでください。

戦慄

ホテルのドアを開けて中に入る。死体がいる気配はない。

ふと思ったことだが、ちゃんとした数字までは、解らないが、ゾンビに殺されることで、ゾンビになった人間は、そこまで多くはないのではないだろうか。

最初の頃の混乱の中で、死体達に囲まれるような状況に陥ったりしたなら、まだしも、あの緩慢な動きの死体達とまともに戦って、負けるほうが難しい気がする。

そう仮定すると、今、歩き回ってる死体達は、実は、ほとんどが地震で死んだか、もしくは、食料不足で餓死した人達なのかもしれない。

「何か感じるか？」

間中が首を横に振る。

「今のところは、何も。本当に人を殺すような霊がこのホテルにいるとしたら、建物に入った時点で、気付くはずだから。とりあえず、そういうのは、いないと思っただけだと思う」

鈴木が後ろを振り向く。

「死ぬ呪いかけられたら絶対助からないの？」

「そういう呪いを持ってるやつらは、ホラー映画のお化けみたいなもんだから。呪いをかけられたら、大体の人は、死んじゃう。でも、たまに助かる人とか、何かの拍子に呪いを解いちゃう人とかもいる。そこもホラー映画と同じなの。まあ、滅多にそんな事は、無いから、それに期待は、出来ないけど」

鈴木は、視線を前に戻してふーんと返事をした。

カウンターを乗り越え、部屋の鍵を探す。

「男女で分けて、二部屋あれば、充分だろ。あんまり、バラバラになるのも危ないしな」

「出来れば、人が少ない階が良いと思うんだけど………これ

か！」

鈴木がカウンターの裏の部屋の鍵を見付けた。並べて有る鍵を見て、空いている部屋を確かめる。

人が入っている部屋が、意外と有る。

助け出すような余裕は無いが、そのどれかには、まだ、生存者が居るのかもしれない。

並んだ二部屋の鍵を取る。

「おし、行くぞ」

そう言っ、立ち上がろうとすると、急に鈴木に頭を押さえ付けられた。

「何すんのよ！」

俺と間中の頭を押し付けたまま、自分もしゃがみ込む。

「どうした？」

「ゾンビだ！」

「え、今かよ！」

ホテルの中にも、何体かいる事は、予想していたが、悪いタイミングで、出くわしたものだ。

「どうする。他に泊まれる所を探して見るか？」

鈴木が腰から木刀を抜いて構える。

「いや、ゾンビが一体もない場所なんか、もう何処にも無いだろ。自分達がどの部屋にいるのかさえばれてなければ、それでいいよ」

地面を摺るような足音が聞こえて来る。

「あのゾンビは、武器、持って無かったな。たった一体のゾンビにロビーにいるのを見られたってどうこうならないだろ」

鈴木がカウンターを飛び越え、踊り出る。

「大声を出される前に倒さないと、他のゾンビも集まって来ちゃうな。俺達も行くぞ」

鈴木が背後から頭部を不意打ちする。

「アァッ！」

悲鳴を上げようとする死体に、袈裟を刀で切るように、金属バツ

トを振り下ろす。

「はあああ！」

間中が、目をつぶって、突進して来ている。
何を考えているんだ。

「馬鹿！ 目を開けろ！ あぶねえぞ」

鈴木と一緒に頭を抱えて、地面に伏せる。

ゴンという鈍い音がした。

ヌンチャクの重い一撃が入った死体は、そのまま床に倒れ込む。

「やった！ アタシ凄い！」

間中は、誇らしげにガッツポーズをとった。

「呑気な事言ってんな！ 今の内に、皆を呼びに行くぞ」

外で待っている皆を手招きで、呼び寄せる。左右を確認して、ぞろぞろと四人がトラックの陰から出てくる。

「どうだった？」

刈谷が小声でそう尋ね、ホテルに入って来た。

「大丈夫だと思うけど、何体かゾンビが居るらしい。今、一体倒した所だ。復活する前に、急いで移動しよう」

鈴木がエレベータの上のボタンを連打している。気持ちは、解るが、効果は、無いだろう。

エレベータのドアが開き、皆が駆け込む。

「あれ、ドア閉まんないぞ」

鈴木は、閉まるのボタンを連打している。

シンの腹が支えて、ドアが閉まらないのだ。

「うっそん！」

死体がピクピクと体を動かし始めている。

「こんのオデブ！」

刈谷が力いっぱい、シンをエレベータの中に引き入れるが、ドアは、閉まらない。

「鈴木、部屋の番号は？」

「え？ 407だけど、何で？」

シンの腹を押し退け、エレベータの外へ出る。

「行つてらっしゃい！」

エレベータの中の皆に敬礼をする。俺が飛び出すと同時に、ドアが閉まり始めた。

「うおい！」

鈴木が一瞬、手を伸ばそうとし、すぐに引つ込めた。

「えー・・・まあ、じゃあ、後で」

ドアが閉まり、ワイヤーの動く音がし始めた。今度は、体重オーバーで、止まらなければ良いが。

エレベータが上へ向かったのを確認し、自分は、階段へ向かう。荷物が無ければ、四階程度なら、階段でも上がれるだろう。

自分で言うのも、変な感じがするが、軽快な足どりで階段を上がつていく。

「ぐああ！」

不意に低い音の耳鳴りが耳の奥で鳴り響いた。耳鳴りの症状が初めてな訳ではないが、これは、普段のそれとは、明らかに違う。

「何なんだよ！ これ！」

音が段々、大きくなっていく。いや、音が近づいて来ているのか。空気が重くなったように感じる。思うように動けなくなる。

逃げなければ。

逃げなければ、死ぬ。

対峙（前書き）

すいません。大幅更新できませんでした。

対峙

「うあ！」

やっとのことで出した足を前に出したものの、力が入らずバランスを崩してしまう。

手摺りに縋り付くように掴まり、階段を一段一段上がっていく。青白い手が、下の階段の手摺りを掴んだ。

何故だろうか。今、迫って来るその正体を、自分は、知っている。

死体ではない。

捕まれば、殺される。

必死で手足を動かし、四階に着く。今や、ほとんど四つん這いのような姿勢になっている。

四階の廊下を左右の壁にフラフラとぶつかりながら走る。

皆が待っているだろう部屋のドアの前に立ち、ようやくある事に気付いた。

「あ・・・あ、そうか！ クソ！ ちきしょー！」

駄目だ。あれだけ気をつけていたのに。痛恨のミスだ。このまま部屋に入る事は、出来ない。

奴に部屋に入っていく所を見られれば、中の皆は、全滅してしまう。

どうすればいい。

階段に戻るには、ここに来るのに時間を使い過ぎた。今は、この部屋から注意を逸らさなければ。

エレベーターは、先程、使われた時のまま四階にある。

ボタンを押して、エレベーターに乗り込み、最上階である七階のボタンを押す。

エレベーターの中の緊急連絡の電話から、誰かの声が聞こえる。

「カギ・・・ガイ・・・」

「クソが！ 黙れ！」

スピーカーを思いっきり殴る。

耳鳴りには、ラジオのノイズのような音が混じっていく。

急に、後ろから壁を叩く音がした。

振り向くと、今度は、前から。そして、また振り向くと、今度は、左から。

音は、段々テンポが速くなり、激しさが増していく。

「氣い狂いそうだ！」

エレベーターのドアが開く。七階に着いたのだろうか。

何故か廊下の明かりが消されている。

体が見えない何かに廊下に引きずり出される。

「うわあああああああああああああ！」

廊下の奥の角から、ボタンと何かが地面に着く音がする。

奥から、また、青白い顔で、目を見開き、女が歩いて来る。

女が近付くにつれて、耳鳴りのノイズが酷くなっていく。

「ああ・・・うあああああ！」

壁に背中を付け、金属バットを構えようと、腰に手を伸ばす。

「あ！」

次の瞬間、バットは、先程、自分を引っ張ったものと同じような力で奪われ、廊下の奥の闇に飲み込まれた。

「クソ！」

出来るだけ、女から離れるために、目を固く閉じ、上を向き、体を反らせる。もう向き合い戦うような精神力は、残っていない。

ここで俺は、死ぬのか。その鼓動を確かめるように手を心臓の位置に置いた。

刈谷

エレベーターのドアが閉まり始め、カイが階段のほうへ走っていく。

「大丈夫かな」

竹田は、カイが行った方向を見つめている。

「大丈夫だろ」

多少のことでは、カイが死ぬとは思えない。遅しいというか、マイペースな性格なのだ。それよりも、死体がまだ何体かホテルの中にいることを考えると、気をつけなければいけないのは、こちらのほうである。

壁に立てかけておいた棒を脇に挟んで構える。

エレベーターが四階につきドアが開いた。

「じゃあアタシ達は、こちらの部屋で」

金山が406号室のドアの鍵を開く。

「カイがどちらの部屋に来るか解らないから、どちらの部屋にも人がいるようにしたほうがいいよな」

407号室の鍵を鍵穴に通す。

「駄目！」

間中が、そう叫んで手から鍵を奪い取った。勢いよく引っ張られたせいで、手に痛みが走る。

「いって！ あ？ どうしたんだよ」

間中は、全員を406号室の方へ、引っ張り込んむと、大急ぎでカーテンとドアの鍵を閉め、ベットの上で体育座りのまま動かなくなってしまった。

鈴木が間中の肩に手を置く。

「パニック起こすなよ。407号室には、幽霊がいたのか？でも、そんなに強い霊は、このホテルには、いないんだろ。慌てる事ねえじゃねえか」

「違えよ！　そういうんじゃないだよ！　本当は、今やってることも意味無いかもしれないんだ！」

間中は、イライラし始めると、男のような言葉遣いになるようだ。「意味が解らん。解るように説明しろ」

「・・・徘徊者だ」

「ハイカイシャ？」

「呼んで字のごとくだよ。呪う相手を町を歩き回って探す霊。古矢さんの話だと、こちらの位置がわかってる上に、どこにでも現れるらしい。出会ったら助かりようがない敵に怯えるなんて、意味が無いから、アンタ達には、教えなかったの！」

「え・・・そいつが今、ここにいるのか？　カイは、安全なのか？」状況が一変してしまった。カイは、今どこにいるのだろうか。無理やりにでも引き止めるべきだったのだろうか。

「解らない。でも、多分アイツを追っかけてるんだと思う」

シンが嘆息して、ベットのの上に腰掛けた。

「でも、そんなことが出来るのに、どうしてそいつは何で東京中の人間を皆殺しにしないんだ？」

「それも解らない。神に近いレベルの力を持った霊は、必ずしも人間と同じような感情や理性に従って、行動するわけじゃないから」

竹田がドアの方へ駆けていく。鈴木がその手を掴んで、竹田を止めた。

「下手に逃げ回っても助からないよ。皆が離れないほうがいい」

竹田が鈴木に掴みかかり、突き飛ばした。

「だって、カイを助けなきゃ！」

「落ち着いて！　加奈子！」

金山が止めに入り、竹田の頬を叩いた。泣き出して、縋り付く竹田を抱きしめて、背中を叩く。

「安全になったら・・・安全になったら、カイを探しに行こう。きっと大丈夫だ」

根拠の無い発言だ。だが、今は、助けに行くことも出来ない。

おそらく、この前、カイが間中とあの胡散臭い霊能力者と話し合っていたのは、このことだったのだろう。
頭を抱え込んで、その場にしゃがみ込んだ。

刈谷2 (前書き)

夏休みが終わるよ。やだよ。

刈谷 2

大丈夫な訳がない。誰も口に出さなかったが、いくらカイでも、そんな物に狙われて、無事で済む訳がない。

「安全になるまで後どれくらいかかる？」

そう尋ねるが、間中は、俯いたままで、中々、答えが返って来ない。カイを危険に晒した事に責任を感じているのかもしれない。

「俳諧者がこの近くから、消えたら解るとおもうけど、いつ消えてくれるかは解らない」

間中は、しばらくして、ようやく、呟くように、そう答えた。

何も出来ず、ただ時間だけが過ぎていく。危険を承知の上で、カイを助けに行くべきだったのだろうか。

鈴木は、イライラして、足を揺すっている。

数分が経った後、間中が立ち上がった。

「多分、もう大丈夫」

それを聞いた途端、鈴木がベットから飛び降りて、部屋を飛び出す。

「俺は、上の階を探す」

「じゃあ私達は、下の階で」

金山が竹田の手を引いて、部屋を出ていく。

シンが立ち上がって、こちらを見る。

「そうすると、俺らは、ホテルの外を探した方が良いのか」

皆、焦って、好き勝手に動き出してしまった。何も起きなければ良いが。

だが、急いだ方が良いのも事実だ。

「三人か。広い範囲を探すなら、人数が多い方が良いんだけどな」
間中がベットから飛び降りる。

「駄目だよ。誰か一人は、ここに居ないと。あいつは、アタシ達がここに居ると思ってるんだから」

今まで、間中がこんなに主体的に、俺達に協力することが有った
だろうか。カイの事を本気に心配しているらしい。

「そうだな。この辺に隠れてるかもしれないなら、やたらめったら
遠くを探しても意味ないか」

「皆にも、知らせておくけど、今から、三十分したら、一旦、部屋
に集まるようにして」

シンと顔を見合わせる。

「ああ、解った」

シンと二人で、エレベーターに乗り、一階まで降りる。

ドアの外から、赤い光が差し込んでいる。先程の死体の姿が見え
ない。また、どこかへ行ってしまったようだ。

「俺は、こちら側から建物の周りを回ってみる。お前は、反対側か
ら、回れ」

左側の道を指差す。

「んでもって、反対側で会おう。ゾンビに気をつけろよ」

「了解」

シンは、頷いて、カイの名を呼びながら、左側へ走って行った。

自分も右側に道を進み始める。

カイの名を大声で呼ぶ。余り大きな音を出すと、死体が集まって
来てしまうが、ただ歩き回るだけでは、カイがどこかに隠れていた
時に、素通りしてしまう。

「ウヒヒ！ ウヒヒ！ ハヤワ！」

壊れたおもちゃのような笑い声を上げで、後ろから何かが迫って
来ている。

「こんな時に！」

小さめの子供くらいの大きさのゾンビが白目を向いて、シャカシ
ヤカと素早く手足を動かし、突進して来る。

棒を振り回して、頭を殴る。柄の長い武器は、鈍器のように使う
には、不向きだ。不意を突いたことで、当たりはしたものの、勢い
が死んでいる。

「アヒイ」

ゾンビは、驚いて飛び上がり、またこちらへ迫って来た。棒を短く持ち直し、ゾンビの足を風ぐ。

すると、今度は、ゾンビは、ヒョイと飛び上がり、棒を躲した。今まで会った他の死体に比べて、動きが俊敏過ぎる。普通の死体では無いのか。一人で倒し切るのは、無理だ。もうすぐ建物の反対側に出られる。

シンと合流して、戦おう。

背中を向けて、逃げ出すと、死体がまた奇妙な走り方で迫って来る。

シンは、既に建物の裏に着き、手を振って、待っている。

後ろのゾンビを確認し、叫ぶ。

「ゴメン！ 何か変なの連れて来ちゃったわ！」

「うわ！ 何だあの動き？ ロボットみたいだな」

「やたら動きが早いんだ。適当に大振りに殴っても、当たらないかもしれない。俺が棒で突いて、一瞬動きを止めるから、そこをぶん殴れ！」

物凄い勢いで走って来るゾンビに対して、大きく一步踏み出して、棒を突き出す。

だが、ゾンビは、横に飛び、攻撃は、躲された。今度は、ゾンビが突き返す事の出来ない間合いに入った状態から、飛び掛かって来る。

「下手くそ！」

シンが木刀でゾンビを何とか打ち返した。

「グヒイ！」

ゾンビは、吹っ飛ばされ、動かなくなった。体が小さい分、耐久力が無いようだ。

「動き止められてねえじゃねえか！」

シンが小馬鹿にしたような顔でこちらを見ている。

「いや、スマン」

結果的に倒す事が出来たが、実は、軽くピンチだったかもしれない。

「前に武器を持った体のでかいゾンビを見た。ゾンビにも一応種類とか固体差みたいなものが有るらしいな」

「そうだったのか。てか、それよりもカイは？」

黙って首を横に振る。

もう、カイが生きているか解らない事は、全員解っているはずだ。それでも、カイを探さずにはいられない。

「そうか」

シンは、意気消沈して、ガードレールに腰掛けた。

横に転がっているゾンビを見る。

「もう少し、探したいけど、こいつに復活されたら、厄介だな」

「ひよっとしたら、形が無くなる程殴れば、こいつもあの車の運転手みたいに動き出さなくなるんじゃないか？」

やってみる価値は、有りそうだが、何だか気が引ける。

「しゃーないな。やってみるか。いっせえのせでやるぞ」

「頭を叩き潰すのが一番散らからないだろうな」

シンがゾンビの頭部を指差して言った。

武器を、目を閉じて、思い切り振り下ろす。

「いっせいのせ！」

前から解ってはいたことだが、空が赤くても、東京を壁で囲まれていても、季節や天候は、通常通りのままらしい。激しい運動と暑さで意識が朦朧としてくる。太陽の光も入って来ないのに、不思議な話だ。

「もう良いだろ」

目を開けて、シンを止める。ゾンビの顔は、既に崩れている。

「またあの青白い光が出て来るのか」

「さあな」

例の光がゾンビの体から飛び出した。

「やった！」

これで本当に、復活しなければ、安心して、カイを探す事が出来る。

「ゾンビっていうから無限に何度でも蘇るのかと思ってたけど、そういう訳じゃ無いんだな」

シンが武器で地面に倒れているゾンビを突く。

「さっさと探しに行くぞ」

シンの服の袖を引く。

その後も、しばらく、探し続けたが、カイは、見つからなかった。肩を落とし、部屋に戻る。

他の三人は、まだ帰って来ていないらしい。

「他の奴等が見つけてるかもしれないだろ。そんな顔すんな」

「ああ。そうだな」

金山達と鈴木が順番に帰ってきた。

鈴木の手には、カイの金属バットが握られている。

「お前、それ！カイがいたのか？」

鈴木が首を横に振る。冷たく、魂の抜けてしまったような目をしている。

「いや、これが落ちていただけ」

「・・・そうか」

間中が手を叩き、注目を集め、テーブルの上にクッキーの袋を開ける。

「とりあえず、何か食べるぞ」

皆が二三枚つつ取り、口に運ぶ。人が一人居ないだけで、こんなにも、会話が無くなってしまうのか。無力感が、この部屋にいる誰にも平等に襲い掛かって来た。

刈谷3（前書き）

二話連続投稿です。学校が始まったので、これから毎週に一度しか更新できなくなっちゃいます（涙）

刈谷 3

誰がつけたのか解らないが、テレビがついている。

画面には、どこかの国の軍隊が東京の壁を爆弾で破壊しようとしている映像が映っている。

爆弾を爆発させるが、壁に変化は無い。威力の強い爆弾を試しているようだが、壁を破壊することは、出来なかったようだ。

当たり前だが、核を使うことは、出来ない。やはり、もうここから出ることは、出来ないのだろうか。

部屋は静まり返り、誰も喋らない。全員、淀みきった表情をしている。

カイの話題を出さないのは、カイを忘れているわけではなく、思い出しても仕方がないからであろう。

見兼ねて、シンが口を開く。

「壁に爆弾を仕掛けたり、地中奥深くまで潜ったり、空から突っ込んでみたり、外側からも、色々やってくれては、いるみたいだけど、駄目みたいだな」

下を向いていた鈴木が視線をテレビに移す。

「どういうこと？ 宇宙まで無限に壁が続いてんの？」

「いや、どうやら俺達、筒というよりは、箱のような物の中に居るらしい。パラシュートで降下しようとした海外の軍人さん達が上空で急に足が透明な天井に着いちまって、大慌てだったらしいよ」

明らかに無理をして、引きつった顔で竹田が笑った。その目は、まだ若干腫れている。

「何か間抜け」

笑って話しているが、異変が起こってから、事態を解決する糸口は一向に見えてこない。それどころか、外に出られる望みは、段々、薄くなっていくばかりだ。

「こういう大掛かりな作戦もいつまでも出来るわけじゃないよな。

海外の軍隊は、日本の事ばかり構ってるわけには、いかないだろうし、日本の他の地域だって、いろんな組織の中心部がある東京が駄目になってるんだから、自分の事で精一杯だろ」

金山がゆつくりと頷く。

「そうかも・・・」

鈴木が何か思いついたように立ち上がる。

「だからさ、あのさ。一度、行かない？あの鳥居のに」

「は？ まじで言ってるの？」

カラオケボックスの前に現れた鳥居の事を言っているのだろう。最後には、行かなくてはならないと思っていたが、今がその時とは思えない。

全員の目を見ながら、鈴木は演説を続ける。

「外からの助けは、もう、あんまり期待できないだろ？それに、このホテルに籠城してるだけじゃ徘徊者がもう一度、襲って来たら、どちらにしろ皆、死んじゃうかもしれないし」

鈴木がどうしてこんな突拍子も無い話を始めたのかは解らない。

カイが消えたことで動揺して、焦っているのだろうか。

「いや、そうだけどさ。お前、カイがいなくなつてやけくそになつて言ってるだろ？」

「違うって！ 俺が行きたいんだよ！」

シンが、机にひじを着き、顎について呟く。

「行ってみるか」

「お前まで何言ってたんだ。あそこには、あの卵もあるんだぞ。何の為に逃げて来たんだよ」

「一度でいいんだ！ 危なそうだったら、近くを見て来るだけでも良いし」

その一度で一度死んでしまつたら、もう帰つてこれられないということを知っているのだろうか。二人は、完全に行く気になっている。

「じゃあ、出発は、明日にしよう。今日は、もう皆疲れてるでしょ」

竹田がベットに倒れ込む。鳥居に行く事自体には、賛成らしい。

全員行くとになれば、俺だけが行かないわけには、いかないだろう。説得するのは、諦めるしかなさそうだ。

それならば、綿密に作戦を練るしかない。

「……………本当に危なくなったら、すぐ帰るぞ」

「ああ」

鈴木が頷いた。

机の上の鍵を持ち、部屋を出る。

「俺達も部屋に戻ろう」

部屋にベットは二つしかない。一つのベットは、シンでいっぱいになってしまいうだろう。もう一つのベットを二人で使えば良いのかもしれないが、正直、男と同じベットで眠るのは、御免だ。

「俺は、机で寝るよ」

そう言って、机に突っ伏した。

別に二人の事を思いやっているわけではない。

やりたい事が有るのだ。

刈谷 4（前書き）

二話連続投稿第二回です。

刈谷 4

机の寝心地の悪さも手伝って、それから三時間程で目が覚めた。予定通りである。

クッキーとペットボトルを鞆に一つずつ詰める。

二人を起こさないようにドアをゆっくりと押し、部屋を出た。

朝の静けさの中で、自分の足音だけが廊下に響いている。

エレベーターのボタンを押す。

昨日、最後に四階に止まっていたはずだが、はずのエレベーターが一階に降りている。他にも誰か起きているのだろうか。

あるいは、他の生存者やゾンビということも考えられる。

一階のロビーに着く。

玄関から、外に出ると、目の前にトラックが見えた。

近寄って、運転席を覗き込む。ガソリンは、半分以上残っていて、エンジンの鍵も刺さりっぱなしになっている。

昨日、外でカイを待っている間に気付いたのだ。

ドアを開け、運転席に乗り込む。

大きく深呼吸をして、エンジンを掛ける。

エンジン音に反応して、ゾンビが集まって来ないか、バックミラーを確認する。

記憶の糸を手繰り寄せながら、操作をする。

ギアを入れると車が動き出す。怖くなって、慌ててブレーキを踏む。何とか動かす事が出来そうだ。

コンコンと誰かが車の窓を叩いた。

驚いて、助手席の方へ逃げる。

見ると、外側から金山が車内を覗き込んでいる。胸を撫で下ろし、ドアを開けた。

「びっくりした。お前か」

「ゴメン。声を掛けようと思ったんだけど、タイミング逃しちゃっ

た」

金山が申し訳無さそうに、手を頭の後ろに置いた。

「運転・・・出来るんだね」

乗ったまま話しをするのも何なので、エンジンを止め、車から降りる。

「いや、今日が初めてだよ」

金山の顔に感動が滲み出る。何となく照れ臭い。

「そうなんだ。凄いね！これで鳥居の場所まで行くの？」

「いや、直接あそこまで行くのは、無理だろうな。街に近づけば、車道には、車が止めて有って動きが取れないし、ゾンビが集まって来ちゃうだろ。遠回りだけど、ゾンビの少ない道を通って、近くまで行くくらいなら、出来ると思うよ。ていうか、俺が言うのも変だけど、こんな時間にどうしたの？」

「ちょっと外の空気を吸いたくなりまして」

冗談めかして、わざと事務的な口調で金山が言った。

「そうか。でも、あんまり一人で外に出ると、皆が心配するかもよ。まだ完全に朝って時間帯でもないし、早く部屋に戻って、もう一眠りしよう」

金山は、素早く二回頷くと、寒そうに自分の体を抱いた。

夏でも深夜から早朝の時間帯は、やはり若干寒い。

刈谷5（前書き）

早くカイがどうなったか書きたい

刈谷 5

外気の冷たさから体を守るように、出来るだけ体を小さく丸めてホテルへ戻る。

「そういえば、部屋のベットって二つしか無いよね？どうやって寝てんの？」

「え。私達は、普通に皆で分けて使ってるけど・・・」

「そっか」

やはり、ベットを分けて使うのがベターな手段なのだろう。

だが、それは、女性同士だからこそ出来る事だ。男が二人並んで寝るなんてことは、想像したくもない。

ホテルの中にゾンビがいないのを確認してからドアを開け、金山に道を開ける。

「どうぞ」

「ありがとう」

金山が口角を僅かに上げて微笑む。

「いえいえ」

警戒しながら、ロビーを速足で横切る。

ボタンを押して、エレベーターに乗り、壁にもたれかかる。

エレベーターが動き始める。

「鳥居に行けば、何か解るかな？」

共通の話題も無く、困っている、急に金山がそう聞いてきた。

どう答えるべきか。一瞬、考えてしまう。

「そうだな。それに、動き回ってれば、ひょっこりカイと会えたりするかもしれないしな」

こちらを見ると、また笑みを浮かべ、金山が頷いた。

エレベーターが四階に着き、ドアが開く。

「もう何時間かしたら、出発することになると思うからさ。お互いしっかり眠るところ」

「そうだね。おやすみ」

金山は、そう言うのと、手を振り、部屋に入った。それを見て、自分も部屋に入る。

鈴木は、ベットからずり落ち、シンは、大きないびきをかいている。

このままでは、うるさくて眠れないだろう。

シンの鼻を詰まむ。シンの呼吸が止まり、しばらくすると、口で呼吸をし始めた。また、いびきを始める前に寝てしまわなければ。運良く、鈴木がいなくなったベットに大の字で体を倒す。

一瞬、目を閉じると、体がふわりと浮かぶような感覚になる。

そうして、もう一度、目を開けると、シンと鈴木がベットの左右に立っていた。

「おはよう！ 刈谷！」

鈴木が肩を揺すってくる。

慌てて、置き時計を見る。

先程、見た時から、三時間分、短針が進んでいる。

「うわ！ 結構、寝ちまったか？」

シンが携帯用のバー型ケーキとお茶を差し出して来る。

「空がいつでも真っ赤なんだから、時間もへったくれも有ったもんじゃねえだろ。気にしなくてよくね？」

「悪いな。俺待ち状態か？」

「皆、今から行く所だよ。気にしなくて良いから、早く準備しろよ。シャワーぐらい入っていく時間は、有るよ」

そう言いながら、鈴木がリモコンを手に取り、テレビの電源を付けた。

シンに背中を押され、シャワールームに放り込まれる。

「皆、シャワーは浴びてから行く流れになってんのか・・・」

仕方が無いので、服を脱ぎ、シャワーのスイッチを捻った。

手でお湯の温度を確かめながら、少し温めの温度にする。

シャンプーとボディソープで大急ぎで体に塗りたくり、一気に洗

い流す。

湯舟に浸かりたいが本、先程の鈴木とシンの様子からすると、全員、既に行く用意を始めているはずだ。

自分のせいで全員の行動が遅れるのは、流石に申し訳ない。

洗面台の下にシンと鈴木が使ったタオルが落ちている。

棚に残っている未使用のタオルを使って、体を拭く。

代えの服も無いので、シャワーを浴びる前に脱いだ服を着る。せっかく体を洗っても、汗で汚れた服をまた着たのでは、綺麗にならないのでは、ないだろうか。

チャンスがあれば、服も調達しなければならないだろう。

「上がったぞ」

タオルを首に架け、シャワールームを出る。

「後、五分で行くぞ。早く飯食えよ」

二人が部屋を出て、下の階に降りて行った。

「はいはい」

ベットに腰掛けて、ケーキを口に入れ、お茶で流し込む。

床に置いてある棒と鞆を足で引き寄せ、中身を見る。

一応、夕方には、ここに帰って来る手筈になっているのだ。最低限の食料と武器以外の荷物は、置いた方が良さだろう。

ケーキの最後の一片を食べ終わり、立ち上がる。

廊下に出ると、二人を乗せたエレベーターが動いていた。

また来るまで待つのも時間がかかりそうなので、歩いて階段を降りる。

ホテルの外では、トラックの荷台に皆が目を輝かせて、乗っている。

金山が昨夜の事を話したのだろう。

「俺は、運転なんて見様見真似だぞ。本当に良いのか」

「駄目元でやってみようぜ」

鈴木は、落ち着かなそうにトラックの上を行ったり来たりしている。

「じゃあ。やってみるけど」

運転席に乗り込み、エンジンを動かす。

車が動き始めると、後の荷台でちょっとした歓声が沸き上がる。

初めて車に乗る訳でもあるまいに。何をはしゃいでいるのだろうか。

「行くぞ！」

アクセルを踏み込むと、トラックは、段々と速度を上げ、道を走り出す。

窓から入る風が何とも言えず、気持ち良かった。

刈谷6（前書き）

カイがどうなったかは、来週のお楽しみ。

刈谷 6

頻繁にブレーキを掛けながら、慎重に車を進ませる。

車が急停止する度に後ろの荷台から喚声が聞こえる。

何がそんなに楽しいのか知らないが、五月蠅過ぎて、運転に集中出来ない。

だが、止めてと頼んで、止めてくれる雰囲気でもないので、仕方なく、黙って車を走らせる。

最初は、上手くいなかったものの、しばらく運転していると、やり方が解って来て、思い通りに車を動かせるようになった。

思ったよりも、車道も混んでいない。何とか進んで行けそうだ。大きな通りに出る。

事故で大破したままの車が放置されていて、通れなくなっている。

「こりゃ駄目だ。道を一本ずらそう」
車をＵターンさせ、来た道に戻る。

帰りの事を考えると、今の内に、この辺りの車で通れる道を覚えてしまった方が良くかもしれない。

進んでは、車で封鎖された道に突き当たり、道に戻るという事を繰り返す内に、カラオケボックスの大分、近くまで来ることが出来た。

だが、目的地に近づくにつれ、道が混み合い、思うように進めなくなっていく。

「これ以上は、無理だな。後は、歩いて行こう」
車を止め、エンジンを切る。

「えー。だるーい」

鈴木が愚痴をこぼしながら、車を降り、運転席に近寄って来る。

「仕方ねえだろ。ほれ。そこどけよ。降りられねえだろうが」

ドアで鈴木を押し退け、自分も車から降りる。

「あんまり長い間、外うろつかない方が良いでしょう。急ごうよ」

竹田が先頭を歩き始める。

何分とも経たぬ内に、カラオケボックスとその足元にある鳥居が見えて来た。

「おい！刈谷！見ろ！」

シンが後を振り向くなり、急に叫ぶ。

「え？」

振り向くと、カラオケボックスの向かいの公園にいたゾンビの大量が消え、あの巨大な黄色い卵が割れている。

「うわ！あれ、やっぱり、何かの卵だったのか」

卵の側に駆け寄り、中を覗き込む。

何かの液体が底の方に溜まっている。

「で、中身は何処に行った訳？」

間中が首を傾げる。

「さあな。でも、やっぱり、この辺に居るのは、危険だ。さっさと帰ろう」

「え！　ここまで来て、それは、無いだろう！」

鈴木が一人で鳥居の方へ歩いて行く。

「ちょっと！　危ないよ！」

金山が肩を掴んで、鈴木を止める。

「大丈夫だって！　金山さん」

肩に置かれた手を穏やかに外し、鈴木が走り出す。

「勝手な事すんな。アホ！」

鈴木は、そのまま鳥居の奥の祠へ入って行ってしまった。金山が心配そうにその背中を見送る。

「あのバカ！　どうすんだよ」

シンが祠の中を覗く。

「大丈夫だろ。あいつ案外、臆病だから、怖くなってすぐに戻って来るよ」

「うわああああああああああああああああ」

不意に何かが祠の中から飛び出してきた。

振り向くと、鈴木が花壇に腰をぶつけて、のた打ち回っている。

「は？」

「え？ ど、どうしたんだ鈴木！」

「祠の奥に透明な膜が有って、さ、触ったら弾き飛ばされた」

鈴木は、痛みで涙を流しながら、絶え絶えにそう答えた。

刈谷 7

「どうなってんだよ・・・」

道端に落ちていた少し中身の残ったペットボトルを手に取る。

「皆、鳥居の前に立つなよ」

シンと金山が鳥居の前の道を開けた。

祠の奥を目掛けて思いっきりペットボトルを投げ、自分も横に避ける。

次の瞬間、鈴木と同じように目の前をペットボトルが勢い良く横切って行った。冗談を言っている場合ではないが、さながらペットボトルロケットである。

「元から鳥居の中には、入れないようにしてたのか」

どんなカラクリが有るのか知らないが、祠の奥に行くと、吹き飛ばされてしまうらしい。

無駄足を踏まされた上に、怪我人が出してしまった事に腹が立つ。

「マジかよ。ここまで来たのに」

シンがカイが使っていた金属バットを杖の代わりにして地面に膝をついた。

「鈴木は？ 大丈夫か？」

「一応、歩ける」

鈴木が痛みに顔をしかめながら、背中を押さえて、立ち上がる。

服の背中部分に血が滲んでいる。余程、強く打ち付けないと、こうは、ならないだろう。

「そうか。急いで、トラックに戻って、ホテルに帰ろう」

鳥居に名残惜しさが無い訳ではないが、竹田が言っていた通り、この辺りに居続けるのは、危険だ。

鈴木に肩を貸してトラックまで歩く。鈴木は、しばらくは、まともにも動けないだろう。

「おい。シン！ 助手席側のドア開けてくれ！」

「おう」

シンにドアを開けて貰い、トラックの助手席に鈴木を座らせる。
揺れの激しい荷台に居て、怪我に響いては、まずい。助手席の方が揺れは、まだましなはずだ。

「キャアア！」

「うわあああ！」

急に、荷台から悲鳴が聞こえた。

「今度は、どうしたよ！」

「刈谷！ 良いから車出せ！」

シンが怒鳴り声を上げる。語気に押され、素直に車を出す。

「ああ。もうやだ。また何か起こるのかよ」

ネガティブな事は、余り言いたくないが、もう限界だ。カイがいなくなり、鈴木は怪我をし、折角、苦勞して運転して来た鳥居には、入れなかった。状況は一向に好転しないのに、良くない事だけがずっと続いている。

「か、刈谷！ 後ろ！」

鈴木が窓から顔を出し、後ろを見ている。

「ああ？」

バックミラーに目を移す。

何かの影が道の遠くの方から、近づいて来る。何か叫んでいるが、距離が離れ過ぎて、何を言っているのか解らない。

少しずつ、車を加速させている間にも、影が段々と大きくなっていく。何かが物凄い勢いで近付いて来ているのだ。

「うわあああ！ 何じゃあれええ！」

それは、巨大な全裸の女性だった。

「ニゲナイデ！ ニゲナイデ！」

無茶を言うな。あの図体追い掛けて来たら、誰でも逃げる。蜥蜴を思わせる走り方が余計に気味が悪い。

「もっとスピード出して！」

間中が荷台の側から、壁を叩いて来た。アクセルを完全に踏み込

む。

間違えて、通れない道に入り込んでしまったら、生きては、帰れないだろう。来るまでの記憶を必死で辿る。

だが、体の大きい分、巨人は、迫って来る速度も速い。このまま走り続け、追いつかれるのも時間の問題だろう。

鈴木が車のエンジン音に掻き消されないように大声で話し掛けて来る。

「なあ！ あれ、どう考えても、あの卵の中身だよな！」

「知るか！」

道が直線に入った所で出来るだけ速度を上げ、角を曲がり、巨人の視界から隠れた場所に車を止める。

「刈谷、何やってんだ！」 「このままじゃ逃げ切れない！ バラバラに隠れながら逃げよう！ 鈴木は、俺が背負う！」

全員が四方八方へ別れて、ビルの隙間へ逃げ出す。自分も鈴木を背負い、走り出す。

角を出た所で、急に周りに陰が落ちて、暗くなった。

「ニゲナイデ！」

「うわああああ！」

上を見上げると、巨人と目が合う。

もたもたしている内に追いつかれたしまった。恐怖で足がすくむ。ゾンビ達と同じ感情の感じられない笑顔を浮かべ、巨人がこちらに手を伸ばして来る。

「くそが！ 鈴木、悪い！」

鈴木を守るように両手を広げ、巨人の前に立ちはだかる。

巨人の手が、こちらを掴める位置にまで伸びて来る。ほんの数秒のはずの動きが一分にも五分にも感じられる。

「もう駄目だ・・・」

死の覚悟を決めたその瞬間、不意に、巨人の動きが止まる。

その首から噴水のように鮮血が飛び散る。巨人は俯せになって、その場に倒れた。

深淵

暗くて、周りの様子が良く解らない。

かなり長い間、寝ていたような感覚だ。

段々と暗闇に目が慣れていく。

ここは、何処だろう。俺は、死んでしまったのだろうか。

だが、見るからに、ここは、どこかのビルの一室のように思える。

いや、死後の世界は、案外こういう所なのかもしれない。

背中が何かに触れている。手で触って、確かめる。

どうやら円柱のような物にもたれかかっていたらしい。

「まさか」

触れている物の全体を見るために、座ったままの姿勢で手と足を動かし、後ろに下がる。

間違いない。鳥居だ。

額束の色は、青。

奥に何が有るか解らないのに、たった一人で祠に入っていくのは、危険だ。なのに、何かに引き付けられるように、鳥居の奥の祠へ足が動く。

薄暗い祠の中を進んで行くと、目の前に液体のように揺らめく膜が現れた。

恐る恐る指を伸ばして、触れる。

触れた所から膜に波紋が広がって行く。

「うお！」

急に体が膜の内側へ吸い込まれた。体を投げ出され、地面に叩きつけられる。

「何だ、これ。石畳？」

目の前に石畳の道が続いている。奥の方で二手に別れていて、道の外は、暗闇に包まれている。

やってみる気にはならないが、道から逸れて、この暗闇に足を踏

み入れたらどうなるのだろうか。

一旦、外に出て、冷静になった方が良い。そう思って、来た道を戻る。

だが、膜に触れると、それは、鉄のような硬さになっていて、外に出られない。

「一度、入ったら、外には、出られないのか」
道を進むしか選択肢が無くなってしまった。

騒ぎ立てるのも、馬鹿らしいので、大人しく歩き出す。

一步、進む毎に石畳が小気味の良いリズムでカスタネットのような音を立てる。昔、遊びに行った神社を思い出す。

「うお！ 何だ？」

不意に、後ろから青白い光が弾丸の如き速度で飛んで行った。あの運転手の死体から出て行った光と同じ物だ。

光は、奥の分かれ道を左に進むと、姿を消す。

追い掛けて、分かれ道に立つ。光を追い掛けたい気もするが、右の道は、どうなっているのかも気になる。

右に行った後で、左に行ったとしても、問題無いだろう。

右の道をしばらく歩くと、今度は、前方に螺旋階段が見えて来る。和風の石畳に螺旋階段。何ともちぐはぐな組み合わせでは、ないだろうか。ゆっくりと怪談を下りていく。何だか、何かに飲み込まれていくような気分である。

邂逅（前書き）

ちよつと暴露すると、異界トーキョーは、三部作です。

邂逅

階段の終わりが見えて来た。ずっとバットを持って生活していたので、手に何も武器になる物が無い状況には、何となく不安と違和感がある。

ジャンプして階段の最後の何段かを飛び越える。着地と同時に大きな音がその異様な雰囲気の中に響いた。

「痛！」

足に急に痛みを感じ、膝を押さえて、しゃがみ込む。無限にも思える長さの階段を降りて来たせいで、足が筋肉痛になってしまったらしい。

顔を上げて、前方を見る。

細い道だった空間がそこだけ急に開けて、広場のようにになっている。その中央にこれまた不釣り合いな社長イスに座った灰色のスーツを着た青年がいた。

座っていても解る程に身長が高く、鼻筋が通っているので、西洋人のようにも見える。日本人でも縄文系の一部は、たまにこういう顔付きになるが、その典型例だ。

「驚いたな。人が来るなんて」

青年は、目を丸くして椅子から立ち上がる。

何となく、芝居掛かったようなわざとらしい話し方が鼻につく。

人の事は、言えた立場では、ないが、こんな所に一人で居るということは、ただ者では、ないのだろう。警戒して、拳を構える。

「あんた、一体何者だ」

緊張して、少年漫画の主人公のような喋り方になってしまう。

「いや、そうか。彼が連れて来たのかな」

青年は、独り言を言っているだけで、会話を噛み合わせるつもりは無いらしい。

「質問に答えろよ！」

怒鳴り声に驚いて、また青年がこちらを見た。

「いや、すまない。久しぶりに人間と会ったから、緊張してしまった。僕は、イザナギノミコト。君は？」

ますます意味不明だ。目の前に居るこの青年が神道に於いて天地創造の神である伊弉諾だと言うのか。理解の範疇を越えた回答に、思わず自分が質問に答えるのを忘れてしまう。

「鳥居の額束に伊弉諾と刻まれてる。お前が今回の異変の原因なのか？お前を倒せば、俺達は、東京から出られるのか？」

困った顔をして、青年が首を傾げる。

「おかしいと思うかもしれないけど、僕には、良く解らないんだ。僕は、彼女にここに閉じ込められていて、たまに彼からたまに外の話を聞くだけだからね」

そのまま信用するのもどうかと思うが、その青年が嘘をついているようにも思えない。

「彼って？」

「彼は、彼だよ。君を連れて来た彼だ。名前なんか聞いたことないな」

俺を連れて来た、ということは、徘徊者の事なのだろうか。

いや、そもそも徘徊者に襲われて、俺は、どうなったのだろう。何故、殺されずに、こんな所まで連れて来られたのだ。

「僕が誰か人間をここに連れて来てくれるよう彼に頼んだんだ」

こちらの考えを読み取ったかのように伊弉諾を名乗る青年が喋り出す。

「じゃあ、徘徊者と俺の因縁でアンタが俺を連れて来るように命令した事なのか」

キョトンとした顔で伊弉諾がこちらを見つめる。

「君と彼の間の因縁？いや、それは、初めて聞いた話だな。僕は、誰でも良いから、人を連れて来るよう頼んだんだ」

少し謎が解けたと思うと、また疑問が生まれる。

神様を名乗るにしては、無知で世俗的過ぎるこの青年は、一体何

なのだ。

この青年がどこまで知っているのか解らないが、出来る限り、情報を引き出したい。

しつこいと思われるかもしれないが、気になっている事を一つ一つ聞いていくしかないだろう。

「ここは、何なんだ？」

質問が抽象的過ぎるかとも思うが、それが今一番知りたい事の一つだ。

青年は、言葉を探して、少し考え込んでから、答えた。

「死者の蘇る場所って言うのかな？あの鬼火みたいな光を見たことがあるだろ？ああいう意思の無い物が此処に入ると、上の階の左の道に入って、過去の姿になって、外に出られるんだ」

「蘇るって事？」

「生物には、戻れないよ。お化けとして復活するだけ」

鬼火と言うのは、あの運転手の死体から出て来た青白い光のことを言っているのだろう。死体が復活しない事を喜んでいたが、ちゃんと復活していた訳だ。

「次だ。あの鳥居の前に有った卵は、何だ？」

青年が照れて頭を掻く。

「・・・娘なんだ。っていつでも君には良くわかんないだろうけど」また意味不明な回答が返って来た。どうして目の前にいるこの男の娘があんなに巨大な卵なんだ。神様だからなのか。

これに関して、これ以上聞いても、情報は、増えないだろう。

「じゃあ、最後に二つだけ聞かせてくれ。まず、死体達に知能は、有るのか？」

しつこ過ぎて、嫌がられるかと思ったが、青年は嫌がる所か会話を楽しんでいるようにずっと笑みを浮かべている。

「猿程度にはね」

「じゃあ何故、チームワークでこちらを襲って来ない？」

「奴らは、一度出会うと、お互い離れられないのさ。孤独が怖いカ

ら」

「意思が無いのに、孤独が怖い？」

「違うよ。孤独を恐れる余り、自分の意思が無くなってしまっただけ。だから、ただ大群で行動するだけで、知能を使って、作戦を立てたりは、出来ない」

何だか哲学や倫理の講義を受けている気分だ。

「最後だ。俺は、此処から出られるのか？」

青年がこちらへゆっくり近付いて来る。お互いに手が届く距離に入ると、握り拳を作って、こちらの胸の位置にそっと置いた。

「君に意思が有るなら。君に意思が有るなら、過去を遡らずに、此処から出られる。今のは、ちょっとしたおまじないだ。それとね、此処から出られたら、此処に行ってみてくれ。前に此処に来た人の伝言だ」

青年は、満足そうに微笑んだかと、思うと、俺の肩を掴み、くると後ろを向かせて、背中を軽く押した。

憤怒

「何すんだよ」

青年にそう言おうとして、振り向こうとすると、急に周りの景色が高速で後ろに流れ始める。

気付くと、自分は、先程の分かれ道に立っていた。

「おい！」

自分の声だけがむなしく反響する。どうやら青年に魔法か何かで瞬間移動させられたらしい。

「クソッ！」

もう奇想天外な超能力やら、超自然現象には、慣れっこだ。瞬間移動ぐらいで、今さら、騒ぐ事もない。

正直、最後と言っておきながら、まだ聞きたい事が有ったのだが、此処まで来て、また会いに戻るのもばつが悪い気がする。

仕方なく左の道を歩き出す。特に右側の道と違うところはない。しばらく進むと、先程の階段とは、逆回転の螺旋階段が現れる。

正直、もう階段は、うんざりだ。落胆の深い溜息をついて、階段を下りる。

青年は、意思を持っていれば、此処から無事に出る事が出来ると言っていた。それは、逆に言うとは、何か意思を持たずに進むと、無事では済まないという事では、ないだろうか。

意思。自分のしたい事とは、何だろう。既に自分の人格の不完全さを親や周囲せいに出来る年齢でもないが、長らく自分がどうしたのかという事について考えない環境に居た気がする。

自分は、今、何がしたいのだろう。もう一度、頭の中で自問自答を繰り返す。

普通なら、異変が起こる前の幸せに戻りたいと思うのかもしれないが、今、頭に浮かんで来るのは、何故か異変の後の皆との数日間だった。

また皆に会いたい。

本当に少年漫画の主人公がクライマックスで言いそうな台詞だ。馬鹿らしくて、何だか顔がにやけてしまう。

考え事をしている間に階段を下り切ってしまった。

今度は、目の前には、広場ではなく、一本道が続いている。

「うわ！」

不意に、道の脇の暗闇から、女が顔を出した。普通の人間かどうかは、解らないが、女の表情は、死体や霊達のそれとは、程遠く、普通の人間の物だ。

いや、それより、この女の顔を俺は、知っている。

「また生きている人間が居るの？彼が連れ込んだんでしょ？止めてって言ったのに！」

女性は、こちらを見るや否やヒステリックに声を荒げ騒ぎ出す。

「お、お前！」

「何よ！二度と出られないようにしてやる！」

女性がこちらを真っ直ぐに向いて、睨みつける。
間違いない。

「金山さん、じゃないのか！」

武器

少し長めの髪を真っ直ぐに降ろした髪型、膨らんだ頬。

目の前に居るのは、間違いなく金山本人である。

何故、此処に居るのだろうか。

しかも、明らかに様子がおかしい。こちらに対する言葉使いもそうだが、雪のように白いワンピースを着ていて、服装まで俺の知っているものとは、違う。

服は、何処かで手に入れたのだとして、どうして、まるで面識が無い人間と話すような態度を取っているのだろうか。

面識どころか今の金山の口調からは、敵意すら感じる。

いや、洋服だってあの極限状態の生活の中で、手に入れに行くような余裕は、無かったはずだ。

「金山さん、俺だよ。カイだ」

相手の感情を害さないように、出来るだけ明るい声で呼び掛ける。「私を知ってるの？」

金山は、それを聞くと、一瞬、戸惑った顔をして、見たことのあるいつもの表情になる。

「いや、金山さんでしょ。竹田の友達の。何でこんなとこいんの？」

「何処に居ようと私の勝手でしょ！」

金山は、また感情を高ぶらせ、大声で怒鳴る。

こちらの事を本当に忘れてしまっているらしい。

金山は、異変が起こる前の三日間の記憶が無いと話していた。あの記憶障害が酷くなってしまったのだろうか。

無理に連れて行く事は出来ないが、置いて行く訳にもいかない。

「落ち着いてって。皆、心配してるだろうし、とりあえずは、戻ろう」

手を掴もうとすると、金山に振り払われる。

「触らないでよ！」

金山は、手で顔を覆い隠し、叫ぶと、その場にうずくまってしまう。

困り果てて、立ち尽くす。

不意に、また耳の奥からあのラジオのノイズのような音がし始める。

「徘徊者？」

恐怖が蘇り、体が震える。

振り向いて、背後を見る。音は、収まる気配が無いのに、何か近付いて来る気配も無い。

警戒して、周囲を確認いると、急に雑音が酷くなった。

ふと振り向くと、金山が立ち上がり、こちらの顔に鼻が触れるか触れないかの位置にまで近付いている。

ぎよっとして、その顔を見る。

「うわあ！」

金山の顔が幽霊と同じように白くなり、目が血走っている。

やはり、金山ではなく、化け物だったのか。

心を許す人間に化けて、こちらを狙っていたということなのだろうか。いや、あの金山の態度はそういうものとは、また違った。

目の前にいるこの金山は、一体何者なのだろう。

頭がこんがりそうになる。

気付くと、自分の胸の辺りを中心に何か黒い液状の物が渦巻いている。既に金山の姿をしたこの霊に何かされてしまったのだろうか。金属音がしたかと思うと、そこから何か棒のような物が突き出す。

「え、これ。俺に刺さってんのかよ」

恐る恐る引き抜くと、黒い鞘に収まった刀が姿を現した。

「これ使えってか……」

暗黒

ふと伊弉諾がおまじないと言って、胸に拳を当てて来た事を思い出す。おまじないとは、この刀の事だったのか。

これを使って戦えということだろうか。

伊弉諾のくれた刀だ。幽霊でも斬れるのかもしれない。

だが、目の前にいるこの幽霊は、金山かもしれないのだ。例え斬れたとして、斬り伏せてしまっただけだろうか。

金山が首を閉めようと両手をこちらに向けて来る。

徘徊者の時、何故助かったのかは、未だに解らないが、今度は、本当に呪い殺されてしまうかもしれない。

戦う以外の選択肢は、無いようだ。

刀を鞘から慎重に抜く。刀身に当たった光がゆらりと揺らめく。その鋭利で美しい刃に恐怖と見惚れるような陶酔感を同時に覚え、持つ手が震える。

左足を少し下げながら、両手でしっかりと柄を握み、中段に構える。

日本刀で物を斬るのには、訓練がいるという話は、良く聞く。初めて刀を扱う人は、薄すぎる刃を対象に垂直に向けられないのだ。突きをまともに習った事は、無いが、突いた方がまだ、斬るよりは、確実だろう。

相手が段々と距離を詰めて来る。

「そこだあ！」

自分の間合いに入ったタイミングを見計らい、足で地面を蹴り、腕を突き出す。

「ギウアアアア！」

手にぐっと手応えがあった。

首元を刀が貫き、少し手足をばたつかせたかと思うと、金山は、ネジが斬れた発条の玩具のように、動きを止めた。

本当に、とどめを差して、しまったのだろうか。金山さんかもしれないのに。

不安になって、刀を引き戻そうとすると、不意に、金山の首元の傷口から、蛍光灯のような強い光が漏れだす。

光は段々強さを増していく。あっという間に周りの全てが光に包み込まれた。

過去

太陽を肉眼で見てしまったように眩しきで目が効かなくなった。しばらくすると、ようやく真っ白になった視界が少しずつ色を取り戻していく。

だが、目の前に広がっているのは、先程までいた祠の中の景色ではない。

どこか民家の一室だ。

余りにも、平凡な間取りに、一瞬、気絶して、また自分の記憶の中で自分の部屋にいるのかと思ったが、そうではない。初めて見る部屋だ。

ただでさえ気味の悪い祠の中の空間に入っていたのに、また良く解らない別の場所に送られてしまったのか。本当に俺は元の場所に帰れるのだろうか。

事態が把握出来ず、情けなく口が開きっぱなしになる。

部屋のインテリアは、最低限の家具と写真立てと女子高生の間で流行っていたキャラクターの縫いぐるみが一つずつ置いてあるだけで簡素な物だ。

恐らく、若い女性、いや、俺と同年代の少女の部屋なのだろう。不意に、後ろから、絞り出すような泣き声が聞こえて、反射的に振り向く。

少女が、ベットに腰掛けて、泣いている。

金山だ。

「金山さん？」

話し掛けても、反応が無い。

肩に手を置いて、もう一度、相手の名前を呼ぶ。

やはり反応が無い。

こちらの姿が見えていないのか、見えていて無視されているのか。思い切って、金山の頬をひっぱたいてみる。

手に重い銅像を殴ったかのような衝撃が走ったが、金山には、全く動きが無い。

今度は、机の引き出しを開けてみる。

何かが詰まっているかのように、うんともすんとも引き出しは、動かない。

何かの魔法でここに瞬間移動させられたのだとして、ここにずっと居るわけにはいかない。

そう思って、ドアを開けようすると、今度は、ドアノブが動かない。

まるでこの世界が俺の干渉を拒むように、何も動いてくれない。

「くそ！ どうなってんだよ。また呪いか何か」

自暴自棄になって、机に腰掛けようすると、メモ帳のような物が、机から落ちた。

何の気無しに、拾い上げようとして、ハッと気付く。

俺が力を加えても、何も動かないこの世界で、何故、このメモ帳だけは、机から落下したのだろうか。

実際に拾い上げてみると、メモ帳は、手に持って動かす事も出来た。

ベットの上の金山は、泣き続けるだけで、こちらの動作には、気付かない。

他に出来ることも無いので、仕方なく、椅子に腰掛け机の上にメモ帳を広げる。

七月三日

小宮山さんに告白された。

「へ？」

一頁には、かわいらしい丸みのある字でいきなりそう書かれていた。

どうやら、これは、メモ帳ではなく、日記帳だったらしい。金山の物なのだろうか。

新しい日記帳を出したら、その日に偶然、思い人から告白されたのか、はたまた、告白されたのが嬉しくて、日記帳を付け始めたのか。

他人の秘密を垣間見るような、場違いな好奇心に支配されて、また頁をめくる。

七月四日

小宮山さんに私の気持ちを伝えた。大喜びで抱きしめてくれた。

七月五日

携帯にメールが来た。映画に誘われた。急がしくって、いけなかったけど、小宮山さんは、笑って許してくれた。

どうでもいいことなのだが、段々と文字量が増えていく。幸せだからだろうか。

恋愛経験者で有れば、微笑ましくも思えるのかもしれない。だが、生まれてこの方、女性と付き合った事が無い俺には、読んでいても羨ましいやら妬ましいやら気恥ずかしいやらで、良く解らなくなつて来る。

七月七日

今度は、ちゃんと予定を合わせて、映画を見に行った。小宮山さんがお金は、殆ど出してくれた。やっぱり優しい。また一緒に何処かに行きたい。

そんなこんなが続いて、二人は、段々と絆だか愛情だかを深めて行きましたと言った所か。

飽きてきたので、頁をパラパラとめくり、出来るだけ速く、読み飛ばしていく。

七月十八日

小宮山さんと初めて夜を一緒に過ごした。

説明されなくても、大体解る。そういう事だ。正直、処女であるという押し付けがましいイメージを金山に抱いていたのは、否定できない。だが、それは、予想であって願望ではない。別に女性が処女で有ることに大して意味が有るのも思っていないのも事実だ。

下世話な話だが、細かい描写が有れば、もっとじっくり読んだかもしれない。

結末が知りたくなって、再び何頁か、一気にめくろうとした時、ちらりと見えた頁を見て、有ることに気付き、十九日まで、頁を戻す。

七月十九日

小宮山さんは、優しい。絶対に私以外を愛したりしないと言ってくれた。悲しい思いをしないように、一生守ってくれると約束してくれた。ずっと傍にいてくれると言ってくれた。小宮山さんが大好き。

これまたどうでもいいことなのだが、この頁から、少しずつ、文字量が増している。そして、それ以上に不思議なのは、出来事が一つも記されていない事だ。

これもまた恋愛経験者でないと解らない事で、恋愛が良く解らぬ俺だからこそそう思ってしまうのかもしれないが、散文的なこの文

字の羅列に何か病的な物を感じる。

八月二十日

小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん
小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん
小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん小宮山さん
小宮山さん

「あ・・・・・・・・れ？」

一見、普通の文章が書いてある頁に見えたので、危うく読み飛ばす所だった。

文字量が増えているが、それどころじゃない。寒気がして、椅子から飛び上がりたい気持ちになる。

というか、今、気付いたのだが、これは、このまま続くと、金山が記憶を無くした三日間の事も書いてあるんじゃないだろうか。

脇に立ててあるカレンダーをみる。確か異変が起こったのは、二十四日だ。

七月二十一日

花ちゃん。花ちゃん。遊びましょ。花ちゃん。

七月二十二日

こんな事になってしまった。もうおしまい。

支離滅裂で意味が解らない。情報と言えるような情報も無い。

七月二十三日

真っ黒に頁がうめつくされている。

ノイズが響き始めた。

ベットで泣いていたはずの金山がいない。
背後にいるのだ。

緊縛

金縛り。という奴だ。

体が動かない。

首も回らないから、周囲は、見えていないはずなのに、後ろに何か恐ろしい物が居るのを感じる。

青白い手が後ろから伸びてきて、首を掴む。

首を絞められている訳でもないのに、そこから自分の生気が奪われていくのが解る。

ズンという音と共に目の前に青白い顔の女の首が上から机の上に降って来る。

女は、こちらをじっと睨みつけると、急に口を開き叫び始める。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

頭に割れるような痛みが走り、今度は、視界が黒にフェードアウトしていく。

鮮血

重力が増したように、体が地面に押し付けられ、直後、今度は、奇妙な浮遊感に襲われる。遊園地のアトラクションに乗って振り回されるような気分だ。

目を開けると、体が汗でびっしょりに濡れていた。手に持っていたはずの刀と刺したはずの金山が消え、目の前には、石畳の道が続いている。金山を倒したから、刀も消えてしまったのだろうか。

先程の奇妙な部屋は、何だったのだろうか。金山が俺に見せた幻覚のような物なのだろうか。

金山に触られていた首から火傷のような痛みが走る。頭が痛み、倦怠感ともまた違う奇妙な、それでいて、恐ろしく不快な感覚に体が悲鳴を上げる。何もかも諦めて、ここで倒れてしまっても良いような気すらする。

小さい頃、四十度の熱を出し、吐きそうになりながら、横になっていた記憶が蘇って来た。その時は、確か祖母が看病してくれたのだ。

進まなければ。ただ漠然とそれだけを思い、歩き始める。

道に巨大な鳥居が現れる。奥の祠のには、入口と同じように液体のような膜が張られている。これは、出口なのだろうか。柱にもたれ掛かり、じっと祠の奥を見つめる。

向こう側から、微かに光と誰かが騒いでいるようなが声が漏れてきている。ひょっとしたら外に人間がいるのかもしれない。

膜を通り抜け、祠を出る。見覚えの有る景色が広がる。

「ここって！」

後ろを振り返ると、赤い額束の鳥居がそびえ立ち、隣にあの懐かしいカラオケボックスが有った。しかも、建物前の公園に有った巨大な卵が割れている。

啞然として、立っていると、急に横の道をトラックが物凄い速度

で走り抜けて行く。

やはり人間がいたのか！ 嬉しくなって追い掛けようとした次の瞬間、今度は、有り得ない程の巨体の女がトラックを追い掛け、目の前を横切って行った。

何だあれ。そう思っただけで、また胸の辺りから、刀の柄が現れる。何度見ても、自分が貫かれているようで気味が悪い光景だ。今度は、あれと戦えというのか。

伊弉諾に背中を押された時と同じように周囲の景色が後ろに流れ始める。

気付くと、ビルの裏で、化け物の脇腹に潜り込んでいた。化け物は二人の男に手を伸ばして近付いていく。音を立てないように、刀をゆっくりと鞘から抜き、女の首元まで忍び寄る。

女は、目の前の二人に夢中でこちらに気付かない。

首で一際大きく脈打っている血管に刀の刃を沿える。難しく考えるな。包丁と同じように引いて切れれば良いのだ。

プスと音がして、女の体から血が噴き出した。

頭からもろに血を浴びた。

何かが途切れたかのように何とか保っていた意識が遠退いていく。

刈谷 8

血まみれで倒れている化け物の横に血まみれの人間が倒れている。化け物が動かないのを確認しながら、近付いていく。

怪物の懷で倒れていたのは、カイだった。ホテルで徘徊者とかいう化け物に襲われて死んだはずのカイが何故カラオケボックスの近くのこの道で倒れているのだろう。

脇に日本刀が落ちていている。カイが化け物を倒し、俺達を助けたのだろうか。

近くに隠れていたシンがのそのそと建物の陰から姿を現す。カイの姿を見ると、大声で叫びながら走って来る。

「カイ！ カイだ！」

鈴木が背中を抑えながら、四つん這いになって、カイの隣に寄って来る。

「マジかよ！ 何でこんな所に！ この化け物、カイがやつつけたのか？」

首に手を当て、脈を確かめる。首に手の形の腫れがうつすらと出来ているのに気付く。死んでこそいないが、やはり、俺達と一緒に居ない間に、カイに何か有ったのだ。

「息は有るけど、顔色が悪いな。二人とも、大声出すな。ゾンビが寄って来るぞ。早くトラップに戻って、帰ろう。このデカブツもゾンビみたいに復活するのかもしれないし」

「冷静だな。刈谷。どうしたの？ カイが帰って来たんだぞ。驚かないのか？」

鈴木が顔を覗き込んで来る。

「いや、驚いてるんだよ。驚き過ぎて、何も言えないだけで」

実感が湧かなかった。カイが帰って来なかった方が良かった訳ではないが、何故帰ってこれたのか、何故ここにいるのだろうか、と次から次に疑問が浮かんで来て、頭が整理出来ないのだ。

シンがトラックまでカイを背負って行き、荷台に乗せる。可哀相ではあるが、とりあえずは、生きているカイよりも、大怪我を負っている鈴木の状態の方が今は、重大だ。カイには、荷台で揺られていて貰うしかない。

車を走らせていると、助手席の鈴木が思い出したように目を潤ませ、鼻を吸る。

「なに泣いてんだよ。気持ち悪い」

笑って、鈴木をからかったが、そう言いつつも、鈴木の涙を見ている内に、カイが無事に戻って来た事実を自分も実感して、涙が出るようになる。

「いや。だってさあ」

鈴木は、もうすぐにでも大声で号泣し始めるのではないかと思われるような震えた声でそう言った。

車は走る。秘密基地への帰路を。

「女子三人組は先に大分遠くに逃げちゃったみたいだな。まあ、どうせホテルで落ち合えるだろ。道の途中に居たら拾って行こう」

鈴木は、黙って頷いた。

結局、道には、金山達女子はいなかった。車から降りて、探すべきなのかもしれないが、病人と怪我人が一人づついるこの状況で、もう一度、奴に襲われたら、無事に帰ってこれる保証は無い。出来るだけ早くここを離れなければ。

抱擁

夢に伊弉諾が出て来た。満足げな笑顔で、近付いて来る。

「やっとな彼の約束を果たせた。約束は、これで終わりだ。だからもう、さっきみたいな瞬間移動は使えないよ。面白そうだから、やってみただけど、案外面倒臭いんだね。約束って奴は」

相変わらず言っていることがちんぷんかんぷんで文脈の読めない話をしている。

前に会った時に色々質問したが、第一こいつ自身が何者なのか解らないのだ。それを含めて、色々な事を聞こうとした所で、前は、瞬間移動させられてしまった。

ひよっとすると、この男は、わざとこちらに疑問や不安を抱かせて、面白がっているのかもしれない。だとしたら、一々、それに付き合って、神経を擦り減らすのも何だか馬鹿らしい話だ。

「彼って、徘徊者の事？」

「いや、違うけど、君の知り合いだよ」

皮肉の感情を込めて、鼻で笑う。

「どうせ誰だか教える気は、無いんでしょ」

「ああ。その方が面白そうだ」

口で言った通りに、本当に楽しそうに目を輝かせて、伊弉諾が笑う。

その笑いが収まったかと思うと、今度は、伊弉諾は、こちらをじろじろと眺めた。しばらくすると、何かに納得したように頷き、肩に手を置いて来る。

「後でポケットの中を見ておいて。君が出来るだけ長く生きられる方法を書いたメモを入れておいた。僕が書いた物じゃないけどね」

そう言っ、伊弉諾が背後へと通り過ぎようとする。止めて話を聞こうとするが、体が動かない。

そのまま何も出来ずに目が覚めてしまった。夢の中でまで、俺は、

あいつのペースに持ってかれてしまうのか。

ぼんやりとした明かりが部屋を照らしている。部屋には、俺以外に誰もいないようだ。皆が俺が休むために部屋を一つ明けてくれたらしい。

壁に取り付けられた時計を見る。

午前五時。あれからずっと寝ていたのだろうか。祠を出た時より、大分良くなったが、まだ体が重い。大人しく後二時間ぐらい寝てよう。

また上半身をベッドに倒す。

ベッドと体の間に何か有って、寝にくい。目をつぶったまま、手で背中中の辺りを探る。

何かを掴んだのを感じて、ぐいところらに引き寄せた。

「あれ？」

誰かの手がある。俺は、一人で寝ていた訳ではないのだろうか。

目を開けて、横に体を向ける。

竹田が寝息を立て、気持ち良さそうに眠っていた。薄目を開けてこちらを見ると、腰に抱き着いて来る。本人は抱き着いたつもりかもしれないが、勢いが付きすぎである。正直、これでは、体当たりだ。頭が鳩尾に入っている。

「お帰り。カイ」

何だか恥ずかしい気分になって、どうすれば良いのか解らなくなる。

「ただいま」

他にどうしていいのか解らず、竹田の頭に手を置いてじっとしていると、いつの間にかまた眠ってしまっていた。

集結

目が覚めて、気付くと、竹田は、部屋から居なくなっていた。先程、あんなに気まずく思っていたのに、居なくなれると、置いて行かれたように淋しくなるのだから不思議だ。

顔を洗いに、洗面台へ行く。

思えば、数日前、洗面台に立って、異変に気付いたのが全ての始まりだった。

一つ節目を迎えたような気分になったが、それが何の節目なのかは、自分でも良く解らない。

元から切るのが嫌いで、伸ばしていた髪が更に伸びて鼻にまで差し掛かっている。学校にいる頃、髪を伸ばしていると、刈谷に女のようにだと良く茶化されたものだ。

ふと夢の出来事を思いだし、ポケットに手を突っ込む。

直感的にただの夢ではないと思っていたが、メモが本当に入っているのには驚いた。四つ折になった紙を広げる。

テレビ局に行け。

メモには、そうとだけ崩れた文字で走り書きされていた。金山の日記帳程解りやすくもないが、どこかでみた筆跡だ。

どうして、テレビ局に行かなければいけないのか解らないが、それがどんな意味を持っていたとして、今ここで考え込んでも、仕方がない。テレビ局に行ってみれば、解る。きっとそういうことなのだ。

カレー屋で見つけたメモを入れたのと同じポケットにまたそのメモを入れた。適当に押し込んだせいで、メモはポケットの中で折れ

曲がってしまった。

鏡を見ながら、手で髪をすくと、目の周りに濃い隈を見つけた。元から、隈が出来やすい体質らしく、少し寝不足だったり、ストレスが掛かったり、体調が悪くなったりすると、すぐに目の下が青黒くなるのだ。

横にある浴槽を見ると、風呂に入ってしまったみたい欲求が沸き上がったが、とりあえずは、皆に顔を見せた方が良いと思って、止めた。金山がどうなったのか皆に聞いておきたかった。

部屋を出て、隣の部屋に行く。皆と会えるのを喜ぶ気持ちと照れ臭さが交じってしまつて、どんな顔をして、部屋に入れば良いのか迷う。

無表情な顔を作ろうとして、ドアの前で突っ立っていると、ドアが勝手に開いた。

「よ」

床に食べかすを落しながら、クッキーを口にくわえたシンがニヤついた顔を覗かせる。

「おう」

苦笑いして、部屋に入る。

「皆、金山さんは？」　そう言いかけた次の瞬間、自分の目がベッドに腰掛ける金山を捉えた。

「え？　金山さん？」

金山が駆け寄って来て、肩をハグして来る。

「無事で良かった」

分身（前書き）

正直、漢字二文字のタイトルにこだわるつもりはないので、タイトル変えうかと思う。無理に漢字に文字に抑えようとしてるせいでわかりにくくなってる。まあ、何か統一性は持たせたいと思うので、何かいい案あったら教えてください。

分身

金山は、何事も無く、ホテルで皆と過ごしていたのか。

だとしたら、俺が祠の中で見た金山は、偽者だったというのだろうか。

こういう時、どういふ対応をするのが正解なのだろう。皆を混乱させないように黙っておくべきなのだろうか。皆、今現在こうして奇想天外な常識では有り得ない状況に置かれているのだ。俺が見たもう一人の金山の事を話しても、信じてくれないということはないだろう。

だが、金山本人が困惑し、またストレスを抱え込ませてしまえる可能性も有る。

「どうしたカイ。真顔で」

刈谷に言われて、ようやく自分が金山を無表情のままじっと見続けていた事に気付く。金山は、少し怯えて、こちらを見ている。

「カイ君？」

「照れてんだろ」

鈴木がベットの所でこちらに近付いて来て、こちらの顔を指差して笑う。

笑ってはぐらかそうとしたが、変な間が開いたせいで、逆に何か言わないといけない雰囲気になってしまった。

やはり、正直に言ってしまうしかないか。

「金山さん。ずっとホテルで皆といた？」

シンが大きいサイズのペットボトルを抱えて、震える真似をする。

「何だよそれ？ 怖い事言うなよ」

「いや。マジな話なんだ。俺、皆と逸れてる間に、金山さんと会ったんだ。何か様子が違ったけど、確かに金山さんだった。皆、何にも変わったこと無かったのか？」

竹田は首を横に振る

「似た人を見たって事じゃなくて？」

「いや、近くで見たし、話もしたんだ」

金山は、案の定、垂れ目な目の目尻をさら下に垂らして、泣きそうな顔をしている。

「私に何か原因が有るのかな？」

記憶が無いことで、情緒不安定になっている金山にこれを知らせるのは良くなかったかもしれない。

風呂場の方で何かが落ちる音がした。間中がバスタオルを首に巻いて、髪を拭きながら、出て来る。

こちらを見て、一瞬、目を見開いて驚くような素振りを見せ、また無表情になる。

「戻って来たんだ」

淡々とした態度でベットに座り、金山と俺の顔を交互に見る。

「何で泣いてんの。泣かした？」

「いや、何もしてないというか何かしたというか」

どうにも収拾が着かなくなってしまった。

「ていうかさ、俺らも突然、それだけ聞かされても、良く解らねえよ。お前がどうしてたかも含めて、流れで説明してくれ」

もつともな意見だ。俺は、言われた通り、自分の身に起きた事を説明すべきなのだろう。

だが、問題は、俺自身も何が起きたか把握しきれていない事だ。具体的な事象だけを出来るだけ細かくしていくしかない。

「ああ。上手く説明出来ないけど、そうするよ」

シンとカイ（前書き）

もう漢字二字に納めんのあほくさくなった。

シンとカイ

一連の体験を皆に話した。最後まで話しても、皆は、解ったたような解ってないような微妙な顔をしていたので、ちゃんと伝わったか解らないが、とりあえずは、これが精一杯だ。

「大体、解った？」

「多分」

黙って、聞いていた刈谷がそう言って、頷くと、他の皆も後に遅れて同じ様に頷いた。

「そう。後、これは、話に出て来た伊弉諾を名乗るお兄さんがくれたメモなんだけど」

本当は夢で渡された物だが、それを説明するのは省いた。夢に出て来た人に物を貰ったなんて話は、何となく子供じみていて恥ずかしい。

鈴木が寄って来て、手を差し出して来たので、それに応じて、メモを渡してやる。

鈴木の周りに皆が集まって、メモを覗き込む。

「テレビ局へ行け？」

間中がメモの内容を棒読みした。

「何でテレビ局？」

「ていうか何処のだよ。東京都内のテレビ局だけでも、何局か有るだろ」

シンと間中が口々に質問をぶつけて来る。

疑問がいったい有るのは解るが、聞きたいのはこっちだ。

「確実とは言えないけど、敢えて一つ挙げるとしたら、今、頑張つてニュースの放送を続けてるこの局じゃない？」

付きっぱなしのテレビの画面を見る。既に異変発生から数日が経過しているのに、画面では、数人のアナウンサーが交代でニュースを放送し続けている。他の局では、スタッフが逃げ出したか、全滅

したかで、完全に放送が止まっている。

「まあ、行ってみるにしても、すぐには無理だな。鈴木が怪我してるし、お前だってまだ顔色悪いぞ。しばらく休んで、籠城戦してか
らでも良いだろ」

金山がお菓子やらジュースを腕に抱えて、持って来て、俺が座っている椅子の前の机の上に並べた。

「今日は、これ食べて大人しくしてて」

こうして普通に傍で話しているのを見ると、祠の中で見た金山は俺の幻覚だった気すらしてくるが、それでも、首の奇妙な手の跡とそこから響く痛みが、確かに、それは、居たのだと絶えず伝えて来た。

その後、しばらく、皆でテレビに見入っていたが、その内に、風呂に入るだの、知り合いに連絡するだの用事を見つけて、皆、部屋から出て行った。

「俺、面倒臭いから、家族に連絡したりとかしてないけど、皆の家族は無事なのかね」

部屋に二人だけになって、シンとポテトチップスの袋を開けて居る時、不意に思い立ってシンに聞いてみた。

動物園のパンダのような巨体を横たえたシンが、パンダのように体を転がして、こちらを向く。

「どうなんだろうね。俺も母親としか連絡ついてないし。ていうか、お前も携帯くらい持って来いよ。不便だろ」

反論出来ずに笑う。

「まあ、今、考えたらそうなんだけどさ。焦ってたからさ。持って来なかった」

あの時は、妙に胸が高鳴り、浮足立っていて、そんな事考える気分ではなかったのだ。早く家を出たくて、うずうずしていた。

「後、あのメモについて思ったんだけどさ。テレビ局に行くのは、俺らじゃなくても良いんじゃない？」

シンが携帯を見ながら言う。

「え？　どゆこと？」

「今、東京に居る生き残りでも、俺達よりテレビ局の近くに潜伏してる奴らが、居るはずだろ。俺達が今からこのテレビ局に行こうとしたら、車に乗ってっても、主だった道は、車で塞がれてて中々、進めない。遠回りばかりかしてたら、ガソリンが切れるかもしれないし。歩いていくにしたって、時間も掛かるだろ。他の人にテレビ局の様子を見に行って貰った方が早いよ」

「可能な事なら、確かに、それに越したことはない。だが、色々な意味で賛成は出来ない提案だ。」

「まず、どうやってそいつらにこの話知らせんだよ」

シンが体の向きを変え、携帯を見せて来る。

「いや、それこそ掲示板に書き込んでさ」

苦笑いして、首を傾げる。

皆には伝えていなかったが、伊弉諾は夢の中でメモには、俺が命を長らせる方法が書いてあると言っていた。果たして、俺以外の人間が行って、意味が有るのだろうか。

「あんまり現実的な話じゃないな。鳥居みたいに何人も人間が発見してるわけでもなけりゃ、画像も無いんだ。神様に渡されたとは言え、このメモも他人から見れば、ただのメモだ。それを掲げて、訴えかけたって信じる奴が居るか？」

「・・・・・・そうだな。やっぱ無理か」

シンが画面を見つめてうなだれる。

シンだって怪我をしている鈴木や皆の事を心配して言ったのだろう。

「そんな顔すんな。きっとどうにかなるって」

落ち込んでいる姿を見るのが、忍びなくて、また何の救いにもならないごまかし方をしてしまう。

「どうにかねえ」

シンも苦笑いして、またポテトチップスをつまんだ。

カイと竹田（前書き）

なんか「よつばと」みたいになってきた

カイと竹田

翌日には、体調を持ち直し、皆と外に出ることが出来た。勿論、鈴木は相変わらず体を痛めていて、激しい動きは出来ないの、余り遠くへは、行けない。だが、何も出来る事が無いからと言って、部屋に煮詰まっていると、気が滅入りそうだった。

そして、外に出るついでに、俺が本が欲しいと言ったので、近くの本屋に入ってみる事になったのだ。

店の前に居るゾンビの頭をバットで薙ぎ、皆が着いて来ているか確認する。

だっ広い店内は、静まり返っていて、普通に話しても、声が良く響き、そこらじゅうに引きずられたような血痕が残っている。ここも最初に行ったスーパードと同じ様に異変が始まってすぐの頃に死体達の侵入を許してしまったのだろう。

「ホラーゲームやってて、ゾンビも見慣れちゃうと怖くないなあとか思ってたけど、現実でもそうだな」

「最初の頃の混乱しっぷりが馬鹿みたいだな」

そう言いながら、刈谷が棒で道に転がった死体を横に掃く。押し込められた死体は、雑巾か布切れのように体を丸めて、されるがままになっている。

「目当ての本は決まってるだろうな。怪我人が居るから、長居は出来んぞ」

問い詰めるような強い口調で刈谷が聞いて来る。

覚えて来た幾つかの本のタイトルを頭の中で唱える。その内の四冊は、好きな作家の本、一冊は和訳された海外の本。何処の国の本かは、忘れた。後は、漫画が沢山だ。

「ていうか、俺、一人で行ってくるよ。そろそろ行くと、逆に時間掛かりそう」

皆に気を遣ったつもりでそう言ったら、刈谷にあからさまに機嫌

の悪そうな顔をされた。

「勘弁してくれよ。病み上がりのくせに。また勝手に一人で大冒険して来る気か？」

物事を率直に言うのは、刈谷の魅力でもあるのだが、そこまで言われると、こちらにも不機嫌になってしまう。

「まあまあ、怒らないでよ。カイには、アタシついて行くよ。鈴木君は、怪我してるから、誰かと一緒に居なきゃだけど、皆も自由に自分の好きな本探してれば、良いじゃん」

心配してくれるのが嬉しいが、俺は、引率を付けて貰うような歳ではない。大冒険だっけしたくてした訳ではない。

一人で外出をしたいのに、親が許してくれなかった時のような悔しさを覚える。

竹田が腕時計を見る。「三十分ぐらいで良い？」 シンも自分の携帯で時間を確かめる。

「すると、ちようどお昼ぐらいだな。何か昼飯持って来れば、良かった」

「ピクニックみたいで楽しそうだな」

シンの肩に体をもたれかけながら、鈴木が笑った。

納得した訳でもないのに、話が勝手に進んでいく。

無視して、エスカレーターを昇って行こうとしたら、しっかり竹田が後ろに着いて来ていた。

カイと竹田2

小説は、好きである。物凄い量の本を読んだとは、言えないまでも、それは言える。

著者を見て、本を選ぶことは有るが、基本的に、ジャンル、著者にこだわらず色々な本を読む。

ライトノベルと呼ばれている物に特に偏見は無いが、読んだことは無い。今まで、読む機会が無かったのだ。

「カイ来てるよ!」

二つ向こうの棚の陰から、店員用の緑のエプロンを血で真っ赤にした死体が現れる。竹田は、怯えて、腰を抜かしながらも、木刀を構える。

「カイ、この前、話してた刀使えないの?」

どういう法則で刀が出て来るのか解らないので、何とも言いようがない。

「やってみよっか?」

そう言って、余り期待せずに、胸に触れると、途端に、胸から刀が飛び出した。竹田が木刀で死体を押し返すのに、必死になりながら、こっちを見て、目を丸くする。

「え! 出たじゃん」

驚いた。何時でも出せるなら、これ程、威力のある武器はないだろう。

「そうみたい」

笑って、ゆっくりと鞘から刀身を抜く。

今までは、鞘ごと引き抜いていたが、それでは、一々、手間取る。刀だけ抜いてみたら、どうなるのだろうか。

刀が抜かれると、鞘だけが胸の黒い渦の中に入って行った。感覚は無いはずだが、吐きそうな気がして、胸を撫でる。

「カイ、もう無理!」

竹田の腕が震えて、力の限界に近い事を知らせている。

「ゴメン、ゴメン」

しかし、相手は、ゾンビだ。この前の巨大な怪獣を相手にした時程、焦ることもない。刀を振った時、刃の先が相手に当たるように、間合いを計る。

「カイ、早く斬ってよ！」

「ハイハイ」

振り下ろされた刃が死体の首を刈り取る。

「フアアア！」

切り落とされた頭が奇声を上げる。

胴体がこちらに倒れ込む。

「うーわあ」

慌てて、避けたが、飛び散った血が服に着いてしまった。

血は、洗って、取れる物なのだろうか。格好に気を使うタイプではないが、この黒と灰のストライプのシャツは、実は少し気に入っていた。

悲しみと驚きを目で竹田に伝える。竹田が頭を撫でて、笑った。

「あー、そのうち、服も取りに行こうね」

本当は、今すぐ、行きたいが、服屋が有るような場所までは、まだここから少し離れている。

仕方なく、本の物色を続ける。

欲しい本は、有名な作家の人気の作品ばかりだったので、すぐに見つかった。

こういう広く、浅い本の読み方をしていると、数人の作家に絞って、本を読んでいる読書家には、怒られるのかもしれない。

竹田は、つかず離れずの微妙な位置で、後ろを歩いている。時々、自分の好きそうな本が有ると、手に取るが、鞆に入れることはなく、全て本棚に戻しているようだ。

本音を言わして貰えるなら、本は一人で選びたい。

冷たい対応をすれば、何処かへ行ってしまうかと思って、無言の

まま早足で歩いてみたが、全く距離が離れない。

「お前、好きな本とか無いの？ 一緒に探してやろうか？」

諦めて、付き合うことにする。既に絶対欲しいと思っていた本は、見つかった。

ここにも、いつでも来れる訳ではないのだ。集合時刻まで、何もしないのは、もったいない。

「上の階、行ってみようか」

竹田が長い黒髪を前髪の部分だけ少し掻き分け、目を逸らして、言った。

頷いて、手で先を歩くように促すと、エスカレータの方へ歩き出す。

エスカレータで鈴木とシンと金山の三人とすれ違った。鈴木が女性モデルの写真集やら女優のヌードを自慢げに見せ付けて来る。

「馬鹿が」

金山は、下を向いて、何とも形容し難い表情をしている。

竹田は、呆れたと言った感じに眉を上げ、目を細めて、笑った。

上の階に着いても、竹田は、本を持って行こうとしない。

ふと、ある考えが浮かんで、棚を曲がる。

ヌードやグラビアの写真集の棚をうろついていれば、気まづくなって、竹田も他の所に行くのではないだろうか。

棚の本を手にとって、わざとらしく、まじまじとグラビアアイドルの大きな胸を食い入るように見る。

竹田がその場にうずくまる。

「オエ！ 気持ち悪い」

口を手で押さえて、天井に掛けられたトイレの場所を示す看板を見ると、そのまま走って行ってしまった。

そこまで嫌悪感を露にされると、流石に傷付く。そんなに嫌だったのだろうか。

カイと竹田3

竹田は、すぐにトイレから戻って来た。

悪戯のつもりだったが、やり過ぎてしまった申し訳無さで、目を合わせられない。

「大丈夫だったか？」

本当は、恥ずかしい気持ちでいっぱいだったが、それを隠して、気にもして無い態度で話す。

「うん」

「この階、女子トイレ有るし、あそこの椅子で約束の時間まで、休んでよう。今、取って来た本読んでも良いし」

会話の流れが逸れたら、気まづくなってしまう。自分の感情に気付かれまいと、早口になる。

怒っているか確かめる為に、竹田の顔を視界の脇でこっそり確認する。「良いよ。大丈夫」

竹田は、本当に気にしていないようだ。包容力のある笑顔を保って、本棚を眺めている。

何か見つけた様子で、女優のヌード写真集を棚から下ろして、肩を叩いて来る。

「ねえ。この人、最近見なくなったよね。私、綺麗で、好きだったんだけどな」

さつき、イライラしていた勢いで、あんな事をして何だが、ヌードを目の前に堂々と女子と話すというのも、恥ずかしい。

言葉は、発さずに、目だけを写真集の表紙に遣る。

「ドラマも出てたし、人気もあったと思うんだけどな」

竹田は、独り言のように続けているが、このまま黙っていれば、妙に意識している事が相手に感付かれるだろう。

会話を繋がないで。

「そうだったっけ？ 何のドラマ、出てた？」

平然とした表情を保ちつつ、必死で話題を探す。いつも男友達と話す時、こんなに考えながら、話す事はないだろうに。

喋りながら、自分で自分の顔が赤くなっているのが解った。

「えっと……何だったかな？」

竹田がドラマのタイトルを思い出そうと、眉をひそめて、頭に手を当てる。

写真集でアンニュイな表情を浮かべて、こちらを見ている女優と考え事をしている竹田の顔がどこか似ていて、更に、竹田と目を合わせにくくなる。

本当は俺に怒っていて、当てつけにやっているのではあるまいか。諦めて、素直に謝ってしまおうかと考え始めると、誰かが下からエスカレータを昇ってくる音がした。

無邪気に笑って、駆けてくる鈴木が救いの神のように見えた。

カイと竹田 4

「時間前だけど、ぶっちゃけ暇だし、もう行かない？」

中に本を詰め込んだ袋を手提げで、鈴木がこちらに寄って来る。二人が三人になっただけでも、空気は変わる物だ。ようやく、何とか、まともに竹田の顔を見ることが出来た。

「もう欲しい本とか無い？」

「ん。大丈夫」

竹田が先にエスカレータを降りて行く。

何故か、この短時間でかなり体力を消費した。シャツが汗で体に引っ付いて来る。

「カイ、何で、そんな憔悴してんの？」

鈴木が真っ正面に立って、不思議そうにこちらを見ている。

鈴木 of 肩に手を置いて、その横を通り過ぎる。

「何でもねえ」

エスカレータの手摺りに乗っかかり、下へ降りて行く。

納得がいかない様子の鈴木に後ろから肩を掴まれた。必死に揺り動かして、俺の顔を自分の方向に顔を向けようとしている。

「え、何だよ。それ。気になるだろうが！」

肩を触られて、くすぐったくなり、手を避ける。

「ああも！ 何でも無いって！」

鈴木の方に向き直り、笑って、肩を突き返す。鈴木は、諦めて、大人しくなった。

ほんの何十秒か前の事だが、思い出すと、情けなくて、笑えて来る。

一階で、皆が出口に集まっていた。中に本を入れて、二重にしたビニール袋が床に並べてある。

「行こうか」

こちらが来ているの見た刈谷が荷物を持ち上げる。

間中がいつかのように荷物を押し付けて来る。ここで持ってしまったら、付け上がってしまうだろう。

「駄目ですよ。間中さん。子供じゃないんですから」

子供扱いして、プライドを傷つけてやれば、少しは、反省するかもしれない。

「無理、女の子だし」

間中は、そう言うのと、わざと高い所から荷物をこちらの足の上に乗落として、店の外へ出ていった。

「イッテーな！ 重過ぎだろ！ 中、何入ってんだよ」

袋の中を見ると、少女漫画が何冊も入っている。何十巻もあるシリーズを丸ごとごっそり持っているのだ。

「道理で、重い訳だ」

袋を肩に掛け、脇で挟んで、後を追った。

本人

ホテルに戻ってから、皆、他人が居ないかのように、読書に集中している。

今は、暇と言える程余裕の有る状況ではないが、読書は、暇な時の良い時間の使い方だと思う。

竹田は、俺に付き合って、結局、一冊も本を持って来なかったの
で、他の皆がが持って来た本を借りている。

何時間もうこうして、だらだらと過ごしていると、こういう時間が永遠に続くような気がして、ひよっとしたら、自分達は、今までもずっとこうしていたのではなかったか、とさえ思えてくるのだ。

だが、俺は、ずっとこうしていられない事を知っている。俺は、ここを離れなければ。

また、奴が来る。本当は、徘徊者と自分の間に因縁があると聞いた時に、皆から自分を遠ざけるべきだった。それを長い間、気付かない振りをして、先延ばしにしてきた。

皆がその事を知らないのか、知った上で言わないでおいでしてくれているのか。そして、知った上で黙っているとしたら、それは、氣を使つてのことなのか、側に居ても良いと思ってくれているからなのか。それを知る事は、出来ない。

だが、皆がどう思っているように、俺が本当に皆の事を考えるなら、そのどちらだとしても、出来るだけ早くここを去るべきなのだ。

時計が進むのが遅く感じる。少し本の文字を眺めて、そして、また、時計を見る振りをして、皆の顔を眺める。そうして、ただ、ひたすらに朝を待つ。

新種襲来

「犬がゾンビに襲われてるのか？」

「人の悲鳴も聞こえるよ！」

「じゃあ、人と犬が襲われてるんだろ」

声は、駅の建物の中から、聞こえる。

「行ってみるぞ」

建物に近づいていくと、中で反響した人やら犬やらの声が段々、大きくなって行く。中に居る人は、一人ではないようだ。

「騒々しいな。なんか、ただ事じゃない感じだぞ」

壁に沿って、忍び足で入り口まで歩き、二人で壁から建物の中を覗く。

「で、でけえ！」

巨大な犬。テレビでしか見たことのないような恐ろしい大きさの大型犬が人を襲っている。

押し倒された女性が必死に襲い掛かる犬の頭を抑えて、その牙を避けている。

「人と犬が襲われてんじゃなくて、人が犬に襲われてんのか！」

突然、何かがカランカランと音と共に地面に落ちた。

驚いて、見ると、鈴木 of 腰から、木刀が滑り落ちている。

犬がこちらに気づき、吠える。

「馬鹿野郎！」

胸から刀を取り出して、構える。

「ゴ、ゴメン！」

鈴木があたふたしながら、木刀を拾う。

犬がこちらに向かって来るまでの僅かな時間で何か策を練らなくては。だが、敵は、思った以上のスピードでこちらに向かって来る。

犬とは、こんなにも力の強い生き物だったのか。なす術なく、地面に体を叩き付けられる。

「えや！」

鈴木が怯えながら、武器で犬の頭部を殴る。

しっかりと木刀が当たる音もして、だらりと血が流れているのに、犬は、びくともしない。

明らかに異常である。木刀で殴られて何ともないというのは、生物の耐久力という話で片付けられない防御力だ。

しかも、先程から、刀の刃を押し付けられているのに、力を弱めることなく、全体重をかけてのしかかって来ている。

犬の目から、血が流れ、目に入る。

「うわ！」

力が抜けて、犬の牙が更にこちらに近づく。

襲われていた女性が急に叫ぶ。

「その犬、ゾンビです！」

タフガイ

もう笑うしかない。お手上げだ。

徘徊者に殺されて、死ぬのではなく、ここで犬に噛み殺されるのか。

そんな事を考えていたら、本当に笑いが込み上げて来た。

「ゾンビです！ って・・・もう解ってるよ。そんな事」

鈴木は、突いたり 叩いたりして、何とか犬を倒そうとしているが、どんなに犬の体を破壊しても、すぐに修復されてしまう。

だが、今まで、遭遇したゾンビには、痛覚は有ったし、その場では体を作り直すような芸当は、出来なかったはずだ。

この犬は、あの巨大な女と同じ様に、ゾンビとはまた違う別の何かなのだろうか。

「はあああ！」

突然、鈴木のものでない野太い低い声がして、犬の体が揺れる。声のした方を見ると、声の主であろう無精髭を生やした男が立っていた。歳は中年の手前ぐらいに見えるが、強い生命力を感じさせる力強さがある。

木刀で叩かれてもびくともしない巨体を揺らすのだから、何を使ったのだろうと思っていたが、男の手には、何も握られていない。まさか素手でやったのか。

犬が驚いて、男の方へ向き直る。だが、次の瞬間には、男が犬の口が開かぬように脇で、その頭を挟み込む。

「全員で殴れば、すぐ終わる！ 協力してくれ！」

それ自体に説得力が籠っているような声で、男にそう言われ、慌てて、自分も刀を握る。

「ええい！」

先程の女性が包丁を持って、走り寄り、犬に飛び掛かる。

ここで死ぬ訳には、いけない。東京から皆が出る方法を知るため

にも。

手首や肩に意識を集中させて、出来るだけ速く、出来るだけ垂直に刀を振り下ろす。

刃がほとんど抵抗無く、犬の体に食い込んでいった。これは、上手く刀を扱えているという事なのだろうか。

体を直すのにも、ある程度は、時間が掛かるらしい。犬の体は、段々とだが、修復が間に合わなくなっている。

「後、少しだ！」

男が犬の噛まれないよう頭を押さえながら、叫ぶ。ピンチに陥った事を理解したのか、犬が男を振り払おうとして、頭を激しく振った。

男が宙に投げ出されて、壁に体を打ち付けられる。

危険な状況だが、犬が攻撃に転じるまでに、後一太刀でも入れられれば、倒せそうだ。

だが、犬は、予想に反して、自由になった途端に、女性の頭上を大きく跳躍して、包囲から飛び出す。

人と駅の低い天井の僅かな隙間をぶつからずに、しなやかにすり抜ける様は、見ていて、惚れ惚れさせられる程だ。

「後、ちよつとなのに！」

犬は、駅の構内から逃げ出して、あっという間に遠くの点になる。鈴木と共に追い掛けようとする、男に怒鳴られる。

「無駄だ。止めろ！」

語氣に押されて、後ろを見る。何故だろう。この声で命令されて、逆らえる気がしない。相手を支配する威圧感と言うよりは、従いたいと思わせるような魅力がある。

男は、自分の背中を叩いて、何か異常が無いか、調べている。

何ともない事が解ると、険しい表情のまま、声の調子だけ和らげて、こちらへ歩いて来る。

「大丈夫だったか？ 君等、ここに潜伏している人間じゃないな。

あの犬は何度、倒しても、またすぐにここに攻め込んで来る」

刀を胸にしまつて、頭を下げる。

鈴木は、何も言わずに、男の方を見ている。こう見えて、人見知りだったりするから、余計、面倒だ。

「つい今朝まで、近くのホテルに居ました。ずっと立て籠もって生活してたんで、外がどうなってるのか良く解ってないんです。あの犬は、良くここに来るんですか？」

女性が近寄って来る。誰もが美人と認めるかは解らないが、はっきりとした目鼻立ちと厚い唇をしていて、短めの髪をカチューシャで後ろに纏めた髪型がサバサバとして気の強そうな印象をより強めている。

何にせよ、血の付いた包丁を持っているから、近付かれると、ぎよつとせずには、いられない。

「何回か倒してるんだけどね。中々、諦めない。最近、何故かああいう強いゾンビが増えてるのよ。ゾンビもある程度ダメージを与えると、光になってどっか行っちゃうのは、知ってる？」

鈴木は自分に向けて言われているのに、黙ったままにいる。答える所か、こちらに目を向けて、俺に答えるよう頼んで来る。

「一度、見た事あります」

変に思われないように、代わりに答えた。

俺の方が答えたのに、驚いて、女性がこちらを見る。

「そう」

話を遮り、男が割って入る。

「良ければ、一緒にこの駅に居てくれないか？ 若い人達がいると、助かる」

「すいません。それは、出来ないんです。俺、何か幽霊に追われてるらしくて。でも、こいつなら」

安全な場所で過ごしていれば、助かる可能性は、高くなるのだ。

何とか鈴木は、ここに置いて行ってしまうたい。

男が鈴木を見て、意思確認しようとする。

「いや、俺も、すいません。テレビ局に行かなきゃならないんです」

どうして、今になって、急に話し出すのか。しかも、余計な事まで。

「テレビ局？」

また、面倒で長い説明をしなければならぬ。

「鳥居の中で会った伊弉諾って人に言われたんです。テレビ局に行くように」

男が目丸くする。

「君等、あの中に入ったのか！」

「いや、俺は、入ってないっす」

鈴木が慌てて否定した。

今度は、女性が話に割って入る。

「伊弉諾って、あの神様の伊弉諾？ テレビ局ってどこのテレビ局？」

以前、どこかで聞かれた質問だ。相手が違うのだから、仕方がないが、中々、うんざりさせられる。

「伊弉諾が何者なのかは、解りません。テレビ局だって、何処の事なのか解ってる訳じゃないです。でも、今、テレビ局と思ったら、放送を続けてるあの局しかないと思います」

男は、女性の方を見て、首を傾げる。

「向井。お前、携帯テレビ持ってたな。どこの局の事が解るか？」

「九条テレビの事じゃない？ ていうか、私が持ってるのは、ワンセグ機能付きの携帯で携帯テレビじゃないよ」

男は、女性の話の半分を無視して、「テレビ局か」と呟いた。

しばらく考えてから何かを決めたように、また、話を続ける。

「今日、一日で良い。ここで過ごしてくれないか？」

今日、一日。今が何時だと思っているのだろうか。

今の時刻は、ようやく、朝になって七時過ぎだ。今から、明日になるまでここに過ごしては、何時間も時間を無駄にする事になる。

「あの、僕等、さっきまだホテルを出たばかりです。こんなにすぐ

に休んでいたら、テレビ局に着くまで何日掛かるか解らないですし。食料だって限りが有るんです」

「ここに居る間の食料なら、俺達が出す。それに少しなら今持っている食料に足してあげても良い」

男は、うっすらと笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018v/>

異界トーキョー

2011年11月21日18時08分発行